
Let go レットゴウ

安部 時定

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Let go レットゴウ

【Nコード】

N2630C

【作者名】

安部 時定

【あらすじ】

この世で人が生まれる人数と死んでゆく人数が比例していたら…。主人公ケンタはある日keiという女性に出会い、人が死ぬ人数をコントロールするという特殊な役割を担わされる。生まれ持ったの超暗記力を駆使して、keiと共に、恐ろしく大きな運命に立ち向かって行くのだけ…。

DESIGN : 1 オマエハダレダ (前書き)

自分の意思とは別に、行動してしまった、言葉を吐いてしまったという現象はどのようなメカニズムなのか？そして、同じ事故に遭い、そこで生き残る人と死んでゆく人の違いは。人間の中である、偶然や奇跡は、実は必然であったなら……という考えの下、ある仮定を試してみました。不思議な出来事を出る限りロジカルに？考えていった私なりの結論です。正しい間違いではなく、こういう考え方もあるのかと思つて頂けたら幸いです。

DESIGN : 1 オマエハダレタ

宇宙のハジマリは
いかなるものか。

万有の、そして全ての
ハジマリは……。

そもそも、ハジマリ
とは……。

今、地球で生きる

66億余りの人々。

もし人が蘇るといふ

概念の下、

思考を廻らせるならば、魂はどこへ還り、
どこから戻るのだろうか。空間は多次元に
存在するのか。

見えない沢山の空間が

確かにそこに存在し、

それは決して交わる

事なく、

同じ時間を並行する。

僕らは何がきっかけで、いつ、どの次元に移行するのだろうか。

あるいは……

しないのだろうか。

(2007 . 6 / 24 . 14 : 34)

静かな商店街にある

八百屋【ヤオパチ】の

店先でパイプ椅子に
座って腕を組む青年が
いる。

田中ケンタ。

ケンタは、

実家【ヤオパチ】の

店番をしていた。

プチアフロ気味な、

伸びた天パーが邪魔

なのか、

チャコールグレイのバンドナを、太いハチマキのように額に巻いて
いる。暖かな陽気に、

いつしかうつらうつら。ブウウウウ…。

八工か? と思い、

片目をうつすら開ける。それは不規則にケンタの周りを飛んでいた。
不規則の中にも規則性は無いものかと考え、

来るであろう軌道に

ケンタは手を伸ばす。

瞬間、

手を握り締め

八工を捕まえる。

ゆっくりと顔に近づけ、手を広げた。

何もない。

八工は不規則な飛行で

空へ消えていった。

見上げると

太陽がとても高くに

あった。『すみません』女性の

声だ。

『いらっしゃい』

『ニンジン二袋と

キャベツ一つ、

玉ねぎ六個に

キュウリ三袋、

それとナスも二袋

ください。』

『1350円ね』

ケンタはすぐに答えた。女は感心して、

『早いですね。』と返す『こういうのだけは

得意なんだ。』

言いながら、

ケンタはにやける。

『計算が?』女が問う。『いや、ぜんぶ暗記

出来ちゃうだけ。玉ねぎが一個60円なら その倍数を覚えて、

他の野菜と

それぞれプラスした数を全部覚える。』

『何万通りもあるじゃないですか。』

『そうだね。』

ケンタのその落ち着いた言葉を聞き、

女は、

安心した様子だった。

『予定通り』

女は小さく呟く。

ハジマリやオワリという概念は、

人間だけのものなのか?あるいはそうであるならまさしくこれが、

二人のハジマリであったのだろう。

宇宙のハジマリは

いかなるものか。万有の、そして全ての

ハジマリは…。

それからどれ程経ったのか。ケンタと女は、しばらく話した。

『田中ケンタ、24歳、

独身、大学卒業まで

人生に大きな波はなく学生の頃から実家の八百屋を手伝い、

進むべき道も分からないまま、実家を継ぐ事を考え始め、今に至ると』言いながら、

女はケンタの顔を

見つめて、表情を探す。ケンタは怪訝あらわに女を見返す。

『あんだ何、変な団体の勧誘?……よくまあそこまで調べたもんだ。まあいいや、仕事の邪魔すんな。』

『今日の夕方のニュースを見てください。

あなたに関係してる人がニュースに出ますから、ゼットイニワスレナイデクダサイ』

女の最後の言葉に、ケンタはひどく

懐かしさを感じた。

記憶をたぐり寄せるが、何も思い出せない。とにかく早くこの場を

済まそうと、手際良く、必要な商品をまとめる。会計を終え、両手いっぱいの商品を重そうに運び、

女は帰っていった。

帰るがてら、

一度だけ振り返り、
ケンタを見つめた。
見られた男は知らぬ
ふりをし、見栄えの悪い棚を整理した。

2

陽が落ち始め、
風が出てきた。

夕方のピークタイムを
終えて、

ヤオパチは静かだ。

ケンタはまた、パイプ椅子にゆっくり腰を落として、腕を組む。
昼間の女の言葉をまた
思い出してしまった。

、夕方のニュース、あなたに関係のある人、
、ゼットイニワスレナイデクダサイ、

.....

最後にあの女が言った
言葉.....

なんか聞いた事あるな、テレビか、ドラマか、
歌？ああ...わかんね。

客もいないし、
今日は閉めるか。ケンタは、

実家【ヤオパチ】から
少し離れたマンションに独りで暮らしている。
帰り道、コンビニで

ビールとスナック菓子を買って家に帰る。

207号 田中の表札のあるドアを開け、
静まり返った部屋の
電気をつける。

リモコンを捜し、

まずはテレビをつけて、買ってきた缶ビールを開ける音で、

今日一日の疲れと

緊張がほどけてゆく。

ビールをひとくち

口に注ぎ、ぼーっとテレビを見入る最近も物騒な事件が絶えない。

今日もそんなニュースが続いてる。

まだ若い女性が、

付き合っていた男性に

殺されたらしい。

殺した男性もまた、別の場所で自殺を図った。

『またかよ』

こんなのばかりだ、とため息をつく。

女性の名前を聞いても

ピンとこなかったが、

写真を見て思い出した。『あれ？』

確か中学時代の

知り合いだ。男性の割に、

比較的整理されてる

部屋の中をうろろろし、おもむろに本棚へ向う。『中学の卒業アルバム

……あつた。』

アルバムを開き、

一組一組の生徒の写真をじっくりと見る。

事件の女性の顔がない。もう一度見る。

ない。

自分の記憶が間違いか、いや違う、確かにそこに写ってる制服を、彼女は着ていた。

その時、
昼間店に来た女の言葉を思い出し、一人呟く……。『ゼツタイニワス
レナイデクダサイ』

………！

後輩！

たしか部活バスケの後輩だ。

そうだ、卒業式の日、
彼女に貰った手紙と
あの言葉、

『ケンタ先輩、

卒業しても私の事、

ゼツタイニワスレナイデクダサイね。』

記憶が遡り、その時の

シーンを再現させる。それは、全てがその当時のままの記憶だった。

今日の今日まで

忘れ去られ、

錆び付いた記憶、

自分以外の作用が働いて蘇った記憶、

必要の無いものは消去

されていく、記憶。ケンタは、暗記力や記憶力には自信があった。

大学まで無事に卒業

したが、ほとんど勉強はしなかった。

試験前も、ポイントの

ページを数行読めば、

その時授業で聞いた、

先生の声が

まるまる蘇ってくる。

一字一句全てだ。

合間の咳ばらいや、

誰かのあくびまで。

その時の
ほぼ全ての現象が、
記憶として蘇る。
吐き気がする程、
鮮明だ。
だから、少しでも必要がないと決めた記憶は、
無意識に忘れて
しまうように、
意識を働かせている。
彼女の記憶も、
その一つだった事に、
自己嫌悪がみなぎる。
覚えておくべき事と、
忘れ去る事の区別が
未熟な自分を、
静かに悟る。
そして、
一つの疑問が
浮かび上がる。
店に来た女の事だ。
あの女は一体……。
と同時に、
インターフォンが鳴り、記憶の中の男は突然、
現実に戻される。
面倒臭そうに、
ケンタは玄関に向かい、レンズ越しに外を見る。！
昼間の女だ！！
チェーンを付けたまま、ゆっくりとドアを開ける聞きたい事は山ほどだ。その中でも、最も
プライオリティの高い

ものを、脳にぶつける。第一声、
『オマエハダレダ』

DESIGN : 2 胸騒ぎ

！ビリビリビリビリ… 目覚ましが鳴る。

重そうにまぶたを少し

開けて、アラームを

止める。当たり前だが、朝は眠い。

昨日はいろいろ

あり過ぎたので、

特にきつめの朝だ。

深くはないが、

知り合いの後輩の死、

それを予告した女、

さらにその女がオレの

部屋に現れた。

おかげ様で充分に

寝不足だ。

思い出すと頭が痛い。

昨日の夜

『お前は誰だ』

『私はk e iと言います』 『そうじゃなくて…』

『はい…』

『何で彼女の事知ってたんだよ』

『…… 事件の発生時間、彼女が殺された時間が

今日の13時17分。

殺した男が、自殺現場で近くの住民に発見され、警察が到着したのが、

同日15時35分。

その後マスコミは報道の準備に急ぎ、
最速でも夕方のニュースになります。

だから私が他で情報を
得る事は出来ません。 もちろん私は

マスコミの間では
ありませんし、

もしマスコミの間でもあなたに話した時間に
その事を知る事は

不可能ですからね。』

『自殺した男とあなたがグルだったら？』

『そうきましたか。 そうですね、私とその男が

グルじゃないという証明は難しい。確かにこの出来事だけでは、私
の事を信じて貰うのは少し物足りないですね。』

『あなたオレに近づいて一体何を企んでるんだ』その言葉を聞いて、
女はかすかににやける。

企む。

あるいはそうかも

知れない。

今日ケンタに会って、

殺人事件を伝え、

そしてこれからある目的のために、二人が共にしていく事は、彼女
の計画の内にあるという事。

なぜ彼が特異に暗記力・記憶力に優れてるのか、なんのための能力
なのかは（少なくとも彼を対象に言えば）、

これからイヤと言う程

その意味を味あわされる事になる。

しかし、彼女を呼んだのは紛れもなく、

彼なのだ。

その事を彼自身が

知らない事も、

彼女は承知の上だ。『今日、仕事が終わったら、駅前のLという喫茶店ご存知ですよ。そこに来ていただくませんか、その時全てお話しします』

1

結局分かった事は、その女の名前、

keiだったっけか？その名前も本名かどうか…。そして、仕事の暇な時間に、昨日の事件についていろいろ調べた。

新聞も見直したし、テレビ局にも

問い合わせたが、

keiの言う通り、昨日の夕方のニュースで初めてその事件を取り上げた。もしかしたら、本当に自殺した男とグルなのか？オレも殺す気じゃ…。

でもなぜオレが

殺されるんだ？

知り合いだっただからか？いや……

どうもじっくりこない。やはり、Lという喫茶店に行くか…。

ひとけのある所だし、

いざとなれば力で負ける事はない。

他にも仲間がいるか？

……ん、

このまま行かなくても、向こうから来る確率は低くはない。

keiが来るまで

気持ち悪いままだが、しかし来るとも限らないわけだ。

どうする、どうする…。いや、少しでも早く

今の現状を終わらせて、楽になりたい。

やはり行こう。

『おい、ケンタ』大きな声だ。

『おやじ、どしたの』

ケンタの父親だ。

使いふるしたキャップを被り、黒縁メガネの姿は年季が入っている。

来年でもう60歳、

腹もだいぶ立派に

膨らんできた。

背はケンタよりも低く、とにかく声がでかい。

『一丁目通りの文具屋の小林さんがよ、子供を

ウチに預けてえつつん

だよ、明日からそいつ

来るからよ、頼むぞ』

相変わらず声がでかい。『頼むぞって何それ』

『お前がいろいろ教えてやってくれ、宜しく。』『いきなり言うなよ

そゆ事。たたくよ…。』『そんじゃ、行って来るでえ。』『そう言う

と、

荷台いっぱい野菜を

積んだ、仕事用の軽トラに乗り、走り去った。

どうも怪しいと思った。先週末では、大体店番は親父で、オレが車

売り、今週は店番頼む、の

意味が今分かった。

それにしても、眠い。

2

睡魔と戦いながら、

なんとか無事に1日の

作業が終わった。

考えはまとまらなかったが、ケンタは喫茶店に

向かっていた。

不安は拭えないが、
今歩いている方向が、
結果的にケンタの
結論になる。

胸騒ぎが消えない。

そして、その胸騒ぎは、やがて現実のものに。

これから起こる

大いなるうねりの中へ、螺旋の中へと、もう既に歩き始めている事に、ケンタはまだ
気付いていない。

その大きな大きな数々の出来事に耐えうる精神力が、今のケンタに
有ると無いに関わらずだ……。

DESIGN : 3 全ての声の主

喫茶店Lの階段を登り、 2階の入り口に着くと、ガラス越しに店内が

見える。

数席に客が座り、
くつろいでいる。

窓際にkeiもいた。

ぼんやりと

窓に額を寄せ、

外を眺めている。

まだ少ししか面会がない女性だが、

客観的に彼女を見るのはこれが初めてだった。

こう見ると、かわいい

普通の女の子だ。

年は24〜5歳くらいか、見ようと思えば10代でもいける。

肩に少しかかる髪の毛は真っ直ぐな黒髪。

整った子犬のような

顔立ち…。

どうみても悪さなど

出来る容姿ではない。

いや、いわゆる

こういうタイプを

小悪魔と言うのか…。

ドアを開けると、

ジャズが流れている。

一時の安らぎ。

ケントはジャズが大好きだ。頭さえレゲエフレーヴァーさながらだが、

これはあくまでも地毛の天パーなので、
意図的ではない。

これで濃いめの
コーヒーを飲みながら、ゆっくりと時間に
寄りかかれたら、

どんなに贅沢な事か。

keiが自分に気付く。

妄想もつかの間、

keiに視線を合わせ、

前へと進む。

目の前に座り、

コーヒーを頼む。

ケンタは、何から聞けば良いのか迷いながら、

ウェイトレスが運んで

来た水を口に注ぐ。

数秒見合い、

『まずは、納得のいく

説明が欲しい。店に来た事から後輩の死、そしてお前が誰なのか…。

』

『……分かりました。』 keiはそう言うと、

テーブルに両手を

ヒジまで乗せて、

手の平を上に向け『私の手を握ってください』

なんの真似だ…？

この女の言う事やる事がまったく理解出来ない。 keiはケンタの

心を察して、尚も言う。

『両手を握れば、聞こえます。いや、解ります。理由が大体…掴め

ます』 考えて、

keiは話を続ける。

『心の言葉に耳を傾げるだけですよ、むつかしい事は何もありません

ん。

その言葉が教えてくれただけです。

あなたの後輩の死も』

いよいよ宗教じみてきたようだ。

手の平には、見た感じ

何も付いてないようだ。とにかく訳が分からんが話も先に進まない。

ゆっくりと用心深く、

両手を kei i の手の平まで運ぶ。

そつと手を重ねて、

握り締める。

相手が何をしてくるか

分からない状況で、

ケンタの手に力が入る。『イタイです…』

kei i が言つと、ケンタはそつと力を緩める。

手の平に汗が滲む。

kei i は目を閉じたまま、ケンタに優しく

語りかける。

『大丈夫、もつと力を抜いていいです。』

言葉が体を駆けてゆく。水の波紋のように、

言葉を尚も響かせる。

『もつと、もつと……』言いながら

kei i はゆっくりと両手の人差し指を這わせ、

真つ直ぐに伸ばし、指の先で、ケンタの脈を押し始める。

『抵抗しないでくださいね。このまま、ゆっくりと、あなたは全て

の答えを見ますから、見たければ、どうかこのままで……』

緊張が一つ、また一つとほどけて行く度、ケンタは言いようのない

心地良さを感じてゆく。

意識が、現実から…

はなレテ……。

………！

突然体が宙に浮く、

いや、沈んでいるのか？見渡す限り、何もナイ。いや、在るのかも知れない。

つい何秒か前までの

喫茶店での風景がない。感覚が、

あるようでない…。

夢かうつつか。

明るい、

とても明るい景色だ。光が何重にもうごめいているようだ。

『田中ケンタ…。』

真後ろから声がした。

ケンタは慌てて振り向くと、椅子に腰掛けた男がいる。

重厚な台座のような椅子で、黒くてとても重そうだ。いろんな所に金具が施してあるが、剥げていて全体的に黒みがかっている。高価なアンティークのようだった。

男は浅めに座り背もたれに寄りかかり、右手で頬杖をついている。

欧州を思わせる衣装は、どこかの王子のような、悪魔のような。

実際に見た事はなかったが、どちらもケンタの

イメージの中にあつた

それだ。

髪の毛は全部が上に

持ち上がっていた。

かなり固めのジェルを

塗りまくった

へヴィメタル宜しく、

ツヤと上がり方は

申し分ない。

顔は、ケンタに似ているというより、

そっくりだった。

ケンタはじつと相手を

見ていた。

男が口を開く。

『今ここでこうしている瞬間にも、

沢山の命が始まり、

そして終わりを告げる』

『ここは何処で、あんたは…誰』男に尋ねる。

『お前は今、

意識の中にいる。

私は、全ての声の主。今お前に見えている

私の姿は、お前が

イメージしたものだ。』『…ここはオレの意識の中なのか？』

辺りを見渡しケンタは呟く。

『全ての…還る場所だ、今たくさんの事を言っても仕方ない。まず

お前が私を呼んだ、お前と私を繋ぐものが、k e iだ。

細かい事は後で分かる。そしてしばらくは、

これから私が言う事を

お前はしなくてはならない。何故ならお前には

その責任がある。』

『なんだよそれ』

どいつもこいつも勝手な言い分並べやがって。

『勝手な言い分…、

そうかも知れないな。

今理解しろと言っても

所詮無理な話だ。理解はまだしなくていい。

とにかく聞け。』

男がそう言うと、ケンタは黙って男を見つめ、

静かに言葉を待った。

『お前が生きているこの世界…少なくとも見えるもの全てを信じる

事が

出来るだろう。

しかし見えないものは

どうだ、それらはそこに存在し、存在しない。

例えば、そう…霊だの魂だの、お前はそれを信じるか？』

ケンタは少し黙り、

信じないなと思った。

『なるほどいいだろう。ではなぜ信じない？』

なぜって、

オレには見えないから。『蛙は…』

『蛙？』

ケンタが話に割り込む。

『蛙は、動いていないものは視界に入らない。

見えていないのだ。』

ふーん、だから何た。

心の中でケンタは呟く。『人間は動いていなくても、そこに人がい

れば、人だと認識出来る。

つまり蛙に見えないものが、人間には見える。

であるならば、

人間に見えないものが

あっても不自然でないという解釈が妥当だ。』

まあ、言ってる事は筋が通ってるけど。それで？』この世は多次元に

存在する。お前が今こうしている間にも、見えない世界も

また、同じ時間を

並行して進んでいる。

この世で見えるもの、

感じる事などは、

全ての空間の中では微々たるもの。

小さな小さな銀河系。

その中のまた小さな地球でみな生きている。』

……。ケンタは考えながらその続きを聞いた。

『しかしその並行した

それぞれの次元は、
時に重なり合う。

その重なり合う時を
伺っているのが、

霊体・幽体、そして

世にいう悪魔の存在だ。人はいつか死に、

元きた場所へ還り、そしてまた生まれ変わる。

そのサイクルは連動している。』

連動って…。

『人が死ぬ数と生まれる数は、比例しているという事。極端に言えば、10人死ねば、生まれてくる数も…。』
10人？

『正しく。しかしながら現在このバランスが
保たれていない。

この状態がこのまま
続くと、予定よりも早く地球が活動を止めてしまう。』
地球が？

『予定ではお前が5回目の生まれ変わりの時代に地球が停止する。
早まってしまつと、

他の惑星に影響する。

それは宇宙を縮める事になる。宇宙を縮めると
いう事は、

ダークマターが広がるという事。』

おいおい、ますます訳が分からんぜ。ダークマターとか言われても
…。

『簡単には、この世で見えない世界のようなものだ。』
それが広がると、ヤバいのか？

『全てはバランスだ。

宇宙も、

ダークマターも、

生きとし生けるものに

ナクテハナラナイモノ。宇宙は少しずつ、
ダークマターとの比率を整えている。

それは、宇宙が広がり
続けているという事。『ダークマターって、
そんなに広大なのか？

『ダークマターとの
宇宙の比率は、

まだ10%に満たない。』そんなにかよ……。でも、地球が停止する
って…。オレ達人間はどうなる？『相当な痛みを伴うが、進化の為
には仕方がない事。それも全て、

人間の本能だ。

お前達の意味で、

地球は停止するのだよ。停止後、進化の為の
選択肢は幾つかある。

もちろん各々可能性は
違うがね。

しかし、停止が早まるとその選択肢が減ってしまう。これは人間に
とってかなりマズイ事になる』なんとなく言ってる事は…なんと
なく分かった。で、なんでオレにそんな難しい話をしてるのか、さっ
ぱり理解に苦しんでる。そろそろこの悩みを解決したいんだが…。
ケンタの心の声を聞き、男はその言葉を待っていたようだった。

『よろしい、

では本題に入るぞ。

覚悟して聞いてほしい。いいか？』

唾を飲み込む自分に

気付き、汗が出始めた。鼓動が大きくうねる。

瞬間であり、

永遠であるこの時間を、全身で受け止める。

ケンタを形成する、

一つ一つの細胞が
覚醒する。

いよいよ始まる物語に、
ケンタは生きる意味を
知る事になる。

DESIGN : 4 二つの力

ケンタがその男と会ってどれ位経過しただろう。ほんの数分のような、

もう一時間も経つような不思議な感覚…。

全ての声の主 というその男は、無意識の中でケンタが自分を呼び出したと話す。

keiもまたケンタの意思によって現れた。

当の本人は何が何だか

サッパリだが、

全てのものに原因と

理由があるなら、

今回の経緯も、

少なからず

ケンタの本能や意思が

含まれているのかも

しれない。

『お前がこの世で

すべき事、それは

死んでゆく人の人数を

コントロールする事。』死んでゆく人の

コントロール…？

『毎日の生活の中で、

いろいろな現象を

目にする事だろう。

そこで知る事件や事故。自然や人によって、

あるいは自分自身で

死んでしまう者がいる。同じ事故に遭い

死ぬ人間もいれば、
生き残る人間もいる。

この境界のメカニズムにはそれぞれ意味を持つ。どちらに転ぶかに
重要な作用を及ぼす要因が、
幽体・霊体・悪魔の
存在だ。

彼らこそが人を助け、
人を殺す大事な要素
なのだ。

自分の意思では
どうしようもない時、
次元が歪む瞬間だ。

しかしそれは人間には
見えない世界だ。

いや、歪んだポイント
での現象くらいは、

元来見る能力は
備わっているが、

人間はその力を自分で
捨ててしまう。

だから一部の人間にしか見えない。

たまたまその場所にいた事で死んでしまった…

偶然昔の知り合いに

会った…。

たまたまも偶然も

一切ありはしない。

全ては必然で

成り立っている。』

オレがここに来たのも

必然…、よく分からん。『お前は次元の歪みを

見る事が出来ない。

だから生身の人間として動き、これから起こる
沢山の事故や事件に

関わっていく事になる』何でオレなの？

どういう必然性が

そこにある？

『お前が、客観的に

自分の事を意識している能力は何だ？』

客観的に…。

記憶がいい事か？

『そうだ。

これからお前が

動いてゆく中、

あらゆる状況でその力が必要なのだ。

そのためにお前はその

特殊な能力を持って

生まれてきたのだ。

難しい事ではない、

記憶力があればな…。

やり方はk e iが伝える。

苦しいが、

生きてる事を忘れるな。今ここで確かに

生きているという事。

そろそろ時間だ、

きたるべき時に、

また会おう。ではな。』『おい、ちょっと待て、まだ終わってねー

よ。』言葉虚しく

ヘヴィメタ男は

ケンタの前から

姿を消した。

そして、体が重くなる。光が消えて、真つ暗な中から声がする。

『…さん、…ケンタさん…、ケンタさん。』
声を聞き、暗闇の遠くの方からまた小さな光が迫って来る。

一瞬のうちに真つ白な景色がケンタを包んで、目を開くとk e iがいた。周りの雰囲気も先程と変わらぬ喫茶店Lに帰って来た。

なんとなく窓から外を見る。

結構人が歩いている。ついさっきまでの男

全ての声の主 とのやりとりからの

逃避のような行動に気付き、k e iを見る。

『私も、あなたに呼ばれた一人ですよ。』
今までの流れを客観的に冷静に振り返って
も、

やはり理解に苦しむ。

が、何故かあの男の言葉一つ一つがケンタの心に入ってきた。
普通に考えれば普通じゃないかもしれない、

いや、もはや自分が普通じゃないかも
しれないが、

自分が持っている
本能に従って言えば、
あの男を信じる事が
出来る。

勿論根拠などなく、
それはあくまで
感覚的なものだ。

そして、k e iがこれから何を言うのか興味があつた。

そんな目を、ケンタは

k e iに送っていた。

『明日から共に行動

お願いしますね。』

これから沢山の事を

二人でやっていきます、声の主が道しるべになります。』

多分何を言っても無駄な事は理解していた。

まずは聞こうとケンタは思った。

『具体的に聞かせて

くれ。明日から二人で

何をするんだ？』

『もう一度、

手を乗せてください。』そう言って、k e iはまた

テーブルの上に

手を乗せる。

今度は何も探らずに、

k e iの小さな手を

握り締める。

ケンタの手からくる

温かい感触を確認して、k e iが言う。

『目を閉じてください』ケンタは言われた通りに目をつむった。

何回こんな事を

してるのか。

端から見れば仲むつまじきカップルだ。

そんな事は

おかまいなしに、

keiは話を進める。

『これから少し先の未来をイメージで

ケンタさんに送ります。記憶してください。』

それを聞いて、すぐに

映像が飛んできた。

それは今と変わらない

店内の風景だった。

自分から見て右側の端の席に座っている女性の客がくしゃみをする。

店員がコーヒーを

自分のテーブルまで

運んでくる。

右端の女性の客がまた

くしゃみをする。

今度は二回。

カウンターにいる

マスターは洗い終わったカップを拭いていると、自分の3つ後ろの

席に

座った年配の、

頭の禿げた客が

新聞をたたんで、

レジに向かいながら、

ごっそさん、

とマスターに言う。

マスターは軽くお辞儀をして、どうもと返す。

お待たせ致しましたと

言いながらコーヒーを

置いた女性店員が、

すぐにレジに向かう。

ん……。

突然真つ暗になった。

目を開けると、k e iが

優しい顔でケンタを

見つめながら、

何かを言っていた。

『20…19…18…17…』

数を数えていた。

秒数？

今見たイメージは、

これからここで

起こる事？

『未来が見れるの？』

ケンタの質問に、

k e iは数えながら

うなづく。

しかもk e iはそのイメージを自分に送ってきた。これが、k e i

の能力

なのか……。

『4…3…2…』と言いながら、k e iは店内に

目をやる。

つられてケンタも

店内を見る。

！……。

完璧なまでに同じ。

さっきのイメージと全てがシンクロしていた。

しばらく店内の様子を

先程と同じイメージの

所まで見た後、

ケンタはk e iを見て、

言葉を待つ。

『今の状況に、
ケンタさんが入ったら
どうなりますかね。』

オレが入ったら？

『とりあえず、

まるつきり一緒という

事は無くなるな。』

特に言葉を選ばず、

簡単に答える。

『そういう事を

してもらいたいです。私が信号を送って、

ケンタさんがそれを

記憶する。

後は、その中に入って

いろいろ動いてもらえればと思います。』

それからオレはしばらくkeiの話聞いては、

口をはさんで、

うなずいたり、

考えこんだり。

普段こんなにも

自分について、

自分の住んでる世界に

ついて考えた事が

あっただろうか。

とにかく頭から

煙りが出そうだ。

人に必要とされる事は

喜ばしい事なのだが、

内容が飛び過ぎて
いるため、心の底から
喜べなかった。
それでも悪い気分じゃ
なかった。

バカかもしれないが、
本当に何かが回り始めた感覚を覚えたからだ。

明日はk e iの方から
連絡をくれるとの事。

家の仕事はどうするのか聞いたら、

そのために新人を

雇ったんだと言われた。もしかして親父が言ってた知り合いの息子の
事か？まあいいや。

今日はもう考えない。

いつも使わない脳を
ずーっとトツプギアで

フル回転させてたので、やたらと眠い。

ダークマターも

地球の停止も

どんと来い、

今のオレには

睡眠が必要だ。

明日の事は

明日考えよう…。

かくしてケンタとk e iの出会いにより、
運命のコアが
スピンする。

二人が進む螺旋の先は、希望の未来か、
絶望の闇か、

その先にあるものは、
全ての声の主のみが知る。
。

DESIGN・5 コンセントレーション

(2007 6/26 10:26)

1

今日は朝から曇り空。
相変わらず太陽は
見えない。

文具屋の小林家の息子が早速今日から働いてる。『ケンタさん。
これ、どこ置けばイッスカー』と、茄子のいっぱい
詰まった箱をケンタに

元気よく見せながら
言うのは、小林こうじ。

大学院に通いながら、
今日からヤオパチで
働く事になった。

二人は地元の知り合い
だった。

こうじはいつも何か
でっかい事したいとか

何か面白い事ないかとかいつも喉が渴いた
ガキみたいにうるさい。自分もガキみたいな
もんだけど、

比較の域を越えている。頭がいい、というか勉強がそこそこ出来る
だけ。その頭を生き方や

方向性に応用出来ない。いわゆるバカだ。
人の事言える

立場じゃないが、

こいつにだけは言える、バカだ。

『ちよつとお、聞いてンスかケンタさん。』

『みかんのとなり』

『みかんでドコスかー』 『リンゴのとなり』

『リンゴてー…』

アホだ。

二人してアホだな。

でもこのくだらなさが

嫌いでない、

むしろ好きだ。

『平和だなあ』

あくびがでる。

するとケンタの携帯が

鳴る。k e i だなとケンタは感じた。昨日番号を

教えておいた。

何か胸がモヤモヤする。興奮でもなければ、

憂鬱でもない。

少し携帯を見つめてから通話ボタンを押す。

シアトルとかロンドンは1年の半分以上が曇り空だって聞いた事がある。

だからその風景が

当たり前なのか、

それとも静かな気持ちになるのかな…。

2

ケンタは自分の車を、

材木置き場まで

走らせていた。

まだローンが残ってる。駅を越えて信号3つめを左に曲がって、

2つめを右に曲がると

それはある。

小さい時はよくここで遊んでいた。

何年ぶりか、懐かしい。先程の電話はやはりk e iからだった。

k e iがここを指定してきた。しかも車で来いと。店番はこうじに任せて

うまく出てきた。

目的地に近づくと、

k e iがいた。

ブレーキペダルを

ゆっくりと踏み、

車のドア越しに

k e iと話す。

『簡単に説明しますから隣に乗せてください。』k e iが助手席側にまわり車に乗り込んでから、

脇に停車させた。

『イメージを送ります

から、両手を。』

『あ、はい。』

昨日と同じように二人は手を握り合う。

k e iが真剣な眼差しを

ケンタに向けると、

静かに目を閉じる。

それを見てケンタもまた目を閉じる。

イメージはまだ来ない。暗闇の中で数秒経って

から、ゆっくりと映像が頭の中に映し出される。信号のある一車線

道路。それと交差する小さな

道路の四つ角の一角に

車が突っ込んでいる。

黒い4WDだ。

前の方はそのまま民家に埋まっている。

周りには人が結構いる。小学生の団体、体操着でリュックをしょって。遠足か何かか？

大人もいる。

年配の夫婦も見える。

ジャージのオツサンや

黒いスーツ着た女性等。人が…倒れている。

1…2…3…4、7人。

ヤバいな……。

5人が小学生、

車の右斜め後ろに

3人の小学生。

一人は男の子で、

瞳孔が開いている。

血は出ていない。

もう一人は女の子で、

左足と首が変な方に

曲がっている。

耳と鼻から血を

出している。

隣にもう一人女の子、

かすかに息をしている。苦しそうにうなっているが、声になっていない。4人目の小学生も女の子のようだ。

二人から少し離れた所でうつ伏せで倒れている。その傍には男の子。

左手を大きく伸ばして

いる。ん、中指が

ちよつとだけ動いた。

意識はあるのか…？

6人目はサラリーマン風の若い男性。

車の運転席脇に

倒れている。

顔中血だらけだ。

7人目はちょうど

四つ角の中央付近に

仰向けでいる。

右足が…反対に

曲がっている。

こちらにも意識があるのかどうか…時おり体が痙攣している。

いろいろな声が飛び

交っている。

誰かが叫び、

誰かが悲鳴をあげ、

誰かが倒れた人間に

駆け寄る。

初めてだ、

細かい部分まで記憶

出来るのに、

自分自身で曖昧に

している。

もうこれ以上見たく

なかったので、

ケンタはすぐに

目を開け、k e iから

手を離れた。

k e iはケンタを見つめて言う。

『これから実際に起こる事です。』

強く真つ直ぐな言い方にケンタは圧倒される。

体勢を前に向き直し、

遠くを見る。

動揺を隠せないケンタの左手にそっと手を置き、静かに話す。

『いきなりあんな映像を見て、辛いと思いますけど、気持ちをきちんと持ってください。』

『お願いします。』

その言葉でケントは

keiを見返す。『人が死んでるんだぞ、平気でいられるか!』k
eiに感情をぶつけるが何も変わらない。

『気持ちは理解します。でもあなたにはこの事を記憶する責任があります。この中であと2人の命を救えるのはあなただけです。』この女はなんなんだ？

あの映像を見ても

焦りひとつない。

そしてこちらの気持ちを察して、冷静に対処している。

……たいした女だ。

『今の映像で5人が死んでしまいました。』

あそこにあなたが入れば3人は助けられます。

落ち着いて、次の映像を記憶してください。

ケントのもう片方の

手を取り、keiは再び自分側に体勢を向かせる。『5人とも、』

助けられないか?』

…難しいですね。

ケントさんが入る事で、死亡確率3名:39.62%、死亡確率2名:84.54%、死亡確率1名:18.95%、死亡確率ゼロ:4.172%。みんな助かるのは5%未満です。

そして、ほぼ確実に、

助けるのは3人にして

ください。』

『なぜ?』

『この理由により、この事故とは関係のない人が別の場所で死にます。』

ですから、助けるのは
3人でお願ひします。』これが、あの男 全ての声の主 が言っていた

生死の連動か…。

『時間がありません、映像を送ります。』

半ば強引に kei は、ケンタにイメージを送り始める。

まだ気持ちが悪くない

まま、仕方なくケンタはまた目を閉じる。

すると、早速映像が

飛び込んできた。

車で走っている映像だ。信号のある一車線道路。標識がある、41

2号線。412号線なら材木置き場に来るまでに

通った道だ。

あれ、ここ隣町だ。

時計は11:12を

回ったばかり。

周りは民家ばかり。

左前方からおばあさんがゆっくり歩いてくる。

髪は白くてふさふさ。

あずき色の上着で、

杖をついている。

サイドミラーを見ると、青い2トトラックが

後ろにいる。

右前方に犬を連れて歩く男性の後ろ姿が見える。緑のTシャツにグレーのストラックス、

連れてくる犬は…

もう少しで見えるのに、ここからじゃ見えない。あまりスピード出していないこの車。

ケンタはスピードメーターを確認した。針は38/kmのあたりにある。小さな茶色い犬だ。

ケンタの前に白のワゴン車が走っている。

対向車が来る。

ガンメタの商業用のバンだ、かなり汚れている。あ、フレンチブルだ。

犬連れ男性を追い越す所でやっと犬の種類が分かった。

後ろのトラックが左に

曲がった。

後ろには他の車は

走ってない。

左前方にヒラヒラの帽子を被った年配の女性が、自分の車と同じ進行方向に歩いている。

白のワンピースに

大きな薔薇の絵柄が、

所々にある。

ちょうどその女性に

追い付こうとした時、

女性が道路側

(こちら側)を向く。

…特に特徴のない顔、

お化粧もほどよくと

いった感じ。

次の瞬間、前の白の車が左に曲がる。

前には車は走ってない。アクセルを少し

踏んだのか、通り過ぎるスピードが変わる。

スピードメーター

47 / km弱。

民家が並ぶ。

左側の家の並び…砂漠色の民家から塀つきの家が二軒続き、こげ茶色の家を挟んでまた塀付きの家が二軒続く。

右側の家の並び…何も

ない平地から茶色の家、砂漠色、茶色、茶色、

塀付き、所々草の生えた駐車場。

こげ茶色の家……。

閉じたまぶたの裏で、

ケンタの眼球が

めまぐるしいスピードで動いている。

（今の左右の家の並びを記憶する時間2・47秒）少し気持ちにムラがあるため、

いつものように事細かくは出来ないが、

今までの一連の状態や

風景、移動速度、動き

ながら見る周りの位置等は全て記憶に入れた。

何度でも引き出せる。

どの場面からでもOK。ん…？信号だ。

……！

自分の鼓動の音が

聞こえる。

映像が少し

スローになった感覚。

思わず唾を飲み込む。

前回の映像と同様、

左前方に小学生の団体。先頭に先生らしき

大人の男女2名。

団体までの距離は
… 30 m 前後、
右側には年配夫婦が
すぐに追い付く位置。
どちらも今走っている車と同じ進行方向。
信号には、
右手前にサラリーマンが携帯をいじってる。
右奥の信号待ちに、
大人3名。
その時クラクションが
鳴る。
自分の車からだ。
前の小学生がふざけて、だいぶ車道に
出ていた為だ。
鳴らす時の周りの
状態・位置等。
クラクションが鳴る瞬間に左側に見えるもの
… オロナミンCの
赤い錆びた小さな看板がちょうどケンタの真横に位置する。
右側に見えるもの
… くらた歯科医院と
書かれた電信柱が
ケンタの横位置よりも
50 cm 程前にある。
その時の時間、11:17。音に反応して
周りの人間が振り向く。左側、
小学生が足を止めた。
スピードメーターは50/km 手前。
問題の交差点まで
あと少し。

信号は青、

アクセルを踏み込む音。そして、イメージは、
そこで途切れる…。

目を開くと、keiがじつとこちらを見ていた。

『きちんと記憶、

しましたか?』

声もなく、ケンタは

ゆっくりとうなづく。

『今の道を走り始めた

時間は?』

『11:12』

隣町まで10分弱。

なんとか間に合う。

『急ぐぜ、つかまれ。』

『私は降ります』

『ええ〜?』

『女の子ですから』

『…………。』

『殴つてもいい?』

keiは首を横に振って、つぶやく。

『…女の子ですから。』

1

keiを車から降ろし、
目的地まで一人、
ケンタは412号線を
ひた走っていた。
このまま行けば、
なんとかかなりそうだが、表情はこわばるばかり。とりあえず車線を
外れ、サイダーでも飲んで
落ち着きたかった。
しかしそれは無理な話。運命の時間が迫ってる。この状況から
抜け出したい気持ちと、中途半端な正義感とで、張り裂けそうにな
った。こんな責任を
背負わされるとは。

全ての声の主の
考え方からいくと、
こうなる気持ちも
オレが望んだ事か？
ありえないな…。
そろそろ集中しなきゃ。目的地でオレがあ
の黒い4WDの進路を
変える予定。
進路を変えろという事はぶつかるとい
う事。
ぶつかった衝撃の瞬間、keiがメッ
セージを
オレに送るみたいだ。
そんな声届くわけがないと言っ
たら、死の危険を
脳が感じ取る時、

使っていない脳が17〜40%程度動きだすらしい。

その時、人が送った

メッセージを聞き取れるんだと…。

keiが車に乗らなかつた本当の理由は

これらしい。

それから、オレの安否は時間がなくて

聞けなかつた。

一番大事な事なのに…。

2

道路はすいていた。

イメージで見た状態に

なるまで、

ケンタは出来る限り

スピードを上げて

走った。

その間、何か考える

余裕もなかつた。

時計は11:10。

そろそろイメージ通りになるはず…。

前方に車が…2台。

赤い軽自動車の前に、

！青の…2台トラック！

でもトラックの後ろには車いなかつたような…。赤い軽が隠れてた

のか？その時、赤い軽自動車がハザードを出し、

左に寄って車を

停車させる。

それを見たケンタは、

自分の記憶が正しかつた事に少し安心した。

イメージでは、

青のトラックの前を
走ってたはずだが、
たしか左に曲がる…。
から、それまではトラックの後ろについてよう。ケンタは時計と道
路の
左右前方を注意しながら走った。
デジタルの数字が12分をまわり、それぞれのポイントが顔を出し
始める。トラックの後ろにいる
ため、バックの風景や
角度は違うが、
左前方に白髪の杖を
ついた老人確認、
それよりも少し
距離はあるが、
右前方に犬を連れた
男性を確認。
左側、老人とすれ違う。次に対向車の汚れたバンとすれ違う。
男性と犬に追い付く
少し手前で、
前のトラックは
左に曲がる予定。
スピードメーターの針は38/kmを指す。
イメージ通り、
トラックは左に曲がる。前方に白のワゴン車を
確認。
右側、フレンチブル、
犬連れの男性を
追い越す。
前の車との車間距離を
きちんととる。

視界良好。

次のポイントである

白のワンピースの女性をケンタは静かに待つ…。それはまだ遠くの黒つぶでしかない。

近づくと、近づいて……

左側、

イメージと同じ

角度でワンピースの

女性確認。

顔をこちらに向けると、前の車が

左に曲がる予定……、

よし、曲がった。

一度大きく息を

吸い込み、

吐き出すと同時に

アクセルをゆつくり

踏み込む。

メーターの針を確認… 47/kmを指している。

ケンタ静かに前を向き、次のイメージの復習。

少し走り、

ポイントが見えてきた。左側の家の並び… 砂漠色の民家から塀つき

の家が二軒続き、こげ茶色の家を挟んでまた塀付きの家が二軒続く。

右側の家の並び… 何も

ない平地から茶色の家、砂漠色、茶色、茶色、

塀付き、

所々草の生えた駐車場。こげ茶色の家……。

…… イメージ通り。

車から映る周りの

風景を、イメージと

ほぼ完璧にする。

(建物等が視界に入ってからなくなるまでの自分の速度、位置等)走りながら自分が覚えたポイントを一一つ正確に確認してゆく。しばらく建物を過ぎて、遠くに信号が現れた。デジタルの時計が11:16から11:17に変わった。素早く丁寧な左右のポイントを探し出す。左のポイント…オロナミンCの赤い錆びた看板…。右のポイント…くらの歯科医院と書かれた電信柱…。位置はまだ先にあるが、共に確認。右前方に年配の夫婦、もっと先の左側に小学生の団体。信号には各ポイントに人がいる様子。クラクションまでの動作に緊張が走る。同時に集中力も高まってゆく。緊張感がある程度の位置で平行線になるが、集中力は尚も高まる。ここでケンタの普段使っていない脳の12〜15%が覚醒開始。顔は真っ直ぐ前を向く。無音、音が全て消えた状態が始まる、そして、視界に入る全ての

位置を把握。
動作や一つ一つの流れ、各ポイントでの状況を
全て把握しだす。
現在の意識と無意識の
比率1：9、この瞬間、
意識に侵食した
無意識の中にk e iの念がゆっくりと入りだす。
そして、左側の
オロナミンCの赤い
錆びた看板がちょうど
ケンタと並んだ殺那、
ケンタは静かに
クラクションを鳴らす。k e iがケンタの実際の
行動を、イメージを
使ったのぞきだす。
自分で見たイメージと
重ね合わせると、
二つの誤差およそ
0.0025秒。ほぼ完璧に
イメージ通り。
左側、小学生の団体が
こちら側を向く。
信号の向こうの5人、
手前から
男性2・女性2人・女性
1人もこちらを見る。
右側、一番手前の
年配の夫婦が振り向く、続いて信号手前の角の
男性、信号奥の角の
男女2人、女性1人が

同じくこちらを見る。

道路側に出ていた小学生が慌てて歩道に戻る。

先生が大きな声で生徒に何かを言っている。

その間、生徒達は一連のやりとりを止まって

見ていたため、小学生

まだ横断歩道に入らず。先生がまた先頭に戻り、歩き始めようとする。

ケンタがアクセルを

踏み込む。

速度は50/km超。

ここで尚も

集中力が増す。

脳の覚醒：

更に18%上昇。

ケンタの車が交差点付近に差し掛かると、

だんだん景色が、

スピードを失くす。

とても緩やかになる。

実際には1/60秒の世界

だが、ケンタには

その風景をきちんと

見る事が出来る。

左側：黒の4WDが

赤信号のまま交差点に

侵入しようとする。

ケンタは車が見えた時点でブレーキを

踏み込もうとするが、

自分の体も

コマ送りで動く。

ドライバーは20代後半、白の帽子、口の周りからアゴにかけて不

たる。瞬間、ケンタは強い衝撃と共に、k e i の声を聞き取る。

その時、
時間と次元が歪みだす。全てが、止まる。
人も、物も、

今ある全てが
動かないでいる。

しかし、ケンタの思考は正常にこの現象を見つめている。思考と現実の時間の流れが変わってゆく。

全てが止まった状態で
k e i の声が聞こえる。

「お疲れ様です。」

最初に挽かれた男性は
ほぼ即死です。

車に当たった衝撃で
肋骨が内蔵の至る所に
刺さってしまいます。

男性は二つの車に
挟まれずに、左前に
突き飛ばされます。

そのまま黒い車は
左に進路を変え、

信号角にいた3人に
突っ込みますが、

ケンタさんとの衝突で
少しスピードが

落ちたため、

一人が右に飛び出し、
車と接触せずに

済みます。

あとの2人は接触を避けられません。

一人は車の左側に当たって、左に跳ばされます。死亡確率19・48%で

ほぼ死には至りません。もう一人は、

車に押され、

建物に挟まれます。

こちらは、残念ですが、死亡の可能性が高いです。

ケンタさんの死亡確率は14・22%、

衝突でケンタさんの車は右にスピン気味に

跳ね跳ばされますけど、死の危険性はほとんど

ありません。

本当によく動いて

いただきました。

おケガだけはどうぞ気をつけてくださいね。》

気をつけるって、

どう気をつけるのさ、

教えてくれよ…。

そして…時間は、

動きだす。

最初の男性が吹き飛んだ所までは意識があるが、スピンした弾みに

右の窓に頭を激突し、

ガラスにヒビが入る。

そこからは意識を失う。

3

ケンタはこの後、

病院に担ぎ込まれて、

手当てを受けてから

警察へ行き、

取り調べ・現場検証等で1日が終わる。

ケンタがこの事故に

介入した事により、

死亡者は2人に減った。しかし、死亡した人間が変わってしまった事により、

ケンタに罪の意識が

生まれる。

この意識こそが、

ケンタにとって、

更なる罪の意識を

生む事になるのだが、

それはk e i も、

本人のケンタでさえ、

今は分からずにいた。

DESIGN : 7 罪の意識

事故から一夜明けて、
ケンタは自室の布団で
体を休めていた。

頭と右手に包帯を
巻いているが、
幸い大きなケガでは
なかった。

頭はドアミラーに
ぶつけて2針縫い、
右手は軽い捻挫で
済んだ。

親父には、
隣の遠い親戚の
鎌田さんに配達頼まれ、途中に事故に巻き込まれたと言って嘘をつ
いた。鎌田さんは一人暮らしのご老人で、たまに連絡をくれて配達
に行く。

鎌田さんにもお願いを
して、口裏を合わせて
もらった。

店は親父が帰って来る
まで、こうじがなかなかどうして頑張ってくれたらしい。

とりあえず店は、
なんとかあった…。

テレビはつけたまま、
そこからでてる音だけを静かに聞きながら、
ケンタは昨日の出来事を思い返していた。

生まれながらに記憶は

良い方なのに、
事故の前後の記憶が
曖昧だ。

何度思い返しても、
はつきりしない。

自分の行動でさえ…。

しかしニュースやワイドショーでは繰り返しその状況を放送して
いた。

確かに自分はおそこに

入り、最初に *kei* に見せてもらったイメージを

変えた事は事実。

しかし、どのようにしてそうなったのかが

分からない。

そして、死亡者5人のところを2人に減らした。ケンタが入った事
で、

3人は助かったが、

ケンタが入った事で、

最初のイメージと違う

人間が死んだ。

これも事実。

二つの事実を受け入れ

ながら、

同時に罪の意識が

頭から消えない。

もっと早く動いてれば。でも、二人を助ければ、何処かで誰かが

二人死ぬ…。

知らない所で死んでもらった方が少しは楽か…？とにかく、今のオ
レは

二人しか助けられ

なかった。

それこそが、紛れもない事実なのかもしれない。そう考える事で、

ケンタは少しでも

自分の罪の意識から

解放されたかった。

勿論、ケンタが悪い

わけではない。

下手な正義感が、

今ある使命への目覚め

なのか…。

その時、携帯が鳴る。

… k e iだ。

ケンタは通話ボタンを押して応答する。

『どうも』

『気分はいかがですか』 『うーん、あまり

優れないな。』

『そうですか、

色々感情はあると思っ

ますが、どうか全てを

受け止める努力から

逃げないでください。』 k e iの言葉に、

ケンタは反応する。

『全てを受け止める

努力…。』

『今回の事で経験に

変わるもの全てです。

いい事も、悪い事も。

もし自分の中で

割り切れない事や

消化出来ずにいる事も、なるべく全部意識の中で受け止めてくださ

い。

苦しみや矛盾を

背負いながら闘う…

これからはそういう動きになっていきます。』

『……………』

ケンタはk e iが言った

言葉を一つ一つ考え

ながら聞いていた。

『いいんです。

解らない事があっても、矛盾が生じてても。

苦しみながら、

迷いながらも、

意識だけは前を見て進もうと考えてください。

だって、今わからない

事を考えていても、

わからないままです。

ならばそれにとらわれる心をいったん捨てて、

今出来る事に

集中してください。』

『…随分簡単に

言うなあ……………』

『簡単に言います。簡単に考える事も大事なんです。特に悩んだ後

は。』 『へーい』

未だk e iの言う事に

死角は見当たらず、

相槌をうつしか

なかつた。

『そして……………』 『そして？

』 私たちは地球を…

人類の進化を守る為に

動いている事を、どうぞ忘れないでください。』 『…話がでかすぎて

ピンと来ない。』

『ピンと来なくても

いいんです。それでも

言い続けていれば、

人はそれに近づいていこうと意識が働きます。

人間の、万有の可能性は計り知れませんがね』 ……はい。』一方的に

色々な事を言われ続け、k e iは電話を切った。

あの女は

なんなんだろう。

一体歳いくつだ？

あいつの事は何も

知らないな全く。

今度色々聞いてやろう。、今わからない事は考えてもしょうがない。

当たり前前の事だが、

それでも言葉で

言ってくれると、

より心に入ってくる。

k e iの電話で少し

落ち着いたケンタは、

また眠りに入った。

どちらにしても、

この特異な経験をして、沢山の事を感じた。

そしてそれはケンタの

脳に蓄積され、新たな

経験として生きてゆく。しかし、どうしても

割り切る事の出来ない

罪の意識のかけらは、

重みを増し、深い意識の底へと沈んでゆく。

それは意識で
受け止めようとしても、全てすくう事は難しい。やがてそのかけら
は、
汚れた重油の様に
無意識の入口へと、
深く深く…沈んでゆく。もう意識にも
簡単には引き上げる事が出来ない程、
重く、深く…。
それはある時顔を出し、ケンタを惑わし、
苦しめる。人間らしい顔を持つ
この行為は、
時にケンタに
大きな力に与える。
そして、
矛盾から逃げずに闘う。難しいようでもあり、
簡単なようでもあり…。眠りの中でケンタは、
地球と人類の進化を守る人間の一人として、
今生きている事への
意識をしばじめる。
活動している時に、
こんな大それた事は
簡単に考えられない。
これこそ無意識の
成せる業かと、
ケンタは夢の中で、
感心していた。
そこには、
優しい表情で眠る
ケンタがいた。

(2007 6 / 28 9 : 28)

今日も天気はどんよりと曇っている。

今にも降ってきそうだ。店頭でパイプ椅子に座り、ケンタは空を見上げていた。

それにも飽きて、

店内を見回す。

こうじは今日もなかなかフットワーク全快だ。

併せて無駄な動きも

全快だ。

『おいおい今日もいい動きだなおい』

こうじを見ながら

ケンタは言う。

『ケンタさん、オレ

だいぶ様になってきたと思います、多分、

多分オレ一人でも

やってやりますから。

まかしてくださいよ。』 『いいねえ、頼もしい。ホントこうじのお陰で

ヤオパチは安泰だな。』 『いきますよオレ』
言いながら、

リンゴの棚に

茄子をマッハで入れ始める手は止まらない。

やる気に比例して、

無駄さが加速する。

もはや誰もこうじを

止められない。

ケンタはひるむ事なく

褒め讃えた。

二人の行為がくだらな

すぎて、傷口が痛む。

すると、いいタイミングで携帯が鳴る。

これはk e iだなと思い、少し心が

大人しくなる…。

通話ボタンを押す。

『お仕事元気に頑張ってますか？』…k e iだ。

『お陰様で…』

『早速ですけど、お手伝いお願いします。』

ケンタは額にしわを

寄せ、遠くを見る。

『車は使えないよ、

只今修理中。』

『大丈夫ですよ、今日は電車で来て下さい。

山谷駅やまひで

待ってます。改札の前のお店にいます。

宜しく願います。』『あのさ、オレらが

やってる事って、ホントに意味を成してるの？

結果で見れないの？』

『…多分、死んだ時に

見れると思います。』

『…随分…長いのね。』『ですよ。』

『あい、

とういまでえくん。』

『それってまさか、

芸人の、ですよ。
ですかまさか…』

『…ですよ』

『…待ってますから』リアクションも虚しく
電話が切れた。

でも、あいつ（k e i）

結構芸人知ってるな、

ひよっとして

テレビっ子？

あいつも少しは

人間らしい所あるのか。k e iの事を

ちよっただけ知れて、

ケンタはなんとなく

嬉しくなった。

2

電車で揺られて20分。

席に座りうとうと…。

今回も人の、生き死に、に関わるかもしれない事を決して簡単に考
えてる訳ではないのだが、

元来ケンタは、出来る事は出来る時にやっておく（今当てはめるな
ら、

眠れる時に眠っておく）という考え方があった。時計の針は

10時20分を指し、

ケンタを乗せた電車は

山谷に到着した。

出口は一つだけ、

駅ビルがある以外は

大きなビルは

見当たらない。

あちらこちらに
喫茶店やらファースト
フード店やらが、
駅の近くに集中しているくらいの小さな町。
ケンタは改札を出てすぐに、喫茶 カントナ、なる店を見つけた。
というより、視界に
入ってきた感じだ。
迷わずカントナに入る。客は数人。
いらっしやいませと
店員が声をかける。
左側奥めの席に
k e i の後ろ姿があつた。店員に k e i を指差し、
奥へと進む。
k e i の方に
歩いて行くと、
k e i は気配を感じて
こちらを振り向く。
ケンタは右手を少し上げて挨拶をすると、
k e i が笑顔を見せながら軽く頭を下げる。
席に座ると、ケンタの後を追って来た店員が笑顔でお辞儀をしながら、
お水とおしぼりを
ケンタの前に置く。
ご注文お聞きしますか？と店員がケンタに尋ねると、ケンタは k e
i の
飲み物を確認する。
どうやら k e i は
ココアを飲んでいる。
可愛い飲んだ。ケンタはジンジャー
エールを頼んだ。

店員が向こうに行くのと、真剣な眼差しを

ケンタに向けるk e i。

今日はどんな事が

起こるのか…、

また誰かが死ぬのか？

自分は何をする？

あるいは何が出来る？

一体何と闘うのか…。

これから何度あるか

わからないが、

何度あつてもこのような雰囲気になるのだろう。そして長く短い

沈黙が続く、

『今日は…』と二人

声を揃えて言った。

ちよつと間をおき、

ケンタが言葉を続ける。『どんな事件なの？』

『区立わたわた幼稚園』 『わたわた…』

ケンタの反応に

k e i がうなずく。

店員がまたやって来て、『お待たせしました。』と言って、

つぶつぶの細かい気泡がどンドン上にあがって

いく、

つめたく冷えた

ジンジャーエールを

テーブルに置いた。

お辞儀をして去って行く店員を見届けてから、k e i はテーブルに

両手を乗せる。

ケンタはそれを見ながら渴いた喉にジンジャー

エールを一口注ぎ込む。そしてk e i に真剣な目を送りながら、柔

らかな

小さな手に自分の手を乗せる。

二人は手を握り締め、手の平からくる

温もりを感じ取って、ゆっくり目を閉じる。

そして、

イメージが静かに

浮かび上がる。

ごつごつした

岩場が広がる。

小さな岩や大きな岩が、歪な形でそびえたつ。

左右は岩の壁で

覆われていて、

壁の高さは10m程か。

らくだの様な色を持つ、とても固そうな岩々。

その岩の地面から、

所々で白いガスが

勢い良く噴出している。高さはまばらで、

高いものと10mは

あるだろう。

空の色は紫で、

炭色の雲が、

物凄い速さで

うごめいている。

建物はまだ見えない。

遠くに山が幾つかあり、てっぺんの火口から赤い液体がドロドロと

流れ落ちている。

気味が悪い…。

暑そうなイメージだが、とても寒く冷たい

感じがする。

ここは一体何処なのか…後ろを振り向くと、何も無い。

ただ暗闇があるだけ。

暗闇は静かにゆっくりとケンタとの距離を縮め、今ある景色がじわじわと闇に吸い込まれてゆく。このままここに居るのはヤバい感じがして、

ケンタは歩き出す。

とたんに目の前にガスが飛び出す。

左寄りに噴出したため、かろうじてケンタは

右に避ける事が出来た。闇は相変わらず

動きを止めない。

地面を注意しながら

また前へ進む。

右側から膝に向けてガスがまたケンタを襲う。

避けようと左に

飛び出した瞬間、

ちょうど着地地点からもガスが吹き出し、

ケンタは足から体全部に直にガスを浴びる。

足や手や顔の皮膚が

ゆっくりとただれ出す。呼吸が苦しくなり、

体の痛みよりも先に脳に鋭い刺激を感じる……。その情景に耐えられなくなり、ケンタははっと

目を開ける。

keiもそれに気づき、

手を握ったまま

ケンタを見つめる。

『ゲームオーバーです。もう一度やり直し。』

ケンタさんがこの地点をクリアしなければ、

私はその男の闇の先に

入っていきません。

それまでケンタさんは
なんとかパターンを
覚えてください。』

『今のイメージは
なんだよ、

なんだか居心地の悪い
場所だったけどな。』

『今見た映像は、
今回の事件の犯人の
脳の中です。』

『脳の中、…じゃあ
なんでもありません。』 『なんでもありません。
だからしっかりと
発見してください。』

『……………何を？』

『白いガスの出方とか、時間、特徴などです。』 『もしかして、イ
メージ通りじゃないの？』

『はい』

3秒程沈黙が続く。

『……………分かった。』

ケンタはまた目を閉じ、イメージに集中する。
違和感がある異質な世界にまた足を踏み入れ、白いガスを何度も浴
びて、体を溶かしながらも、
執拗にガスの特徴を
掴もうとする。

溶け続けて視界が見え
なくなるまで何回も…。すると、ガスが出る瞬間に噴出口が少し開
く。

（噴出口は数限りなく

至る所にある)
そして音がしてから、
ガスが実際に出るまでに時間差がある事を見つける。
ガスの出方は均一で、
3段階の強弱がある事が分かった。
小・中・大と出終わると噴出が終わる。
さらに左右の岩壁・地面から同時に噴出されるガスはそれぞれ2つまで。併せても最大4ヶ所
という事になる。
隣どうしの穴からは
同時には出ない。
穴と穴の間隔は
およそ10cm、
最悪足場がなくても
ガスとガスの間を
通れば、体がガスに
触れる割合は非常に
少ないので、
皮膚の溶け方も
ゆっくりで、
少量で済む。
それでも溶け続ける
ので、正に時間の勝負。そして挑戦すること
2374回目で、ケンタの
脳に、ある程度のガスの規則性が記憶された。
この数千あるパターンをベースに挑めば、
なんとかこの白ガス地獄を抜けられるだろう。

どれ程の時間が過ぎた
のか、物凄い疲労感に
襲われたケンタは、
不安がよぎった。

『おい、そっぴや時間て平気なのかよ。』

『まだ大丈夫ですね。』

ケンタさんがここへ来てからまだ10分くらいしか経ってませんよ。
』

『うそん、まじ?』

自分の腕時計でケンタはその事実を確認する。

『な、なんで...』

ケンタがガスの噴出

パターンを見つけた時間 約3時間52分。

しかし、k e iが送る

イメージは、いつも無意識の中から拾ってくる。無意識の最深部で
は、

時間の概念が存在しないため、実際の時間では
数分しか経っていない。しかしなぜk e iはその
場所への行き来が可能

なのか、意識下の中で

それが出来るのかは、

いづれケンタが知る事になる。

ガスのエリアを

抜け出すと、急に景色ががらりと変わる。

後ろから迫ってきていた闇も消えていた。

辺り一面草花が生い茂る草原、

空は水色で、

柔らかかそうな雲が

ゆっくりと空に漂う。

小鳥のさえざり、

水のせせらぎ、
まるで癒しの紅白歌合戦のような、
いつまでも

ここに留まっていたい
欲望にかられる。

いざ草原に足を踏み入れようとする、
弾力のある固いゼリーを触った時のように、足が体ごと押し返され
る。

どうやら、

、ぶよぶよにぶに、のバリアーが、今来た道と草原との境界線に
存在するようだ。

何度やっても体が
押し返される。

どうしたらいいのか
考えていると、

柔らかな透明のバリアの向こうに、
Keiがいる。

『何やってんの…』
『ここから向こうは

特殊な地帯なので、

ケンタさんは
入れませんので。

私が行きます。

多分この先に、この人の今回の事件に関わる
トラウマの原因が隠れていますから。』

ケンタはkeiの声を
耳に入れながら、

しかし視線は違うものにとらわれていた。

それはkeiのすぐ後ろに存在する何かだ。

keiはケンタの大きく

開いた尋常でない眼球を見て、後ろを振り向く。同時にk e iの額の真ん中に、鋭い何か突き刺さる。

ザクツという音と共に、額からドバツと真つ赤な血が吹き出す。返り血を浴びた相手は、身の丈わずか100cm前後の………老婆か？

k e iの血で赤くなったその顔は、

刺された相手を見て

愉快にケタケタ

笑っている。

状況に吞まれ、

ただ呆然とするケンタ。しかしk e iの眼は、

しつかりとその老婆を

捉えていた…。

1

keiの額からは、
絶え間なく新しい血が
流れ落ちる。

自分の血に邪魔され
ながらもkeiは目を開け続け、目の前の相手を見据える。

老婆は笑いながら、
また包丁をkeiの頭
めがけて刺す。

keiは老婆の向かってくる包丁ではなく、
その包丁を持つ左手の
動きを追った。

角度・軌道等を
頭の中で計算し、
刺さる場所が目ではない事を確認すると、
そのまま動かず
刺さるのを待つ。

しかし視線はターゲットを逃さない。
ズツ、という鈍い音
出し、さっき刺された

場所よりも少し上の左側にそれは刺さった。
keiは動かずに尚も相手の動きを見続ける。
新しい傷口から更に

血が流れ落ち、
目に血が入ったので、

一度目をつぶり、手で
目の辺りの血を拭う。

一連のシーンを見ていたケンタは、どうにか
ぷよぷよの壁を壊せないかと打撃を試みるが、
結果は変わらない。

keiは手で血を何度か

払い、視界を作る。

しかしその行動が

気休めの様に、

新しい血が次々に

流れ落ち、

keiの視界を

遮ろうとする。

そして再び老婆が

視界に入ると、

新しく用意した包丁を

両手にそれぞれ持ち、

keiの胸を突き刺す。

胸からはまた温かい血が老婆目がけて吹き出す。刺された振動で重

心が

後ろに移動する。

近くにいなから

何も出来ないケンタは、

ただkeiの動向を見守るしかなかった。

傾きながらもkeiは

何かをつぶやいていた。それは、

老婆の攻撃のパターンを頭の中にインプット

するため、

あらゆる流れや

可能性を考え、

それらのほぼ全ての動きを数字に置換える事で、老婆の二つ二つの動きに対しての、

自分の一番最良であろうリアクションパターンを確率で導き出す。

相手の動きに対しての

こちらの反応の確率も

全て違うため、

相手の攻撃パターンの

特徴を大まかに

何種類かに分け、

自分もそれに沿った

反撃、もしくは防御する確率の一番高い

リアクションパターンを何種類か作る。

あとはその種類ずつの

枝分かれでの確率で一番高いものを選んでゆく。一つの攻撃に対し、

確率の高い5つの型を

取り上げて、

その中でも最も確率の

高いものを選び、

行動に移す。

この時に、動きを数字にしている事で、

keiはそれを実際の行動に移す事が出来る。

その計算式は

数限りないが、

keiにとって唯一無二の考え方だ。というが、

それしか知らない。

しかし分析は早く

正確である。

現在keiは相手の3度の攻撃で(一つの攻撃で

最も可能性の高い

5つの攻撃パターンを

想定する。

その攻撃に対しそれぞれ5つの型を出し、
計算してゆく。(

3 × 5 × 5 = 75

の計算で75通りの型を
インプットした。

もう少し探ろうと、

視線は老婆を逃さずに

左足を半歩前へ出す。

そのアクションに

老婆は一度後ろに

下がりながらも

反動を付けて

左手に新しく現れた

包丁を、k e iの右側の

首めがけて振り抜く。

『あっ！…！』

ケンタの反応は、

これから起こる状況を

予想しての叫びだった。k e iは後ろに避けようと首を引くが、

間に合わず、

刃は右の首から

喉仏を掻き切り、

左の肉を通り

自由になる。

自分の攻撃に確かな

感触を感じ取り、

哀れなk e iを見て

老婆はまた

ケタケタ笑い出す。

脳の中の出来事なので、本当の痛みではないが、喉を横一文字に切られ、k e iは一瞬呼吸が苦しくなる衝動にかられる。

ケンタも同様に

自分の事のように

息が出来なかつた。

そして再びk e iは

計算を続ける…？

k e iは、あえて、

攻撃を受けた。

そして新たに25通りの

型を覚える。

この老婆に対して、

防御から攻撃パターン等100通りの動きを計算。脳が一つ一つの

細胞に

伝えてゆく。

喉を切られてから

計算が終わるまでの時間 11.46秒

これで83.132%の確率でトラウマに勝てる。

体に刺さった刃物や

傷口等を加味すると

15〜20%落ちるが、

k e iは怯まずに右足を

前へ出す。

老婆はまた一歩下がって右手に持つ刃を光らせ、助走をつけて

k e iに飛び込む。

まず右手からの

老婆の攻撃に対し

k e iは少し姿勢を

かがめながら、

左肩が刺さるように

誘いながら
右上に体を
スライドさせていく。
狙い通り包丁は
左肩に食い込む。
この時k e iは
老婆の力・角度・速度等を予想して、
刺さる瞬間に刃の方向に肩を突き出す。
刃は深く肉をえぐり、
骨まで到達し、
身動きが出来なくなる。老婆はk e iの顔を
切り裂こうとしたが、
肩に刺さってしまった為肩から引き抜いて再び
顔を狙おうとしたが、
骨まで食い込んだ包丁はなかなか取れない。
包丁を握る
老婆の手首を、
k e iはさつと左手で掴み右手で老婆の首を
おさえる。
首の動脈に沿って
指を滑り込ませ、
一気に圧力をかける。
左手も強く握り、
逃げないようにする。
老婆は呼吸が苦しくなる感覚を自分で作り出してしまふ。
k e iは動脈を押す指に
力を集めて
更に圧力をかける。
それは相手に、
これは脳の中の出来事

だという事さえ考えられないスピードで…。ケンタはk e iの行動をただ見ているしか出来なかった。

k e iが反撃した事で、少し安心したが、体中に包丁が刺さった人間が真っ赤になりながら、刺した相手を締め上げている。恐ろしい景色だ、恐ろし過ぎて滑稽ささえ漂う。

そう考えていた瞬間、パーーーーン!!!!と大きな風船が破れたような音と共に、老婆が消えた。

k e iは辺りを見回し、様子が変わらない事を確認して、少し考えている。

そして、なにやらブツブツ言っている。

ケンタはそのまま様子を見ていたが、心配になり声をかけた。『おい、平気かー?』全く反応をせずに、微かに口が動いていて、目は虚ろだ。

少し間を開けてから、ようやくケンタの言葉に反応する。

『私はもう少し
奥に行きますから、
ケンタさんは先に
戻っていて下さい。
私は大丈夫ですから。』 『分かった、
……気を付けて……。』
あんな状態で気を付けるも何もないが…。
keiは言葉を聞いて、
軽く頭を下げ、
ケンタを背にして
奥へと歩いて行った。
ケンタはそんな
後ろ姿を見ながら、
刺さったままかよと
心の中で呟いた。
しかも少し
エコー気味で…。

2

草原地帯を少し進み、
着ている物を
ひきちぎって
首の周りに巻き、
傷口を隠す。
辺りを見回すと、
遠くに建物が見える。
その建物に向かって
keiはまた歩き始める。建物は二階建ての
古い家屋。
玄関の前まで行き、

立ち止まる。

息を大きく吸い込んで、ドアを…開ける。
中は細い通路がある。

しかしほんの

1 m先までしか見えず、あとは右も左も無く、
只暗闇が広がっていた。k e iの顔が曇る。

この通路の奥に、
目的の部屋が必ずある。そこに辿り着くのは
難しくないのだが、

この暗闇の先には
もう一つの入口が
何処かにあり、

それはある場所へと
つながっている。

誰の心の中にもある、
その入口の先にある
場所こそ、

k e iの顔が曇った
原因である。

その場所の近くを
通らなければ
いけない事が、

今のk e iには耐えがたい行為であった。
そんな自分のトラウマを抱えながら、

k e iは闇の中へ
消えていった……。

3

ケンタが現実の世界に
意識を戻すと、すぐに

手の痛みを感じる。

ここは先程入った

喫茶店の中。

どう考えてもこれは

実際の痛みだ。

原因はすぐに分かった。k e iがケンタの手を

強く握っていた。

女性の力とは

思えない程、

ケンタの手を強く

締めつける。

ケンタはとにかく

耐えた。

k e iは今一人で

意識の中で戦っている。この痛みを感じる事が、今の自分に出来る

唯一の事か…。

数秒して、

k e iの手から

力がスツと抜け、

目を開ける。

どうやらこちらに

帰って来たようだ。

額と髪の毛の

生え際から、

玉つぶの汗が

浮き出していた。

ケンタはまだ使って

いない自分のおしぼりをそっと渡した。

『あ…どうも』

言った後k e iは渡されたおしぼりを拡げて

額にあてる。

いつも落ち着いたk e iを見ていたが、
あんなやりとりの後だ。これだけの疲労を
伴うのは必至。

ケンタは、

k e iの人間らしい部分を見る度に安心する。
というか心が落ち着く。

『少し休みなよ』

ケンタは素直に言うが、気休めなのは
分かっていた。

『大丈夫、

大きなポイントは

通り過ぎましたから。』テーブルに両肘をつき

額につけたおしぼりを

両手で押さえている。

おしぼりは額から

だらんと下がり、

k e iの顔を覆い隠す。

『そろそろ行きますか、時間は近いです。』

おしぼりの向こうから

声がした。

最後に何をしたかは

分からないが、

相当な精神を使ったの

だろう。

『終わったら、旨いもんでも食いに行こう。』

ケンタが言うと、

k e iは首を横に振る。

断りやがった。

心配して言ったのに……。そう思ったのも束の間、またおしぼりの

向こうから声がした。

「アイス……」

「へ？」

ケンタが聞き返す。

「アイスが

食べたいです、

終わったら……」

「……分かった、

いい店探しく……」

他人のトラウマと

対峙する事で、

自分のトラウマに

近づいてしまったk e i。

憂いの表情が

二人の未来を暗示する。それは明るい未来への

ためらいか、

必然を受け入れる

恐怖か……。

『あ、忘れてました。
最後のイメージを
送ります。』

keiはおもむろに
ケンタに言う。

『え、まだあんの？』

『これがホントに

ラストです、準備は…

いいですか…？』

『お前がいいのかよ』

おしほりを

テーブルに置いて、

keiはケンタを

見ながら、

『大丈夫です、

ケンタさんがいるから』

PBR

言うとkeiは柔らかに

微笑む。

一瞬虚を突かれた様に

ケンタは目を丸くする。しかしなぜか

違和感を感じる。

素直に

喜びたかったのに、

なんだろうこの感覚は。

PBR

いや、これから起こる

事件に対して、

意識が働いている

せいだろう、

自分の役割が

終わるまでは気を

抜いてはいられない、

とにかく今の言葉に

対して色々考えずに、

喜ぼう。

ケンタもk e iに

微笑みかける。

ケンタが感じるよりも

この瞬間を大切に、

幸せにk e iは感じてた。

感じていたかった…。

今度は、ケンタが先に

テーブルの上に

手を置いて、

k e iを手招きしている。

二人にまた笑顔が

こぼれる。

瞬間であり、

永遠である

この幸せな時間を、

大事にかみしめていた。

『さあ、始めよう。』

ケンタがきり出す。

『はい』

k e iは答えながら、

自分よりも大きな手を

優しく握り締め、

そっと目を閉じる。

P B R

P B R

P B R

そしてイメージは、
映し出される。

とある住宅街の一角、
黒い柵の外側にいる。
柵の内側すぐに木が
生えている。

高さにして

1 m 5 0 c m くらいの木が、

柵の内側一面に

植えられている。

その向こう側で、

小さな子供たちが

沢山いて、遊んでいる。

P B R

みんな同じ格好だ、

制服か…、ん、さつき k e i が言ってた幼稚園？

P B R

確か

、区立わたわた幼稚園、

P B R

だっけか？

大人の女性もいる、

いち…に。二人だ。

子供たちはそれぞれ、

すべり台や、

ジャングルジム、

かけっこ等をして

お遊戯の時間を

楽しんでいる。

それぞれの名札に

桃組と書いてある。

ケンタは園内にある

それぞれの配置を

覚えていく。

遊び場を挟んで

三階建ての建物、

こちら側から見て

手前の右すみに

ジャングルジム。

ジムには4人がいる。

てっぺんに2人、

1人は景色を

眺めていて、

もう1人は下にいる

子供に話しかけている。

P B R

中央に体を水平に

している子供が1人、

下でジムの鉄棒に

両手でぶら下がり

ながら、

上にいる子と話している

P B R

子供1人の計4人。

こちら側から見て

左側よりの中央付近に

大きなすべり台が

1台あり、

そこには6、7…

8人が遊んでいる。

上に4人、

今にも滑り落ちそうな

態勢の子の後ろに立って

P B R

待機している子供、

その後ろに

階段一番上と一段下で

手すりに捕まって

順番を待っている2人の P B R

計4人。

下にも同じく4人。

ほぼ滑りきりそうな子と P B R

下でその子を待つ子供。 P B R

階段を登り始めた子と

それを追う子の

計4人の全部で8人。

ジャングルジムから

歩いてくる保母さん

らしき女性が1人。

手前左側のスペース

には何もなく、

かけっこをしてる7人。 P B R

鬼がもう1人の

保母さんで

その周りに

子供たちが6人。

みんな必死で

逃げている。

そんな和やかな風景を

ずっと見ていると、

ふとその頃の事を

思い出し、

ケンタは昔を懐しんだ。 P B R

どうやら自分は園外で

しゃがんでその様子を

見ている。

ん、右側から大人の男性
が園内を見ている。 P B R

ケントは直感でその男を P B R
今回の犯人だと感じる。 P B R
ここからでは

木が邪魔して

細かく観察出来ないが、 P B R

ガタイはわりかし

イイ方か。

髪は天パー気味で

パンチパーマが

伸びきった感じ。

白っぽいシャツに

ベージュのスラックス

丁度男性がいる位置が

幼稚園の玄関らしい

雰囲気。

次の瞬間、

男性は柵を乗り越えて

園内に入る。

やはり予感通りか…？

ジャングルジムの

てっぺんで

景色を見ていた子供が

男に気づく。しかし男はすべり台の

方向に進む。

すべり台に向かっていた P B R

保母さんは

背中を向いている。

喧騒も手伝って

男にまだ気づかない。

同じくもう1人の

保母さんも

丁度後ろを向いて

子供たちを

追いかけている。

男はもうすべり台付近の

P B R

保母さんの後ろまで

来ていた。

保母さんが

気配を感じた時には

もう遅かった。

男は後ろから

保母さんの右肩と

首の間に勢い良く

刃物を突き刺した。

保母さんの悲鳴と共に

一斉にみんなが

声が出した方向に

目をやる。

所々で悲鳴が走り出す。

P B R

男は深く突き刺した

刃物を、

力を込めて

思い切り抜いて

返り血を浴びながら

すべり台を目指す。

すべり台までの距離は

およそ5m。

刺された女性はそのまま

P B R

倒れ込んで気を失う。

ジャングルジムの

子供たちは、

男がすべり台に行くのを

P B R

確かめながら

静かに固まっていた。

当然現状をきちんと

受け止められず、

しかし今騒げば

こちらに意識が

いくかもしれないと、

本能が恐怖を抑え込む。

P B R

現実を受け止め

られないまま

本能が働くため、

キャッチする経験に

歪みが生じる。

少なくとも

ジムにいる4人は、

時間に比例して

トラウマが

育ってしまう。

すべり台降下地点にいる

P B R

子供は恐怖で動けない。

P B R

構わず男は

その子の襟を掴み

持ち上げる。

捕まえられた

少女もまた、

今起こっている現象を

現実として受け止める

事が出来ず、

それでも本能は

死を直感する。

直後にその直感は

死を認める

覚悟に入るため、

泣いても叫んでも

回避出来ない事を知り、

ただ祈る。

P
B
R

それは自分の中の

イメージの神か、

家族か、愛する人か…。

P
B
R

そんな少女の考えを

よそに、

男は少女の心臓付近に

刃物を突き刺す。

その動作は

2回繰り返し返される。

少女は口から

血を吐き出しながら、

呼吸が出来ずに

苦しみ出す。

その表情を確認してから

P
B
R

男は少女を

すべり台に放り出し、

辺りの様子を伺う。

逃げ惑い、泣き出し、

悲鳴を上げる子供たち。

P
B
R

男は表情を

ひとつも変えずに
近くにいた子供を
捕まえる。

足が震えて

逃げ出す事も出来ずに、

P B R

泣き叫ぶ子供は

捕まえられた男に

ごめんなさい、

ごめんなさいと何度も

叫び出す。

かけっこをしていた

もう一人の保母さんも

恐怖で体が動かない。

助けたい気持ち

あっても何も出来ない。

P B R

犯人に立ち向かう事も

難しい。

それでも大きな声で

叫びながら

助けを呼んでいる。

男は周りの喧騒に

特に反応せず、

目の前の泣き叫ぶ

子供の左首に一突き。

傷口から血が少し

溢れ出て、

刃物を思い切り

抜いた瞬間、

子供の中で

駆け巡っていた血液が

一気に飛び出す。

逃げる者、叫ぶ者、

動かない者…。

遊び場は

血の海に変わった。

男は子供を

その場に置き、

次の獲物を探す獣の様に P B R

眉を軽く上げて、

目をまん丸くして、

かけっこをしていた方へ P B R

歩き出す。

逃げていて転んだ子供の P B R

側まで早歩きで行き、

うつ伏せのまま背中に

刃物を突きつける。

反動で血が

男の顔に吹きかかる。

一瞬男は血が入らない

よう目をつむる。そこでイメージは

消えた。

暗闇が少し流れて

新しいイメージが

ぼんやりと映り始める。 P B R

最後に背中を刺された

子供は

もう動いていない。

かけっこをしていた方へ P B R

みんな集まっている。

男と保母さんが

向かいあっている。

保母さんが

子供たちの塊に

両手をいっぱい広げて

みんなを守ろうと

している。

泣きわめく子供たちを

押さえる両手は

震えていた。

次に殺されるなら

自分だと感じている。

ここで本当に人生が

終わるかもしれない。

まだ死にたくはない。

しかし守れるか否かは

別にして、

いま子供たちを守ろうと

P B R

出来るのは、

自分だけだと考える。

しかし状態は

子供たちと一緒に、

体は震え、

涙が止まらず、

未だ恐怖に

支配されている。

助けて、助けてと

心の中で

繰り返し叫ぶ。

その時ケンタは

おかしな光景に出会う。

P B R

子供たちの塊の真上に、
P B R
どうやら大人が
数人いる。

遠近感がおかしいのか、
P B R

自分の目が変わなのか、
確かに彼等は子供たち
の真上に存在する…？

上半身辺りしか

きちんと思えず、

下はぼんやりだ。

そして男の周りにも

沢山の人がいる。

男に向かってゆく者、

それを阻止する者…。

なんだこの光景は…。

男は刃物のある手を

持ち上げて

さつと保母さんの

頭の上へ振り下ろす…、

そこで

イメージは消えた。

もう何も見えてこない、

ただ暗闇が

そこにあるだけだ。

そしてケンタは

目を開ける。

ke iがこちらを

見ている。

「また死ぬんだな…。」

それもあんなに小さな

子供達が…。』

ため息をつきながら
ケンタはつぶやく。

『どんな人の命も同じ
命です。』

小さかろうが

大人だろうが、

同じ、命です。』

少しうつむきながら

keiが答える。

何かあるのだろうか…。

しかしまだ今はそれを

聞く事は出来ない」と

ケンタは直感で思った。

『途中で映像が

途切れてたな、

その後なんか変な

人達がいつぱいいて…

あれは何?』

ケンタが続ける。

『あれは違う場所に

いる人達です。』

『違う場所って、

前に言ってた、

幽霊とか死神?

でもそれらしい格好

してなかったなー、

みんな普通の人間

みたい。』

『死神というのは

人間の中の概念で、

実際は私達と同じ世界で P B R

生きていた人間です」

「……なんで俺に

見えんの？」

「ケンタさんも同じ

状態になって

もらいますから。」

「え、…死ぬのオレ？」 P B R

「正確には少しの間

死んだ状態になって

もらうだけです。

そろそろ時間なので、

詳しい話は現場までの

移動時間で…。」

ケンタはレシートを取り P B R

自分が出すと言い

レジへ向かう。

二人は喫茶店を出て、

花屋で立ち止まり、

keiは花が好きなのだと P B R

ケンタに言い、

まだ蕾の

黄色いガーベラを

一輪買った。

花を見つめる

keiの表情を見ながら、 P B R

ケンタは今は亡き

母の事を思い出す。

ケンタの母も

花が好きだった。

グツタリして

元気のない花を見ては、

P B R

ケンタはその花を

一輪刺しにして、

また綺麗な花に

戻るのが好きだった。

そんな母親との思い出に浸っていても、

すぐに現実に

引き戻されてしまう。

とにかく今は、

目の前の敵か…。

ケンタはk e iと共に、

目的の地点まで

しっかりと歩き出す。

、区立わたわた幼稚園、 P B R

目的地までの道すがら
ケンタは先程の映像で

幽霊みたいなものが

見えた事について

keiに聞いていた。

『一度映像が

途切れた所から、

ケンタさんの

仮死状態の開始です。

もう次の映像からは

その状態で

動いています。』

『ちゃんと戻してくれ

るんだよね。』

『勿論です、

でも一定の時間を

過ぎてしまうと、

肉体に戻る事は

不可能ですので、

あしからず。』

『いつもさっぱり

言うなよ、

あしからずじゃねー。

どのくらいの時間で

戻らなきゃ

いけないの?』

『うーん、多分二人共
間違いない進めれば
大丈夫ですよ。』

『多分…。』

ケンタの眉間に
しわが寄る。

『…絶対、保証します』

P
B
R

顔色を伺いながら

keiは言い直す。

『それと、

時間の目安はこれです』

P
B
R

言うとkeiは

ポケットから

手の平に隠れる位の

小さなびんを取り出す。

P
B
R

透明のその中に

入っているものは…！

ゴキブリ！！！！

しかも元気に活動中だ。

P
B
R

ケンタは思わず固まる。

P
B
R

『いつ！

ゴキブリじゃん！！』

この生き物が極端に

苦手なケンタは、

全身の毛が逆だって

いくのがわかる。

『これが元気なうちは

大丈夫。』

そう言つてkeiはまた

ゴキブリ入り小びんを

ポケットにしまった。

それから数分歩き、

二人は目的地に近づく。

P B R

『でも本当に

いるんだな、

幽霊みたいなのって…』

P B R

ケンタが聞く。

『認めますか、存在を』

P B R

keiが聞き返す。

『まだ、

よくわかんないな』

ケンタの言葉を

全部聞いてから、

keiは視線を

ケンタから建物に移す

『あれです、

あの幼稚園。』

keiが言つと、映像と

同じ建物がある事を、

ケンタは確認する。

二人が建物に

近づくにつれて、

子供たちの楽しそうな

声が聞こえてくる。

その声ははっきりと

耳に入ってくる度、

ケンタの心は

沈んでゆく。

ケンタもkeiも、

この当たり前の幸せが

一瞬にして崩れさる
事を知っている。

せめて出来るのは、
犠牲になる人間達に
対して、

その残酷な運命が
在るという事実を、
精一杯の力で

真正面から

受け止めようと

する事くらいか…。

ケンタは辛い顔までは

隠せない、いや、

隠そうとしない。

そんなケンタの

表情を知り、

keiも沈黙でいる。

ここはケンタ自身が、

どんな状況であつても

しっかりとこの現実を

受け止めていかなければ

ならない。

PBR

今はkeiが

優しい言葉を伝えても

依存という形で、

ケンタの心を

歪めてしまうだけ…。

一人で乗り越えてゆく

しかない。

その事を、ケンタ自身

も感じているはずだと

keiは理解していた。

『ここでしゃがんで
待機です。』

keiが促したその場所は PBR

映像で見た位置と

同一。

ジャングルジム、

すべり台、平地と

それぞれ大きな

3つのポイントも確認。

PBR

みんなお遊戯を

楽しんでいる。

幼稚園入口の

玄関付近に目をやると

まだ男はいない。

しかし運命の時間は

そう遠くない。

keiが小さな声で

ケンタに話す。

『これを手に

持ってください。』

そう言うとkeiは

例のブーツを

ケンタに渡す。

一瞬ソクツとしたが、

うだうだ言っ

られない、

仕方なく小びんを

右手でもらう。

『コイツは一体どんな意味があるの?』

ケンタが怪訝そうな顔でk e iに聞く。

『コイツは連れて

行けるんですよ、

あっちの世界に。』

『連れて行って

どーすんだよこんなの』

P B R

『ケンタさんと一緒に

行く方のゴキブリが

元気になりだしたら

すぐにビンを

割ってください。

こちらで何かあっても

ケンタさんは自主的に

戻って来る事が

出来ます。』

『ゴキブリじゃないと

駄目なの?』

ケンタが弱い声を出す。

P B R

『コイツだけなん

ですよ、

ダークマターに

敏感なのは…。』

ビンの中のゴキブリを

見ながらk e iは答える。

P B R

中の生物は

相変わらず健在だ。

手で包み込むよう言われ

P B R

色々想像して
しまいながらも、
あまり力を入れて
割らないように
優しく小びんを
手の平で覆う。
もう一度玄関付近に
目をやる。

！…男を、確認。
ケンタは男から
目を離さない。

『ケンタさん、
そのままがいいので
聞いてください。』
視線は男を追いながら
ケンタは相づちをうつ。

『最後に見た映像に
映っていた人達は皆
違う次元に存在します。
しかし私達は
どうあっても

その世界に行く事は
出来ません。

なぜならこの空間に
存在しているからです。
しかし限られた
時間であれば、
それは可能です。
もし万が一、
完全に向こうに

P
B
R

P
B
R

P
B
R

行ってしまった時は

ケンタさんの魂は

こちらに戻る事は

不可能です。

ケンタさん、

ケンタさんが死神を

イメージする時、

武器や凶器は何ですか？』

P B R

園内が動き出す。

男は一人目の犠牲者、

保母さんを刺した。

ケンタはそれを

確認しながら

keiに答える。

『……鎌だな。』

『わかりました。

では男に憑く死神は

必ず鎌を

持っていますから、

絶対に絶対にその攻撃は

P B R

避けてください。

もし受けてしまったら

もう戻ってこれません

からね、

お願いしますよ。』

ケンタが男から

目を離し、keiを見る。

P B R

『その

シミュレートは？』

『出来ません。』

シミュレートした時点で P B R

死神はこちらの

存在に気付きます。

気付けばますます

男の体の中に

入ろうとする

ケンタさんを

警戒しますから。

ここは一発勝負、

男を見せてください。

まずは犯人の体の中に

入るのが第一優先です

その後はイメージ通り』

P B R

その話を聞いて、

今回ばかりは

目の前の女を

殴りたくなつた。

ケンタは園内に

視線を戻すと、

二人目の犠牲者の

少女が刺された。

keiが話を続ける。

『時間がありません、

いきますよ。

力を抜いて視線は男へ。

P B R

5次元への

アプローチは……』

言いながらkeiは

ケンタの心臓部分に

両手で強く

圧力をかける。

keiは指先の

一つ一つに、

体内あるいは体外の
気を集中的に集める。

ケンタは苦しくなり、
筋肉が少し硬直する。

『抵抗しないで、

すぐ楽になります

から…』

3人目、

男の子が首を刺され、
地面に落ちる。

ケンタは

言われた通りに、

意識して

力を抜いてゆく。

ゆっくりと

ケンタの心臓に

圧がかかってゆく。

少しずつ、気の流れを

心臓に浸透させる。

意識が、ゆっくり、

遠くなる…。

景色がぼんやりと

していき、そして、

ケンタの心臓は、

完全に停止した。

瞳孔が開いたまま、

動かない。

ただ肉体がそこに
あるだけ…。

肉体から意識や精神が
離れる時、

それらはとても

遠く離れた場所へ向かう

P B R

意識が遠くなる次の瞬間

P B R

ケンタの視界に

入ってきたのは、

宇宙。

見渡す限りの宇宙が

広がっている。

広い宇宙にただ一人

ふわふわ漂っている。

直後、真っ白になり、

幼稚園に戻ってきた。 k e iともう一人のオレが

P B R

目の前にいる。

不思議な景色だ。

今客観的に

自分を見ている。

園内からの悲鳴や叫びが

P B R

やっとケンタの

耳に入り、

すぐに男を捜す。

男は4人目の犠牲者の

男の子の背中を刺し、

立ち上がる。

ケンタが男の方向に

進む。

すると頭の中で、

見覚えのある声が

聞こえてきた、k e iだ。

P B R

《ケンタさん、

聞こえますね。私です》

P B R

ああ、聞こえる。

歩きながらケンタは

k e iと交信する。

《とにかく

男の体めがけて

走ってください。

鎌を持った男が

確認出来たら、

くれぐれも当たらない

よう気を付けて、

あるいは攻撃する事も

当たらない手段の

一つですよ。》

攻撃？

生きるか死ぬかの状況で

P B R

攻撃なんて選択肢

あるかよ。

しかしk e iの

その言葉を聞いて、

ケンタは一度止まる。

∴ 待て待て、

オレは何を考えてる？

もう4人の命が

犠牲にされた。

そしてあの保母さんは

自分の身を呈して

子供たちを守っている。

PBR

なのにオレは何だ。

怖いのは、

みんな同じだろ。

結局のところ、

自分の事が

一番大事か…。

こういう時に

実感するな。

ちっぽけな自分に

気づいてイヤになる。

《…認めてください、

小さな自分を。

怖がらずに。

等身大で

受け止めてください。

そうすれば

いつも新しい

自分でいられます。》

ケンタは大きく

息を吐く。

小さかろうが

醜かろうが

オレはオレか…、

優しい自分

冷たい自分

信じる自分

裏切る自分

全部オレだ…。

認める、認める…。

肉体はないのに
鼓動が聞こえる。
オレは人類の
進化のために
今動いてるんだろ、
戦っているんだろ、
リスク上等。

……オーケー。
そしてケンタはまた
男を目標に走り出す。
初めて意識の中で、
いつも避けてきた、
自分の認めたくない
所を認める、
そして使命を
受け入れる。
どうやらケンタにも、
覚悟というものが
脳に形成されはじめた
ようだ。

成長は、
出会いの中でしか
出来ないのであれば、
正にk e iこそが、
ケンタにとって
光であるのかも
しれない。
そしてケンタが
覚悟をした瞬間から、

ケンタはk e iの光に

なるのかもしれない。

それは決してすがらない

P B R

それは決して媚ない

ただそこに

在るということ。

それは必然で

あるということ。

あるいはそれを、

人は奇跡と呼ぶのか…

肉体から離れて、
ふわふわした感じた。
なんだかとても軽い。
そんな事を考えながら
男に一直線で走る
ケンタの表情に
迷いはなかった。
男の周りで争っている
のは全部で10人。
半々ぐらいで
戦っている。
誰が死神なのかは
まだ分からない。
まだ自分には
気づいていないようだ。
その時斜め後ろから
声がした。

PBR

《おい。》
keiではない。
明らかに男の声だ。
後ろを見ると、
自分に付いてくる
男が二人…。
《だ、誰…？》
ケンタがつぶやく。
《誰って、
いつもお前の

側にいるのによ、

そうか、知らなくても
しょうがない、

又八郎だ。

お前の親父に聞け。》

《俺の親父？》

年は20代後半、

なかなかいい

顔立ちだが

もう一人の男は若い。

まだ何も喋らない。

一体コイツらは…？

ケンタは一度止まり

前の様子を見ながら

keiに交信する。

《kei、

コイツらは何？》

《世に言う背後霊や

守護霊という

やつですね、

ケンタさんの…。》

《……俺の。》

《喧嘩上等！

おっぱじめようぜ！》

ケンタに喋ってきた

男前が叫ぶ。

ケンタは後ろを

振り向いて、

変なのが憑いて

いるのだなと

思わず苦笑い。

いつまで自分に

憑いてるのだろうと

考えていた時、

《前！》

と沈黙していた

もう一人の

若い男が言う。

ケンタが前を

向くよりも早く、

男前の真っ直ぐ伸びた

腕が、ケンタの顔の

ほんの数ミリ横を通る。

前を見ると

知らない男の顔に

男前の

右ストレートが炸裂。

《早く行け、ケンタ》

少し見つめ合い、

振り向かずに、

ケンタはまた走る。

もう一人の若い男も

ケンタの後を追う。

集中しろ、集中しろ。

ケンタは自分に

言い聞かす。

犯人めがけて

全速力で走りながら、

視線は死神の鎌を探す。

しかしどこにもいない。

P B R
P B R

P B R

犯人までの距離

およそ6 m。

右から男がケンタに
襲いかかる。

右腕で払い除け

男を振り切る。

犯人までの距離

およそ3.5 m、

またk e iの声が

聞こえる。

《さつき喫茶店で見た

映像を頭の中で

浮かべてください。

その状態で犯人の中に

入り込んでください。

そして……》

k e iが言い終わるよりも P B R

前に犯人の右手前から

男がさつと

ケンタの前に出てきた。

ケンタは感覚的に

嫌なものを感じる。

男がケンタに、

右手からパンチを

喰らわす。

すかさずケンタが

男の外側によけた瞬間

刃が視界に入る。

視界に入るよりも前に

ケンタはこうなる事が

分かっていたかの
ように、

そのままよけた顔を
下に動かしていき、
すれすれの所で

刃をよける。

ケンタはよけながら、
驚く程冷静に

この男が死神なのだ
と理解する。

顔を上げて男が
背を向いてる状態で
尻に蹴りを入れる。

死神は前に

つんのめり、

そのまま倒れ込む。

右手にハンドルの

ようなものを握って、

そのハンドルの先から

外側に向かって

大きな弧を描く刃が

死神の肘まで

伸びている。

異様な輝きと

形の鎌だ。

ケンタは表情一つ

変えずに

死神を冷静に観察する。

体型は犯人と似ていて、

若干中年太りの

P B R

P B R

大柄な男性。

髪の毛も犯人と同じく
短い天然パーマだ。

顔はとても白く、

目の下の大きな隈が

より肌の色を

際立たせている。

頬はやせこけて、

いかにも不健康な

要素満載だ。

しかしこの男が

紛れもない、

死神であるという事を

ケンタはきちんと

理解していた。

《よし kei、

犯人につっこむ。》

《了解。

犯人とケンタさんの

体が重なった瞬間に

喫茶店で見せた映像を

イメージして下さい。

時間がないので、

急いで。》

ケンタは

ポケットに入れた

小ピンを手に取った。

中のゴキブリの

触覚や足が

一度だけピクッと

動いた。
振り向いて犯人に
飛び込む。
死神が立ち上がり
ケンタを追う。
犯人までの距離50cm、
すかさず死神は
右手に持った
曲がり鎌を
左から横一文字に
振り抜く。
それよりも少し早く
ケンタが犯人の体に
半分重なる。
ここで先程見た
犯人の頭の中の
映像を引き出す。
ケンタと犯人の体が
60%重なった辺りで、
態勢を直して犯人と
同じ格好になる。
左から来る鎌と
ケンタの距離
およそ15cm。
ケンタと犯人が
ほぼ重なり、
ケンタの映像と
犯人の頭の中の状態、
二人の意識が
重なり合う。

鎌とケンタの距離

およそ5cm。

そして、

時間と次元が歪み出す。

PBR

園内にいる全ての人や

物が止まる。

意識の中にいる

ケンタからは

止まったように

見えるが、

実際は普通に

動いている。

頭の中で引き出した

映像が消えた。

暗闇で

よくわからないが、

何か凄い速さで

移動しているのは

わかる。

視界のずっと先に、

粒の光が現れて、

ケンタの周りを

通り過ぎる。

スピードのせいで

光の粒は

細長い蛍光灯のように

一直線に伸びて

ケンタとすれ違う。

また光が現れて、

今度は

ケンタが向かっている

方向の先に

一直線に伸び、

道を作る。

その先に光る

小さな点があり、

一瞬で近づくと

また光の中から

暗闇が広がり、

辺りがまた

真っ白になって、

体が重くなる。

眩しくて

つむった目を開けると

イメージで見た犯人の

頭の中の映像が

飛び込んだ。

《…ケンタさん》

keiだ。

《無事犯人の頭の中へ

到着しました。

後ろを見てください》

言われた通り

振り向くと、

映像同様

黒い渦が広がり、

それは今ある景色を

ゆっくりと、

そして確実に

消してゆく。

《ああ、さつき喫茶店

で見たやつだな》

ケンタが答える。

《それは少しずつ

ケンタさんとの距離を

縮めています。

実際の空間では

犯人と重なった

ケンタさんに

死神が鎌で

攻撃しています。

距離にしてあと

数センチ。

後ろに広がる暗闇に

ケンタさんが

触れる瞬間が、

鎌が当たる瞬間です。

暗闇のスピードが映像

で見たよりも早いです。

迅速かつ冷静、

確実に私が待つ

境界線へと

到着してください。

計算だと

一度の失敗も

駄目な状況です。

宜しくお願い……》

《話が長い、

もう行くよ。》

keiの説明を

P
B
R

かき消して

ケンタは先へと進む。

ケンタはほとんど

keiの話は

聞いてなかった。

目の前に広がる

白いガスの特徴を、

自分の記憶から

引き出していた。

小・中・大と吹き出す

ガスの3段階それぞれの P B R

放射時間を思い出す。

地面と左右の岩壁からは P B R

それぞれ最大

2ヶ所ずつ

(計：最大6ヶ所)

同時に吹き出る。

隣あつた穴からは

同時に吹き出さない。

穴と穴の間隔

およそ10cm程。

あらゆるガスの特徴を

同時に記憶から

引き出し、

ケンタは前に進む。

まず左側から

ガスが地面と

水平に出る。

ガスの勢いが

小さい内に

右側の地面からも
2 発噴射される。

ケンタはイメージを
映し出し、

実際のガスと重ねる。

無意識と意識の比率が
7：3。

脳が送った信号を

細胞がキャッチして、

ケンタの体は

白ガス地帯を

進み始める。

2

1分前の現在

keiはケンタの様子を
見守っていた。

ビンのゴキブリは

明らかに動きが鈍く

なつて来たようだ。

黄色いガーベラが

少し開いている。

園内を見ると、

ケンタは犯人に

近づいている。

《さつき喫茶店で見た
映像を頭の中で

浮かべてください。

その状態で犯人の中
に入り込んでください。

そして自分を犯人の
体に重ねてください。
ほとんど重なった

状態になると、

ケンタさんのイメージと P B R

犯人の意識の中が

混ざり合い…》

k e iはそこで

説明を止めた。

ケンタが死神と

遭遇し、

話を聞ける

状況ではない事が

分かったからだ。

しかしk e iが

話し続けた

最後の内容は、

聞けないまでも

必ずケンタの

潜在意識に残るはず。

そしてそれは

その状況になった時に

意識に上がって来ると

k e iは考えて

いたからだ。

少なくとも、

今極限状態に近い

ケンタの精神状態を

思えば、

可能性はかなり

高くなる。

《よしk e i、

犯人につっこむ。》

暫くして、

ケンタから返事が

帰ってきた。

どうやら一つめの山は

超えたようだ。

《了解。

犯人とケンタさんの

体が重なった瞬間に

喫茶店で見せた映像を

イメージして下さい。

時間がないので急いで》

P
B
R

k e iは言いながら

小ビンに目をやると、

中の生物は

ゆっくりとだが

さつきよりも各ヶ所が

動き始めている。

k e iは動かない

ケンタの両腕を持ち、

目を閉じる。

こうしておけば、

ケンタが犯人の体と

重なり合った時に、

自分も犯人の意識に

飛ぶ事が出来る。

後は待つだけ。

そして、真っ白な光が

目をつぶったk e iの
視界を覆う。

眩しい程の真つ白な
視界が長く続く。

次に、時間と次元が
歪み出す。

ゆっくりと確実に
それはねじれてゆく。

真つ白な視界から
黒い点が中央に現れて

やがてそれは
大きな黒い

丸になってゆく。
同時に自分が

その黒い丸に近づいて
いるのがわかる。

とても速く
移動している。

それは、音の無い世界。
瞬く間にk e iは

黒い丸の中に入り、
静かにその時を待つ。

ケンタが来るその時を。
3

ケンタは白ガスの地帯の
中央付近にいた。

前回ここを通った
経験？と記憶を

冷静に、迅速に
引き出しながら

P
B
R

P
B
R

P
B
R

慎重に、大胆に
前へと進む。
記憶による
正確な分析で、
ケンタはまだ
無事だった。
それでも
後ろから来る闇を
意識から拭いさる事は
出来ない。
正確さと早さの
優先順位が
めまぐるしく変わる。
ケンタの目の前を、
地面からガスが
勢い良く吹き出した。
一旦止まるが、
後ろにそびえる闇が
もうすぐそこまで
迫って来ている。
ケンタと闇の距離
およそ50cm。
この闇に触ればもう
元の世界に戻る事は
出来ない。
地面から出ている
ガスは1ヶ所だけ、
右側からも1ヶ所、
ケンタは左寄りに
いたため、

今警戒が必要なのは

地面からと左側からの

ガスの噴射の

タイミングが最優先だ。

P B R

いろいろあるパターン

をじっくりと考えている

P B R

猶予はなかった。

感覚と集中力を

信じて進む。

隣合った穴からは

ガスは出ないので、

今出ている

ガスの右脇を、

左側を背にして

カニ歩きで通ってゆく。

P B R

もしケンタを挟んで

右隣の地面から

ガスが出た場合、

しゃがむ事は出来ない。

P B R

左側からも

ガスが出た場合、

顔や胸が溶けるよりは

頭や背中の方が

リスクは少ないため、

左側を背にして進む。

今噴射しているガスの

右隣すれすれの進路を

通るため、

背中やお尻に

多少ガスがかかるため

少しではあるが

皮膚がただれ始める。

ケンタがいる場所よりも P B R

数メートル先で

地面から2ヶ所同時に

ガスが出た。

その瞬間ケンタは

態勢を直しながら

前へと走り出す。

左側と地面を

意識しながら

ひた走る。

keiが待つ

目的の地点まで

あと10m前後。

前方左側の壁2ヶ所から P B R

同時にガスが出た。

どちらもケンタの

腰よりも

低い位置での噴出。

飛び越えれば

なんとかなる

高さではあるが、

ケンタは敢えて待つ。

迫り来る闇との距離は

およそ2m。

しかし結構な速さで

ケンタの後を

追ってきている。

それでもケンタは

その先の様子を
見ながらただ待つ。
喫茶店での
シミュレーションで
何度もこの地帯を通り
体験した記憶を
元にすれば、
もしこのガスを
飛び越えた場合、
その先の着地付近から
ガスが噴出する
可能性が高いため、
ケンタは次のガスの
アクションを
集中して待つ。
迫り来る闇は
みるみるケンタとの
距離を縮める。
それでもケンタは
動かない。
すると先の地面から
ガスが噴出、
同時にケンタは動き出し
P B R
左のガスが
当たらないように
右にずれて、
右側と地面を
意識しながら
また走り出す。
4 m…2 m。

keiの待つ境界線まで
あとわずか。

いける。

とケンタは
考えてしまった。

その瞬間に、

前方右側の壁から

ケンタの顔の位置で

ガスが2つ吹き出す。

少しかがめば

通り抜けられる。

この場合のパターンを

記憶から引き出す。

確率の高い

この先のガスの出方は…

P
B
R

右側前方の地面から

出る確率48・25%。

左側前方の地面から

出る確率36・48%。

中央前方の地面から

出る確率15・29%。

地面から

出ない確率0・98%。

先が見えたので、

焦りを感じてしまった

ケンタは、

他の要因が加味する

パターンを見ずに、

確率の2番目に低い

中央に進路を移し、

前へと進む。

しかし……………。

確率はあくまでも

確率でしか

ないという事実を。

そして、

たった一つの油断で、

事態を急変させるという

P B R

事実を、

次の瞬間、

正に身を持って

知る事になる。

ケンタが進路を変えた

中央の地面から2ヶ所

ガスが吹き出た。

右から左に

移動しながら

前進していたため、

重心が左側にかかる。

急に出たガスを

避けようと、

左足で地面を蹴って

重心寄りの

左側に移動し、

何とかガスが

当たらずに済んだ。

しかし左壁から

ケンタの頭の高さ

くらいから

ガスが吹き出した。

避けた瞬間の出来事で
どうする事も出来ない。

P B R

頭部に直接ガスを受け
頭がほとんど

溶けて無くなった。

顔を流れ落ちる

溶けた肉や脳みそが、

ケンタの目を覆う。

視界は完全に遮られた。

P B R

keiが向こうにいる

境界線の位置までは

もう2mもない。

前後左右からの

ガスの音だけが

鳴り響く。

あの境界線まで

行かなければ

keiの声も聞こえない。

P B R

今は自分の力で

なんとかしなければ

ならない。

なんとしてもここを

突破しなければ…。

しかし視界は遮られ、

後ろからは

すぐ側まで闇が迫る。

闇に触れれば

全てが終わる…。

ケンタは今まで

味わった事のない

恐怖を覚える。

例えようのない何かに

飲み込まれそうに

ならないように、

恐怖に逆らうように、

ケンタは力いっぱい

叫びながら

keiの元へと走り出す。

P
B
R

そして、

この叫びこそを、

死神は待っていた。

叫び

ケンタが発した
この叫びは、
ただの雄叫びでは
なかった。
不安や恐怖が少しでも
絡み合う叫びは、
必ず死神の元へと
届いてしまう。
いついかなる時でも、
死神はその行為を
忘れない。
本能的に
恐怖が伴なう叫びを、
いつも静かに
舌なめずりをして
待っている。

DESIGN : 13

少しの油断で
思わぬ状況を
作ってしまったケンタ。

PBR

この地帯に
入りだしていた時は
あらゆる現象に
集中して、

記憶を正確に引き出し
選択肢を作り実行する。
確かに

P B R

迫ってくる闇には
スピードがあつたが、
冷静に記憶と
向き合つていれば、
闇に追い付かれる
事はなく、
今の状況も
クリア出来たかも
しれない…。

1

《…うおおああー！》
怒りにも似た声を
出しながら、

P B R

ケンタは
体が向いている方向へ
走り出す。
無意識に、
ポケットの中から
小ビンを探しだし、
握り締める。
中の様子はもう
見る事が出来ない。
このどうしようもない
極限状態で、
最後の記憶を辿る。
ケンタは頭の中で

今ある道の映像を作る。

P B R

何千回と通り、

失敗した道。

そして、

頭の中で整理された

数々の記憶は、

残念ながら

今は役には立たない。

しかし今さっきまで

目に映っていた

映像の記憶は、

綺麗に映し出す事が

出来た。

この映像で

距離はつかめる。

問題はガスの攻撃。

そして、

ケンタを追う間。

もう止まる事は

出来ない。

記憶の映像の中で、

必死に走るケンタ。

左足を前に出した

その時！

着地した地面から

ガスが勢い良く

吹き出す。

ケンタの左足は

直にガスを受け、

ももから下が

あつという間に
溶けだした。
そのまま左に傾くが、
左手をすぐに出し、
右足に重心を移す。
現状を細かく把握し、
考えられる状況では
なかったが、
左足がもう使えなく
なつた事だけは
理解していた。
闇はすぐ後ろ
5cm程の距離。
態勢を直し
前へと進む。
右足で跳べる限り、
とにかく、前へ進む。
しかし映像は頭の中で
見えているものの、
目を開けていない
状態と変わらないので
平衡感覚が
ほとんどない。
そして極限状態の中、
冷静でいる事が
困難である。
それでも本能は叫ぶ、
目的の場所まで
辿り着けと。
体が、細胞が

必死に答える。
右足に力を溜めて、
地面を思い切り
蹴りあげるが、
バランスを崩し、
前に倒れてしまう。
頭の中の映像では
境界線まで
あと数十センチ、
その場所へと
辿り着かなければ、
k e i が次の地帯へ
行く事が出来ない。
今の自分の状況を、
客観的に冷静に
把握すれば、
もはやこれ以上
生き続ける事は、
限りなく
不可能に近い。
付け加えるならば、
客観的に、
冷静に考えなくとも、
絶望的だ。
しかし、
1億数千年前から
我らの祖先は、
この地で他種の生物と
共に生きてきた。
もうこれ以上ない程、

数々の

致命的なダメージを

受けながらも、

それでも祖先が

生き絶える事は

一度となかった。

どんなに険しく、

苦しい状況で

あつても…。

そして人間の祖先は、

絶滅の危機を

乗り越える度に、

驚くべき進化を

遂げてきた…。

進化を遂げたいと

思う願い。

そのための

苦しみならば、

苦しみたいという願い。

ここで終りにさせない、

次に繋げてゆくという

願い。

全ては、未来のため。

輝く明日と子孫のため。

そう、もう後がないと

知った時の人間は、

意外に強い。

ケンタは

絶望の中にある

小さな小さな光を

P
B
R

P
B
R

P
B
R

たぐりよせる。
それは意識では
辿り着けない
無限の世界。
今一人の人間が、
塵のような
微かな望みを、
小ビンの中で
ゆっくりと動く
ゴキブリに託す。
倒れた体が
地面に着くよりも前に
左手で握り締めた
小ビンの蓋を
右手で開け、
そのまま右手に、
ゴキブリが
逃げないように
手の平に落としてから
勢いをつけて
頭の中の映像で見る
境界線へと、ゴキブリを投げた。
後は状況の変化を
待つ事しか出来ない。
投げたゴキブリが
届かないかもしれない
届いても
ゴキブリが死なないと
いう保障はない。
そして無事に

ゴキブリが

目的地点に着いても、
k e i が現れなければ
意味がない。

数々の疑問はあるが、
ケンタにはこの選択肢
しかなかった。

これ意外出来なかった。
人生の最後にした事、
、ゴキブリを投げる、

P
B
R

… 笑えない。

恐ろしく速く、

そして静かに、

闇がケンタに迫り、

そのまま境界線に
へばりついた

ゴキブリまで、

一瞬にして

全てを覆いつくす。

ケンタの存在は

その場から消えて

無くなった。

全てが闇に消え、

境界線までのエリアは

静寂を迎える。

その透き通った

境界線の先には、

のどかな風景が

広がっていた。

樹々が生い茂った

場所から

小鳥がさえずり、

空は青く澄んでいる。

その景色の左側手前：

keiが見える。

彼女は確かに

其処に存在していた。

2

keiは静かに瞼を開け

立ち上がり、

のどかな草原の中を

歩いていた。

何かの気配を

感じながらも、

keiは歩き続ける。

すると背後から、

包丁を持った

例の老婆が

いきなり襲ってきた。

老婆はkeiの

後頭部を狙って

包丁を突き出した。

keiはそれよりも早く

殺気に気づき、

首を傾けながら

体も同じ方向に

少しずらし、

攻撃を避ける。

そのまま左手で

老婆の手首を、
右手で腕の辺りを
しっかりと掴み、
反動を利用して
老婆を背負って
投げ落とす。
老婆の体は見事に
地面に叩き落とされ、
一度地面に
跳ね返される。
すかさずk e iは
右手で老婆の首を掴み
尚も地面に叩き付け、
首を締めあげる。
直後にk e iの後頭部に
鋭い刃物が刺さる。
刺した力で
k e iの頭が、
ガクンと下に下がる。
刺した相手を
見ようとせせず、
今の何者かの攻撃で
散らばってしまった
集中力と力を、
再び右手に込める。
右手の力が
少し弱まったので、
しめたと思い、
k e iが後ろを
振り向いた所を

一撃お見舞いしよう
とにやけていたが、
予想が大きく
外れた事と、
再び首を掴む力が
急激に増した事で、
老婆の表情はみるみる
変わっていった。
その表情をk e iは
冷たい目で見守る。
そして、見えない
もう一人の敵も、
攻撃にさして
反応しないk e iに
つまらない表情を
見せたが、
また後頭部に向けて
包丁での攻撃を
繰り返す。
頭から流れてくる血が
髪の毛や頬をつたい、
老婆の顔にポタポタと
落ちてゆく。
そして、老婆は
白眼をむきながら、
静かに意識をなくす。
k e iは一気に右手に
力を集める。
グニヤという変な音と、
老婆の異様な首の

P
B
R

曲がり方を見てから
すっと手を放し
今度は新しい敵に
意識を移してゆく。
後頭部に5回包丁を
突き刺した者は、
k e iの首に
馬乗りになり、
更にk e iの頭に
攻撃を加える。
k e iは考えていた。
攻撃の
構造・思考・力等の
大きく分けた特徴が
老婆と酷似している。
後ろを向き、
相手の次の
攻撃に備えて構えるが
敵の攻撃が
少し早いため、
おでこと髪の毛の
生え際の辺りに
鋭い包丁が刺さり、
刃が半分以上、k e iの
体の中に埋まる。
血が一気に吹き出し、
敵めがけて飛び散った。
顔いっぱい
返り血を浴びて
視界が遮られた為、

P B R

少し下がって

目の辺りに付いた血を
手で拭き取る。

真っ赤な顔で

分かりづらいが、

それは先程まで

k e iと争っていた

老婆本人だった。

しかしさつきk e iが

首を締めた相手は

そのまま倒れて

動かないでいる。

ではこの瓜二つの

老婆は一体…？

二人だったのか…、

いや3人、他にも

いるかもしれないが、

分かっている事は

この老婆は

敵対的だという事。

闘わなければいけない。

P B R

老婆がまた

両手に包丁を持ち、

攻撃態勢に入る。

k e iは次の老婆の

動き出しに集中を注ぐ。

P B R

一歩目の足は？

どちらの手で

攻撃してくるか、

k e iは老婆の

目の動きをじつと見る。

P B R

数秒見合い、

老婆から動き出す。

老婆の包丁を持った

左手が上に上がる瞬間

k e iは相手の動きの

必然性を、

計算式で探し出す。

大きく分けて二つ、

威嚇によるものと、

攻撃。

k e iと老婆の距離は

3 . 5 m。

威嚇であれば、

その次の

威嚇、攻撃に

連動するものか、

もしくはk e iの視界から

P B R

消えるためのだまし、

あるいは次の手を

考える間作り等…。

一方攻撃の場合、

基本的には

数限りないが、

この老婆が

犯人の中のトラウマの

本質であるならば、

今ある老婆の形を

極端に変える事は

しない、いや出来ない。

P B R

それが出来ていれば
ここまでの状況には
ならない。

この事から、

3.5mの距離で

考えられる可能性の

高い攻撃は…。

老婆は素早く上げた

手を振り下ろし、

持っていた包丁を

勢い良くk e iめがけて

放り投げた。

放り投げてすぐに

老婆は包丁の後を

小走りで追いかける。

k e iが避けた方向に

もう一方の包丁も

続けて投げる

予定だったが、

k e iが避ける様子は

なかったので、

走りながら再び

k e iめがけて

包丁を投げる。

避けても避けなくても

直接攻撃を仕掛ける

構えだ。

自分に向かってくる

包丁に対して、

k e iはまだ…動かない

動かないまま

2本の包丁が右胸と

左肩内側に刺さった。

刺さった後、

老婆がk e iの手前で

大きくジャンプして

包丁で襲いかかる。

k e iはずっと

老婆の動きを

追っていた。

老婆の状態：

右足で地面を

蹴ったので、

右足は伸びていて、

左足は膝を曲げた状態

右手は上に持ち上がり

左手は横にして

お腹に付けている。

老婆の左側からの

攻撃に対して

k e iは左にずれて

攻撃を避ける。

老婆は右手に持っていた

P B R

包丁を放し、

k e iの左肩に刺さった

包丁の柄の部分掴み

左手で

k e iの首を突き刺す。

k e iはすぐに

老婆の襟を掴んで

逃げないようにする。
老婆は構わず右足を
k e i の胸に押し当て、
力を利用して
左肩に刺さった包丁を
素早く抜き取り
k e i の左目を刺した。
同時に k e i も首を取り
締め上げる。
力を両手に集めて
一気に絞り、ねじり、
尚も力を入れると、
、パンツ、という
大きな音と共に、
老婆は
消えて無くなった。
片方の目を失い、
視界が悪い。
景色は相変わらず
のどかだ。
老婆が破裂した瞬間は
景色が大きく
歪みかけたが、
今は穏やかでいる。
体中
血だらけの傷だらけ、
どれも深いものだが
k e i は先へ進む。
それは目的の場所から
少し外れた、

木が沢山生い茂った
所へ歩いて行く。
負傷したせいか、
動きもゆっくりだ。
その時、
k e i の右斜め後ろ
7 m 辺りに倒れていた、
首をへし折られた
老婆が、
音を立てずに
ムクツと起き上がる。
首は曲がったまま、
顔をぶらぶら
させながら歩き出す。
k e i に気付かれない
程度に足早に近づくと
持っていた包丁で
k e i の背中を一閃。
左側から斜めに
振り下ろされた刃は
鋭く k e i の肉を
引き裂く。
リアクションを
楽しみにしていた
老婆だったが、
切られた時さえ
鈍く体が反応したが、
k e i は振り返る事なく
歩き続けた。
老婆は少し間を置いて

再びk e iを切りつける。

P B R

それは何度も

繰り返された。

堪らずk e iは

木の側まで来て、

前から倒れた。

老婆はk e iの上に乗

更さらに包丁を

突き刺し続けた。

もう動かないk e iを

暫しばらくく眺めてから、

老婆は立ち上がった

ケタケタ笑い出した。

そしてその笑いは

急に止んだ。

何者かが老婆の首を

締め始めたからだ。

次に景色が変わる。

老婆の視界が

ぐるぐる回り出す。

やがて地面に倒れた

感覚を覚える。

それから視界に

k e iが見える。

k e iの隣に

小さな人間がいるが、

その人間には

首から上が無い。

よく見ると

自分の着ていた衣装に

そつくりだと
老婆は思った。いや、
よく考えるとあれは
自分の体だと気付く。
では今地面に倒れた
自分は頭だけ…？
老婆はもう一度
k e iを見ると、
どこも怪我を
していない。
服も体も元の状態で
綺麗なままだ。
もう一人の動かない
血だらけのk e iを見て
思う。
やられた…………。

3

ケンタには確かに
意識があつた。
意識があるものの、
生きているかどうか
さえ分からずにいた。
周りの景色は何も無く
ただ暗闇が在るだけ。
その暗闇の中を
再び凄いスピードで
移動している事だけは
はっきりと分かる。
前方に光の粒が

現れては消えて、
また現れる。
これを見るのは
2度目だなど
ケンタは考えていた。
何度も白い光が
通り過ぎてゆく。
いったいどのくらいの
スピードなのだろう。
最初に通った時も
同じ事を考えていた
ような気がする。
すると前方から
白い光とは
規則性の違う
別の何かがある。
闇の中でも
それは分かった。
瞬く間に
それに近づくと、
どこかで見た顔だと
気付く。確か……
死神……。
ん？なぜ死神がいる？
横を通り過ぎる瞬間、
死神はケンタの
腕を掴む動作をとるが
実際には重なるだけで
触れる事は出来ない。
音の無い空間で

二人は顔を見合う。
その時、死神の言葉が
ケンタの頭に
入ってきた。

「見つけたぞ、
覚えておけ」

静寂の闇の中、
ケンタは死神から
目を離さない。

「再び聞けるお前の
叫びが楽しみだ」

その最後の死神の言葉が
P
B
R

頭の中に
入ってきた時には、
もうお互い
どこにいるか
わからないスピードで
離れていった。
自分の意識は、生へと
向かっているのか、
それとも死…。
全てはここを
通り過ぎてから
分かる事だろう。

少し前のk e iと

老婆の対峙

k e iは、体に包丁が
何ヶ所も刺さり、
傷だらけ血だらけの
痛々しい

もう一人の自分が
こちらに歩いて
くるのを、

木の影から
静かに見ていた。

∴ 4 m ∴ 3 m。そして、
首が折れた老婆が、
血だらけのk e iを
後ろから切りつけた。

k e iはそのまま
前のめりに倒れ込み、
その上から老婆は
尚も切りつける。

それを木の影から
見ていたk e iは、
気配を沈めて、
周りの状況を確認する。

そして考える。
もう一人の老婆が
消えた時に

景色が歪んだ事。
わざわざ

死んだ振りをして
タイミングを待った事。

P B R

P B R

負傷した

リスクを負っても

自分でk e iに止めを
刺そうとした事…。

以上の事から、

老婆は二人の可能性が
強いとk e iは思う。

喫茶店で見たイメージで P B R

老婆が破裂した時に

景色が変わらなかった

事で、まだ他にいる事を P B R

理解していた。

だからこそ、

自分の分身を作り上げ

おとりにした。

精神力も集中力も

沢山使うため、

本来ある力や速さに

劣ってしまう

リスクはあったが、

攻撃のパターンは

把握していたので、

可能性は

低くはなかった。

しかし、負ける確率も

低くはなかった…。

もし三人目の敵が

現れたら、

今度は正面から闘う。

k e iはそつと老婆の

後ろに回った。

気持ち良く笑っている

老婆の折れた首を

一気にねじり取る。

老婆の頭は、

回りながら宙に浮いて、

ドサツという音を立て

地面に落ちた。

するとどかな景色が

歪み始める。

空が、山が、木が

大きく波を打つ。

空からひびが入り、

瞬間にそのひびは

景色全てを

覆いつくす。

そして、老婆の体や

頭にも同じように

ひびが入ってゆく。

keiが老婆の

転がった頭に

目をやると、

老婆も悔しそうに

こちらを見ていた。

keiはじっと見返し、

暫く二人は見合う。

老婆の瞳の奥をずっと

見つめていると

keiの頭の中から

イメージが

P
B
R

浮かび上がった……。

死神と出会ったケンタの行き着く先は……？

いよいよ犯人の本質に
触れ始めるk e i。

二人は同じ時間軸で、

再び出会う事が

出来るのか……。

細かいヒビが
無数に入った、
老婆の瞳の奥を
覗き込むと、
k e i を取り囲んでいた
景色が突然変わる。
木も草も、
水のせせらぎも、
今はもう何もない。
すぐ後ろから
声がする。
振り向くと同時に
子供達が
通り過ぎてゆく。
子供達のほうに
顔を戻すとそこには、
木造の古ぼけた
民家が、
肩を寄せ合うように
並んでいた。
髯で出来た
裏通りのような所を、
子供達は元気よく
駆けていった。
すると向こうから
親子連れが二人が
歩いてくる。

手をつないでいる
子供の方は、
淋しそうに
うつむいていた。
k e iを通り過ぎ、
母親は右手にある
家の戸を叩く。
すると、中から
出てきたのは、
先程k e iとの死闘で
敗れた老婆だった。
母親は老婆と
話している。
「今日から息子が
お世話になります。
宜しくお願いします」
深く頭を下げる母親の
手を振り切って、
子供はk e iに向かって
走って来た。
二人の体が重なると、
そこで全てが止まる。
その映像を
別の角度から
k e iは見ていた。
自分も含めて
全てが止まった風景を
横から見ている。
「ねえ」すぐそばで
声がしたので、

振り向くと

突然景色が

変わっていた。

川が流れている。

遠くに鉄橋が見えて、

電車が鉄橋を

通過する。

川に沿った土手の上に

先程の少年が

座っていた。

少年の隣にk e iも座る。

P B R

「お婆ちゃんは

無愛想だったけど、

それでも最初は

優しくしてくれた。

でもお母さんがいなく

なっちゃったんだ…、

好きな人が

出来たみたい。

「お父さんは？」

k e iが聞く。

「僕が小さい時に

死んじゃった。

だからあんまり

覚えてない。」

「お母さんは好き？」

「……嫌い。」

そのせいでお婆ちゃん

が僕に怒るから。」

「どつやって？」

「ちよつとでもへマを
すると、

包丁持って

怒るんだ…。」

少年は小さく震えだす。

「お婆ちゃんが怖い？」

keiが聞く。

「お婆ちゃんには全て

従うしかなかった…。」

後ろから同じ少年の

声がした。

振り向くと今度は

部屋の中にいる。

老婆が少年を

叱っていた。

「すいません、

すいませんんー！

もうしません、

すいません。」

泣きながら怯える少年、

老婆の右手には

包丁が反射して

眩しい光を

放っていた。

「母親そつくりだね

この子は！

腐る前にその手を

出しな！」

「すいません。

すいません。」

P
B
R

P
B
R

P
B
R

「早くお出しイイ、
切り刻もうか

お前わああああー!!」
大きな怒声に驚き、
少年は泣きながら謝る。

P B R

「切らないで
ごめんなさい、
切らないで

ごめんなさい。」
もう声が枯れている。
老婆は構わず

少年の左手を強引に
引っ張って、
包丁を近づけると、

keiの隣から、
「いやだあ　　っ
!!!!!!」

という叫び声と共に
風景が粉々に碎け散る。
老婆と少年がいた

P B R

部屋の空間は
幾つもの破片となり、
keiの足下に広がった。

P B R

真っ暗な景色の中、
そっと横から
少年が現れる。

少年は前を見ながら
言う。

「とにかくお婆ちゃん
を怒らせない事が、

生きるために大事な
事だった。

僕が我慢出来たのは、
お母さんを信じて
いたから……」

「そう……、ずっと我慢
して待ってたのね。」

keiの言葉に少年は
黙って頷く。

ゆっくりと眉間に
しわを寄せて、

少年は続ける。

「だけど帰って
来なかった……。

我慢したのに、
待ってたのに……。」

少年の透き通った
瞳がうるみ、

涙が溢れだす。

それから少年の顔は
鋭く険しさを増した。

「だからみんな嫌い。
みんないらない。」

「お父さんも？」
keiが尋ねると、

少年は頷く。

「自分も嫌い？」

keiは続けて聞くと、
少年は少し

黙ったままだった。

「僕の事は…

分からない。」

考えながら

少年は答える。

「でもあいつらとは

違うよ」

「アイツラって、誰？」

P
B
R

「僕らを置いて

先に死んじゃった

お父さん…

いつもいつも

僕をいじめる

お婆ちゃん…そして、

僕を置き去りにした

お母さん…。

僕は、ボクは……。」

言いながら

少年が消えて、

景色が変わる。

また違う部屋の中、

小さな勉強机の

本棚には、

いろんな種類の

本があった。

怪獣図鑑、宝島、

月刊コロコロ。

整理された机の上に

ノートが一冊

置かれていた。

keiはそつと

ノートを取り、
ゆっくりと
ページを開く。
1ページ目：
ヒーローのような絵が
描かれている。
次のページからは
暫く学校の授業での
勉強ノートに
なっていた。
空白はほとんど
落書きに徹していた。
字は、きたない。
それからまた
数ページ、
絵だけ描かれていて、
真っ白な状態の
ページが続いてから、
今度は3つの大きな
黒い丸があった。
何度も何度も
塗り潰したのか、
その部分だけ
窪んでいた。
ずっとその黒い部分
だけを見ていると、
なんだか吸い込まれて
いきそうだ。
残りのページはまだ
何も書かれていない。

窓からは

透き通るような

青空が見える。

それを邪魔する建物は

銭湯の煙突くらいか。

景観からするとここは

さきほど老婆が

玄関から出てきた家の

2階だろう。

誰かが階段を

上がってくる。

部屋の襖は

開いていたので、

廊下から階段までの

焦茶色の木造作りの

風景が良く見える。

階段を上がって

来たのは少年だった。

泣きそうな顔で

逃げるように

木の階段を駆け上がる。

後を追って来たのは、

右手に包丁を持った

老婆だった。

少年は部屋の隅まで

行き、逃げ場が

なくなると怖くなり

振り返る。

涙をこぼしながら

手の平を拡げて、

P
B
R

体を必死にかばい、
迫って来る老婆に
何度も謝り続けた。
そんな少年の動作も
お構いなく、

老婆は包丁で威嚇する。

P B R

「うあああ

ごめんなさいい、

ごめんなさいいー」

部屋の隅っこで

泣き叫ぶ少年。

しばらくすると

全ての音が消える。

少年の泣く声も、

老婆の叱責も全てが、

音の無い世界。

まるで無声映画を

見ているようだった。

隣にまた少年がいた。

自分のそんな光景を

見ながら、

少年はk e iに言う。

「なんで僕だけなの？

なんで僕だけいっぱい

怒られるの…？

いい子でいるのに、

何にも悪い事

してないのに…どうして

P B R

…どうして…。」

少年の体は

急に震えだし、
とっさに両手で
自分の両腕を抑える。
「お婆ちゃんが好き…
お婆ちゃんが好き…
お婆ちゃんが…」
k e i は辺りが眩しく
なったのを感じ、
強烈な光を
手で遮りながら
目をつむる。
やがてゆっくりと
白い光が闇に消えると
目を開けた。
部屋には k e i の他は
誰もいなくなつた。静かな部屋に一人…。
さつきと同じ
2階の部屋。
どうやらここは
少年の部屋のようだ。
勉強机代わりの、
低い平らな
テーブルの上に、
さつき見たノートが
置いてある。
k e i は座布団の上に
腰を下ろして、
窓の外から映る
景色を見ていた。
澄んだ青い空の

あちこちにちぎれ雲が
浮かんでいた。
遠くにはぼんやりと
山も見える。
ここに座り、
この景色を見ながら、
少年は何を
思ったのだろう。
のどかな景色に
心を許して、
純粋な時間に
身を任せていたのか。
それとも、
この景色に醜ささえ
感じてしまう程、
心が閉ざされて
しまったのか。
単純に、
あるいは複雑に
絡み合った感情に、
少年は何度も
心を無くした。
無くしては
この景色を見て、
生きている苦しみを
忘れたかったの
だろうか…。
問題は傷ついた心
ではなく、
それを受け止めて

くれる心が、
側に無かった事。
この空間こそが、
少年の数少ない
心の拠り所、
少年を純粹にも
醜くも作つた
場所である。
全ての事が
必然であるならば、
作りたくない
この状況を自分が
作つたのならば、
少年が生きた
この時代ではなく、
別の場所で生きた
自分に原因がある…。
現象に対しての本質が
分からない時、
人は苦しむ。
本質が分からないと
いう事は、
原因が分からないと
いう事。
しかし少年のように、
原因が今の
少年にない場合、
本質に近づくのは
かなり難しい。
本人が難しいのだから、

P
B
R

他人はもつと

分らない。

矛盾しているが、

それでも分かるうと

してくれる心を

本人は欲している。

それが少年には

無かった。

いつの間にかk e iは

鉛筆を握り締め、

ノートに黒丸を描き、

何度も塗り潰していた。

少年の心にある

大きな穴を一生懸命

埋めていくように、

ただひたすら、

黒い円を描いていた。

少年がいつもそうして

いたように…。

k e iの目は

うつろなまま、

自分で塗り潰している

黒い円を見つめていた。

どんだん意識が

円の中に吸い込まれて

いくような感覚。

その行為を、やがて

無意識が支配するようにな

ると、

次第に少年とk e iの心が

P B R

P B R

P B R

P B R

重なり合う。

頭の中に少年の言葉が入ってくる。

、ジブンノソンザイノ
ウスサ、

「自分の存在の薄さ…」

P B R

無意識にkeiは、

呪文のようにその言葉を
呟いていた。

P B R

、ナンノタメニイキ、

「何のために生き…」

、ナンノタメニシヌ、

「何のために死ぬ…」

、ココロガミツカラ

ナイ、

「心が見つからない」

、ウマクワラエナイ、

「上手く笑えない…」

「…上手く…泣けない」

P B R

黒い円を

塗り潰しながら、

keiの瞳から

涙がこぼれる。

こぼれた涙は頬を伝い

使い古された机の上に

落ちてゆく。

流れては落ち、

流れては落ち…。

沢山の涙の粒が

机の木に染み込んで、

消えてゆく。
背後から少年が、
そつとk e iの肩に
手を置く。
k e iは首だけ動かして
少年を見る。
少年は顔を近づけ、
大きく口を開けて
何かを言っているが、
声になっていないので
分からなかった。
k e iは涙を手で拭い、
少年の口を見た。
「……で、……いで、
……おいで……おいで」
k e iが言葉にすると
少年は部屋の隅に行き
腕を折り曲げて、
脇を広げたり
閉じたりしながら、
膝を少し曲げて、
ゆっくり回りだす。
k e iは少年の踊りを
じっくり見ていると、
右手に痛みを感じ、
手の内側を確認する。
すると、何か鋭い物に
切られたように
k e iの内側の腕に
線のような傷が入る。

鮮やかな傷口から
温かい血が
そつと顔を出す。
やがてそれは
消えてなくなり、
傷も痛みもない、
綺麗な肌がある。
そしてまた切られた
痛みを感じて、
先程とは違う
腕の場所に
傷口が作られる。
切られては消え、
切られては消え…。
見えない何かか、
k e i に何十何百という
無数の傷を刻み、
痛みを与える。
ゆつくりと踊っていた
少年に目をやると、
少年はもういなかった。
代わりに黒い渦が
回っていた。
渦はどんどん
大きくなって、
やがて部屋ごと k e i を
飲みこまんとばかりに
k e i に迫っていた。
渦の中心が浮き出て、
少年の顔を形作り、

P
B
R

keiに話す。

「もうどこにも
行けないぞ」

keiの目は虚ろで、
ゆっくりと空間を

泳いでいるようだった。

渦はどんどんkeiに

近づいていく。

どこか違う場所を

さまよっていた

keiの目が

しっかりと開き、

目を閉じる。

瞼の裏からkeiは、

遠い日の少年に出会う。

母親の腕に抱かれた

小さな生命を

優しくあやして、

母親は

子守り歌を歌う。

頭に入ってきた歌を、

そのまま歌い始めると、

ぐるぐると回りながら

今にもkeiを

食べてしまいそうな

大きな渦は、

keiが歌う歌と共に、

静かに動きを止める。

暫く歌を聞き入ってる

ようだった。

P
B
R

P
B
R

P
B
R

緩やかに
回りはじめる渦は、
まるでk e iの歌に
合わせているように、
その身を委ねて、
ゆっくりと
k e iに近づく。
渦の中心が顔に触れる
かという距離で、
k e iは目を開けて
渦に眩く。
「これもあなたの
本質よ。」
歌を懐かしみ、
切なく心地よい空間を
漂っていた少年の魂は
k e iの一言によって
一瞬で現実に
引き戻される。
全てが柔らかかった
あの頃…。
もう戻らない
あの時間と、
現実の耐えられない
苦しみとが、
少年の心の中で
重なり合う。
混乱した少年の
暗い闇は、
k e iの言葉を

受け止める事が
出来ない。
そしてまた、
景色が
吹き飛んでゆく。
k e i はとつさに
顔を両手で覆った。
一瞬で
静かになつた空間、
ゆっくりと
顔を上げると、
真っ直ぐに
道が伸びていた。
低い天井、
狭い壁はどちらも
真っ白だ。
自分はその道の上に
いる事を確認すると、
黒と白の
ストライプの床が、
エスカレーターの様
自動的に
前へと動き出す。
途中で右や左に
曲がれる通路がある。
手前の左に曲がれる
通路を通り越して、
次の右に曲がれる
通路に飛び込む。
今度は進行方向と逆に

床が動いているため、
全力で走らなければ
元の道に戻ってしまふ。
P B R

必死に走るk e i。
一つめ、二つめ…

三つめの左に曲がる
通路に辿り着くと、
方向を左に移して
床に飛び乗る。

今度は床が進行方向に
進んでいるが
少し先は真つ暗な道に
つながっていて
何も見えない。

k e iは目の前の闇を
確認するとすぐに
右に曲がれる通路に
飛び込む。

するとそこはまた
逆方向に

床が移動している。
また後ろの通路に
戻されそうになるが、
すぐに態勢を

立て直して、
必死に前へと走り出す。
決して戻されては
ならない。

P B R

闇の中に飲み込まれて
しまったら、

全てが終わる。

どこの空間にも

つながっていて、

どこの空間にも

接触を持たない。

全ての空間に

存在するが

空間を持たないその間

P B R

危険と呼ぶには

抽象的過ぎる程恐ろしい

P B R

モノだという事を、

keiは知っていた。

そして、

どれだけ逃げても

逃げられない事も…。

しかし、

今はなんとしても

最後の部屋に辿り

着かなければならない。

P B R

犯人が心を持つ

最後の部屋に。

keiの走る先には、

扉のような

ものがあつた。

自分と扉の距離が

徐々に縮まってゆく。

一歩一歩床に

足を踏み付けて、

扉へと進むkei。

後ろは振り返らず、

意識から闇を消して、
前だけを見る。

もう手を伸ばせば
扉に触れる事が
出来る。

keiは焦らずに、
スピードを

弱める事もなく、

上半身を少し動かして
ゆっくりと手を伸ばす。

P B R

ノブに手が届き、
しっかりと握り締める。
スピードは

P B R

決して緩める事なく、
しかし次のアクション
も意識に入れて…。

自分と、ケンタが、
未来を救う。

そして、今少年の心を
受け止めなければ、

少年に殺された魂は
動けなく

なってしまう。

少年の心を

心のままにするために、

P B R

keiは最後のドアを…
開ける。

開けた瞬間に勢い良く
飛び込んだせいで、
前から倒れ込む。

するとそこは、
先程までいた
2階の少年の
部屋だった。

また戻って来て
しまったのだろうか？
しかしk e iの顔は、
落ち着いた表情で、
笑顔さえ見せていた。
さつきと

変わらない風景。
ただ一つ違うのは、
机の上にノートは無く、
水の入った

P B R

牛乳びんの空き瓶が
置いてあった。

k e iは机まで

這って行き、

胸元にしまった

黄色いガーベラを出し

そっと瓶に入れる。

青空に微笑みながら、

凜と咲く

ガーベラを見ながら、k e iは意識を
無くしていった…。

犯人のトラウマ…

闇の中の光に近づき、

更に深い場所へと

手を伸ばすと、

そこはもう
光も闇もなく、
希望も絶望も
存在しない。
ただ心があるだけ…。
その心に触れた時、
宇宙はゆっくりと、
深呼吸を始める。

ケンタの意識は
物凄いスピードで
移動していた。
真つ暗な闇の中、
何百何千もの白い
光線が通り過ぎる。
どれだけの時間が
経ったのか。
数分か：
いやもう既に
何時間も過ぎていて
ような感覚。
生きているのか
死んでいるのかさえ
分からない状態で、
ケンタは闇の中を
さまよう。
ケンタは
行き着く先を
想像する事が
出来なかったので、
自分がいなくなった
後の周りの事を
考えていた。
親父一人ぼつちに
させちまうな。
とか、アパートの

光熱費まだ
払ってなかったな。
とか、この前
仲良くなったコに
まだメールして
なかったな。等々…。
白い光の粒がまた
ケンタとすれ違う。
沢山の粒が集まり、
やがて白い粒は
闇を潰してゆく。
真っ白になった空間が
ケンタを包み込み、
眩しさに耐えられず
ケンタは目をつぶる。
と、瞼の裏から
宇宙のような空間が
無限に広がる。
ケンタは目を閉じた
ままその景色を
じっと見ていた。
すると急に
体が重くなり、
高い場所から落下して
心臓が縮まる
感覚に苦しむ。
ハッ！と目を開けると
k e i が壁にもたれて
苦しそうに眠っている。
辺りを見回すと、

P
B
R

幼稚園の柵の外を
取り囲むように、
土が撒かれた場所に
自分がいる事を
確認する。
同時に、
生きてこの世界に
帰って来る事が出来て
安堵感と疲れが一気に
襲来する。
しかし園内の状況を
見るとすぐに、
それは消え去った。
子供達をかばう
保母さんの前に
仁王立ちした犯人は、
今にも包丁を持った
手を振り下ろそうと
していた。
しかし実際には
その状態から
動こうとしない。
ケンタは慌てて
もう一度k e iを見る。
ひどくうなされて
いるようだったので、
意識が戻ったばかりの
おぼつかない手で、
k e iの手を取り、
ぎゅっと握り締める。

握り締めたまま、
視線を園内に戻す。
右手を振り上げたまま
動かない犯人。
ケンタはこの時間を
とても長く感じてた。
k e i を握り締める手に
力が入る。

k e i が苦しそうに、
ううつ…と声をあげる。
k e i の方を見てから
自分の手の力に
気付いて、
すぐに手をほどく。

P B R

k e i の意識が
戻りそうだったので、
ケンタは必死に
呼びかけた。

「おい大丈夫か k e i、
しっかりしろ！

聞こえるか？」

相手の状況は
お構いなく、

唯々意識が

戻って欲しかった。

すると k e i は

ゆっくりと目を開けて

ケンタを見ると、

優しい目を向ける。

力のない声で

keiは言う。

「ケンタさん、

状況は？」

慌ててケンタは

園内に目を戻すと、

犯人が玄関に向かって

歩き始めてる。

「あれっ？」

思わず声に出る。

保母さんと子供達は

どうやら無事のようにだ。

みんな保母さんの

後ろに隠れながら、

泣いている。

刺された形跡はない。

「アイツ出ていくぞ、

追わないと……」

動き出すケンタを

keiが止める。

「大丈夫、

もうこれ以上

人は殺しませんし、

逃げたりもしません」

その場において

信じられなかった。

ケンタのそんな表情を

確認してから、

keiは続ける。

「もうこれ以上

殺す事の意味は

P
B
R

なくなつたので、
あの男はこれから
自首します。」
ケンタは複雑な
表情を作る。

ついさつきまで何人も
人を殺した人間だ。
一体犯人の意識の中で
何が起こつたのか。
k e i が何かした事
だけは確かなのだが。
しかしやはり
k e i の言う事を
信じるしかない。
包丁を持った
血まみれの男は、
幼稚園を出て、
反対側の道を
歩いていった。

k e i は自分の胸元を
ゴソゴソと探りだし、
ガーベラを俺に見せた。
ガーベラは小さく
ただれて無惨な色に
枯れていた…。

「ケンタさん、
ポケット…」

俺のポケットを
見ながらk e i は言う。
ポケット？

P
B
R

言われるままに
ポケットを探ると、
固いものに
指がぶつかる…。
忘れてた、この固い
容器の中には
俺の大嫌いなものが
入っていた。
ゆっくりと
それを取り出すと、
中にいた最恐生物は
足を折り曲げて
仰向けになつたまま、
ピクリとも
動かなかった。
ありがとう、
お前に感謝した事は
一度とてなかつた。
暫くゴキブリを
見つめてから、
ケンタは園内に
視線を戻す。
酷い状況だ。
殺されて
死んでいった者、
生き残つた人間は
恐怖に怯える。
一人の行動で、
沢山の人間が
恐怖と苦しみを

味わうこともある…。
こんな事があつて
いいのだろうか…。
ケンタは胸が
張り裂ける思いで、
園内にいる
人達を見つめていた。
こんな状態を
直視すると、
自分がやっている
事への意義と、
自身の出来る
限界を知る。
ちっぽけな自分が
考えても
解る訳ないのに、
それでも
いっぺんに来た疑問に
真正面から受け止め
ようとするため、
体がついて
いけなくなる。
思わず胃の中が
唸りを上げて
食道を逆流しだす。
ケンタは慌てて
k e i から少し離れて、
思い切り吐き出した。
何度この状況を
経験しても、

慣れる事は
決してないだろうと、
ケンタは
苦しみの中で思う。
自分の使命に対する
責任の代償を
体験する度に、
使命の大きさを、
ひしひしと感じる。
もう警察も
到着する頃だろう。
ひとまず
落ち着いてから、
k e iと二人で
駅まで行った。
道すがら、
俺はk e iに尋ねた。
「俺らが
助けてるのつて、
いつも数人だよな……」
「はい」k e iが答える
「そんな単位じゃ
生まれる数と死ぬ数の
比例もへったくれも
ないんじゃないの？」
「そんな事ないです」
「わかんねーな」
納得出来ずに
ケンタは考え込む。
だって私達だけじゃ

ないですから、

こういう事してるの」

「え…?」

あまりにも意外性のあるk e iの答えに、俺はきちんと言葉をキヤツチする事が出来なかった。

なんだ沢山いるのか。

二人で地球の平和、

未来の平和って

気張っていたのが

恥ずかしくなった。

そんな事を考えていた

俺の表情を見て、

k e iが言う。

「でもこの世界では、

私達だけです。」

この世界…。

なんだかまた面倒臭い

ニュアンスを

投げつけてくる。

前を向き、

k e iは続ける。

「今生きてる地球では

二人だけですよ。

だからちゃんと

意味があります。」

そうか…他にも

いるならば、

自分達のやってる事は
その中の一部ならば、
今の人数でも
なんとなく
納得出来るか…。
まあ何人助けた
とかいう人数の問題
ではない事も
勿論分かっている。
やはり最後には
必然という言葉で
納得するしか
ないのだろうけど…。
あつ、そういえば
最後に死神と会ったな。
俺の叫びが楽しみ
だとか言っていた。
どういう意味だ…。
考えながらケンタは
死神と接触した
右腕の袖をめくると、
黒っぽいアザのような
シミが出来ていた。
ちようど大人の
手形みたいに、
汚れた手で
腕を掴まれた
感じに見えた。
そんなケンタの行動を
横で見ていたk e iが

P B R

そのアザに気付く。

ケンタは

keiを見て言う。

「意識が戻る少し前に
死神に会った。」

それを聞きkeiの
表情が険しくなる。

前を向き、眉間に

しわを寄せて考えて

から、keiは言う。

「……まずいですね。

まいったな……。」

keiが珍しく

考え込んでいる。

「どうまずいんだ。」

たまらず俺は

keiに聞く。

「そのアザは発信機

みたいなもので、

ケンタさんが

どこにいるか

分かるように、

少しでも恐怖を

感じた時に、

いつでも来れるよう、

ケンタさんの魂を

取りたがっている。」

俺は思わず

唾を飲み込む。

要するに死神に取り

憑かれているわけだ。

……これ以上

最悪な事はない。

keiが続ける。

「生きてるといふ事は

死と隣り合わせで…。

それは危険と

隣り合わせという

事です。

例えば道を歩いてて

転んでしまい、

運悪く角に頭を

ぶつけてしまった。

さらに運悪く

死亡してしまった。

道を歩いて転ぶなんて

誰でもありますよね。

転ぶまでの過程も

全て必然の

積み重ねです。

例えばその日は寝不足

とか他の事に

気をとられてとか…」

ケンタが話に

割って入る。

「それって必然か？

寝不足は仕事とかで

やむなく生じた

事かもしれないし、

他人の悩みを

考えてあげてたの
かもよ。」

返す刀 k e i が答える。

「仕事や勉強が遅くて
寝不足になって

しまったら

いつものコンディション P B R

と違うから、

気を配って

歩けばいいし、

気を配りながら

他の事を考えられない

なら歩きながら

考えなければ

いいんです。」

すぐにケンタも

反応する。

「転ばない事を

そんなに強く

考えないぜ。」

「ですね、転ぶ行為は

だいたいそんなに

重要ではないんです。

そう認識してる人も

含めて全てが必然。

極端な話転んでも

仕方ないと思っ

てるんです。

それよりも他の事が

優先順位として高い。

そりゃ転ばないで
いれば一番
いいんですよ、
でも滅多にそれは
起きないから
確率的に少ない事を
あまり日常で
考えない。」
だから必然か…。
と考えていたケンタを
気にせずに
k e iは続ける。
「ここまでは
いいとして、
転んだ後の話が
この話の本題です。
転ぶ動作とその後の
対応も必然の
枝分かれなんです、
それは置いておいて。
転んでなんとか
態勢を立て直そうと
したり、反射して
体が動いたりします。
でももう自分の力じゃ
どうにもならない時、
ここでは運悪くと
使っています、
その状況に
死神登場です。

普段であれば
ただの転倒ですが、
他の要素が加味されて
大怪我に
なってしまう…。
大怪我で済めば
いいですけど。
そこからまた
生死の状況になると
再び死神登場。
自分ではどうにも
出来ない状態で、
四次元以上の空間が
目を開ける。」
「よくわかんないけど
意識の中で聞いた声も
確かそんな事
言ってたな…。」
「全ての声の主…。」
keiが言い直した。
ケンタは考えて
すぐに問い直す。
「その状況はなおさら
必然外の出来事だろ。
自分じゃ何も
出来ねんだから。」
「ケンタさんの
状況で置き換えれば
死神はケンタさんに
邪魔されたから、

ケンタさんを見つけて
狙ってくる

わけですよね…。」

…なるほど、必然…。」

ケンタはその部分は
素直に納得出来た。

keiが話を続ける。

「だから厄介です。

死神の妨害もある程度

予測しながらの

動きになります。

それで命を落としたら

元もこもない

ですから。」

変なものの背負い込ん

じまったな…。ただでさえ

パンパンなのに。

いやしかし…

自分でまいた種だ。

自分の詰めが甘かった

からこうなった。

意識にだけは

入れとかないと…。」

「魂持ってかれない

程度に頑張るよ。」

ある程度開き直った

言い方でケンタは言う。

「そうですね、

このくらいのリスクは

しよってきましよう。

P B R

このまま黙って見てる

わけにもいかない

でしょうから、

なんとかしたいです」

ケンタは少し考えて

もう一つの可能性を

keiにぶつける。

「俺を操って誰かを

殺す事もあるんじゃないのかな…。」

「……いえ、

それはありません。

大丈夫ですよ。」

前を見ながら

keiは答えた。

内容を聞くまでは

納得出来ないと思い、

ケンタはまた聞く。

「なぜそう言い切れる」

不安そうなケンタの顔に

視線を戻してから、

keiはすぐに答える。

「私がいるからです」

心強い言葉だ。

しかし女性に

守られている俺の

立場とは一体

何なのだろう…。

keiは俺よりも絶対に

年下だと思う。

それでもこの子に
かなわないのも
事実だ。

駅に着いてから
k e iと別れた。

別れ際にk e iは、

とらわれすぎるなど

一言残して見送った。

俺は電車の中で一人、

気付くと震えていた。

先程の状況が

フラッシュバックして

襲ってくる。

普通の人よりも記憶が

鮮明に残りやすい

という特徴が、今ほど

イヤになる事はない。

犯人の持つ凶器が、

人間の皮膚や肉を

簡単に切り裂く様子が

頭から離れない。

切っ先が柔らかい

皮膚に当たり、

食い込んで裂ける。

裂けた皮膚から

血液が勢い良く

裂け目から溢れ出す。

切られた方の

苦しむ表情、

犯人の返り血を

浴びた表情：
全ての状況が
おぞましく
精神を引き裂く。
k e i は一体何を
思うのだろうか。
彼女は人間なのかと
バカげた事を
考えてしまう程、
落ち着いている。
他の事で気を
まぎらわせたかった
ケンタは、
電車の中を見渡して、
乗客を見ながら考える。
スーツ姿の男性、
子供連れ、
制服の男女、老人、
そして自分…。
何気ない偶然の乗り
合わせという概念は、
人間の中で
あるものなのか…。
普通に家を出て、
普通に会社や学校や
町に出かける。
平穏な毎日。
ここでまさか
こんな事が起きる
はずがないという

P B R

状況であればあるほど
事件が起きた時の
シヨックは大きい。
ましてやそれが
子供ならなおさらだ。
こんな俺だつて、
震えが止まらない。
常に恐怖を意識して
生きる事は
出来ないし、
そんな生き方
したくない。
こんな恐ろしい
体験をしていると、
何かに囚われず、
何かにすがらずに、
あるいは何かを
信じずに生きる事は
ますます困難だと
ケンタは思った。
だからk e iの言う、
必然というものを、
改めて信じて
みようという
気持ちにもなった。
俺にとって
k e iという存在は
計らずも大きなもの
なりつつある。
しかし無意識のうちに

依存しないように
しよう。

気負わず、すがらず、
きちんとした

距離を意識しよう。

やはり彼女も

一人の人間だ。

人が目の前で死ぬ

というこの苦しみを、

keiと一緒に

分け合っている。

二人だからこそ

耐えられる、

越えられるもの

なのかもしれない。

勿論自分には親もいて

友と呼べる者もいる。

そう思う度、

一人じゃないんだと

強く感じる事が出来る。

そして…自分の後ろ

にも見えない誰かが

側にいたり

いなかったり

するようだ。

とにかく今は

体を休めたい。

普通でいる事が

どれ程幸せだろうと

考えてしまう自分に

P
B
R

気付く。

やはり人間は、

その状況の中にいる時は見えないのかと
ケンタはふと思う。

そうなるよ、

普段からいかに
客観的に物事を
見ていないかを
痛感する。

その力が強ければ、
失う前に

気付けるからだ。

普通は失うという
苦い経験を重ねて
客観性等が養われて
ゆくのかもしれない。

ア・プリアリ 先天的

P
B
R

自分はこの客観性に
こそこの能力を
持っていたかった…。

しかしその思いさえも
客観性に欠ける事に
気付いて、ケンタは
ため息を吐く。

keiはどこまで先を
見据えて

いるのだろうか。

もっと意識だけkeiに
追いついて

いかないもの
だろうか？

《ケンタさんが
私を呼んだんですよ》

彼女が前に俺に

言った言葉だ。

その必然性を

見つけるのには

まだ時間が

必要なようだ。

2007 . 6 . 30 11 : 43

ヤオパチ勤務

昼休憩中のケンタは、

近くの定食屋

、我隣舎、

(がりんしゃ)で

生姜焼定食の愛情盛り
をかつくらっていた。

ここの生姜焼は

なにしろ美味い。

我隣舎特製ソースが

たっぷりかかった、

柔らかく脂の乗った

おいし〜い豚肉。

隣には濃厚な

胡麻ダレに良く合う、

細かくきざんだ

キャベツとプチトマト

そしてポテサラと

豪華なラインナップ。

飽きの来ない

絶妙な種類と量が

一枚のアズーリ色の

お皿に収まる奇跡。

これを必然とは

呼ばせないぞと
思いながら、
いつものケンタなら
至福の時間を
味わっている。
ちなみに愛情盛りは
大盛りより少し多い、
常連客のみが使える
無料のプレミアム
サービスだ。
口頭で言えば、
マスターはいつでも
それをやってくれる。
ケンタは入口にある
スポーツ新聞を取る。
一面は
幼稚園殺傷事件。
、包丁男
4人殺し自首、
2日たった今でも
特集取材を作る
最重要事件だ。
我隣舎にあるテレビの
ニュース番組でも、
その報道は一齐に
第一優先で流される。k e iの言ったように、
犯人の男は自首した。
マスコミは、
犯人の男について
特集を組む。

幼い頃死別した父親。

母親は蒸発し、

祖母との少年時代。

近所に住む住人から

見た普段の犯人の生活。

それらを見た司会者や

コメンテーターが

意見する。

専門家も

巻き込んだの議論は、

結局、犯人の心の闇、

という代名詞で片付け、

それぞれの

価値観を言い合う。

それを目にする度、

あの時の状況を

何度も思い出す。

あれから飯も

沢山食べられない。

せめておいしいものが

目の前に出れば、

少しは食欲も

戻るのではと思い、

我隣舎に来た。

相変わらず

食欲はあまり無いが、

少しは

食べられそうだ。

左腕のアザは、

まだ消えてない。

P
B
R

P
B
R

あれから

意識はしてるけど、これといった問題もなく、平凡な日々に感謝を覚えるほどだ。あれこれ考えながら、ケンタは我隣舎特製生姜焼を口に頬張る。アツアツトロトロの肉汁が口の中で踊り出す。う、うまい。

その瞬間だけ全ての事から解放される事を知ると、食欲が弾み、遂には生姜焼定食愛情盛りをペロツとたいらげてしまった。もう何も残ってないお皿を見ながら、

ケンタは食欲が戻った安堵感に浸っていた。しかしもう一方で、食べるという行為に依存し始めてるのではないかと不安がよぎる。その直後、ケンタは

P
B
R

高校時代の同級生、栗山を思い出していた。高校時はスマートで、

P
B
R

バスケット部では
シューター。

勉強も出来て、
女の子にも

ちやほやされていた。

卒業して10年くらい
経ってから、

栗山にばったり

駅で会った時、

ケンタはその男が

誰だか分からなかった。

もの凄く

太っていたからだ。

もう今にも

はち切れんばかりに

パンパンだった。

話を聞くと、仕事の

ストレスで過食症に

なってしまったそうだ。

P
B
R

仕事の張りつめた

時間での小休止が

食事と睡眠の

時間だけだった。

朝から夜遅くまで

馬車馬のように働く。

だから睡眠時間も

ろくに取れない。

給料はいいが

休める時間を

見つけられない。

しかし唯一誰にも
咎められない時間が
食事の時間だった。

栗山は次第に
食事の回数を

増やしていった。

それは邪魔が入らず、
心が解放される場所。

何も考えずにいられる

自分が自分で

いられる場所。

その時間を増やす事で

キツイ仕事も

耐えられた。

その代償は体重に

反映されてゆき、

昔の面影は

もうなかった。

そんな栗山を思い出し、

自分のした行為が、

ぶくぶく太ってゆく

初期症状でない

事だけを願いながら、

我隣舎を出る。

keiからはあれから

数回連絡をもらった。

死神の件で心配して

かけてきている。

お店に戻るまでの

道にも、いつもより

P
B
R

意識を働かせて帰る。
全く窮屈な生き方だと
思いながらも、

“ 今だけ、少しの辛抱”

P B R

と自分に言い聞かせ、
神経を研ぐ。

後ろから大型

トラックが来るのが、

エンジン音で分かる。

近くには、ちよつと

体を入れて身を隠す

場所など見当たらない。

P B R

20 mくらい先にケーキ

屋さんが開いている。

いやいや、まさか何も

ないだろうと考えて、

エンジン音が

近づくにつれて、

体は自然にケーキ屋

まで走っていた。

トラックが近づく。

ケンタはとにかく

目標まで走った。

ケーキ屋まで

10 m…6 m、3 m…。

耳で確認する限り、

トラックはかなり

近い距離だ。

ケンタは勢い良く

店の中に飛び込む。

中にいた数人の
客と従業員が、
何が起こったのかと
びっくりして、
一斉にケンタがいる
入口を見る。
後ろの道路を
トラックが横切る。
ケンタは膝を抱え、
一安心したのも
つかの間、
いろんな角度からの
視線の対処に困った。
とりあえず一つ一つに
視線を返して、
ただの買い物客だと
中の皆に促す。
急に走つたため、
ケンタの息は荒かった。
よっぼど
ここのケーキを
食べたかったのだろう
と言わんばかりに、
ハアハア言いながら
品物を選び出す。
必死であればあるほど
自分が滑稽に見える。
心の中で
ため息を吐きながら、
なんだか先が

P B R

思いやられるなど、
ケンタは思った…。

店に戻ると、

こうじがそそくさと
作業をしていた。

俺が店の前に立っても
気が付かずに、
品出しや直しに
集中している。

スピードは
申し分ないが、
一つの事に

没頭してしまう。

「おう、お土産
買ってきたぜ。」

ケーキが入った箱を
こうじに見せながら、
ケンタは言う。

「あ、お帰りなさい
ケンタさん、
すいません

気付かなくて。」

「それよかこうじ、
その棚、トマト…」

こうじは、トマトの
値札が書いてある棚に
これでもかと玉ねぎを
山積みしていた。

二人はそのまま数秒、

山積み玉ねぎを

見つめて呆然とする。

「3分で入れ直し。

大事にやれよ。」

「はいっす！」

俺の指示に

光速カウンターで

答える。

返事はいいけど、

どこかアホなんだな。

もう少し鍛え

直さないとだめかな。

すると向こうから

車の老練なエンジン音

が聞こえてくる。

聞いただけで家の

軽トラだとわかった。

親父だ。

“プップー”

店の前でクラクション

を鳴らして

二人に注意を引く。

「よおこっじ、少しは

仕事覚えたか。」

「はい、やってやり

ますよ社長。」

最近の親父は

ほとんど店にいない。

こっじが入ったのを

いい事に、ご近所を

まわるサボリ癖が
付き始めた。

「たまにはこうじも
見てやれよ。」

「バカヤロお前
配達をなめんじゃ

ねえよ。お客さまと
会話するのも立派な
お仕事だぞお。」

「どーせ吉野さん家で
将棋だろう。」

「それも立派な営業だ、
んじゃ行つて来るぞ」

「あ、ちよつと待て

親父。あのさ、
又八郎つて知ってる」

「又八郎…？」

名前を言つたまま
記憶を探ると、

すぐにケンタに
体を戻して言う。

「俺のじいちゃんだ。
何でお前知つてんだ？

オレ前に言つたか？」

「いや、あの、
母ちゃんから聞いた。

喧嘩とかも

好きだったみたいね」

その話になつてから
親父は顔を和らげて

P
B
R

ケンタに言う。

「そりゃもう強え

なんてもんじゃ

なかつたぞ。

とにかく口より

まず手が出たなうん、

女にも手が

早かつたからなー、

困った爺さんだった」

なんでそんなのが

俺の近くにいたんだ。

それなのになぜ

俺は手ぐせや

女ぐせが悪くない？

タイプって似たりする

んじゃないのかな…。

それともこれから

似てくるのか…？

「…タ、ケンタ！」

「え…。」

気付くと親父が

何度も俺を呼んでいた。

「今月はじいちゃんの

命日だ、おめーも線香

くらいあげて来い。」

「ん、ああ 分かった」

「そいじゃ、あと

店ヨロシクなー。」

ブロロロロロロロ

と年期の入った

P B R

P B R

エンジン音と共に

親父はいなくなつた。

俺の側にいる人は、

俺のひい爺さんだつた。

P B R

一つ謎が解けた。

もう一人のあの男は

一体誰なんだろうか。

今度k e iにでも

聞いてみよう。

ドダダダダッ！

今度は店の中から

派手な音が

聞こえてきた。

見ると、玉ねぎに

埋もれて倒れている

男が一人…。

「…3分で直し。」

「は…はいつす。」

そんなやりとりを

している殺那、

ケンタは一瞬、

何もかもが止まった

ように感じて、

頭の中から

声が聞こえる。

その声はかつて

どこかで聞いた、

見慣れた声だつた。

《人間はいつか死ぬ。

死ぬ事が漠然としか

分からないから、
恐怖や不安の感情も
つきまとうものだ。

何か知らない

新しい事をする事

とは少し違うぞ。

なぜならそれは

この世界から

いなくなるから…。

人間は執着心がある為、

悲しみも混ざってゆく。

P B R
P B R

執着するという事は、

とらわれるという事。

とらわれるという事は

心が儂いからだ

ケンタ…。

しかしその儂い心を

信じられれば、

自分を信じる

事が出来れば、

全ての可能性を

信じる事が

出来るだろう。

それはそう遠くない

未来だ 》

ケンタの頭に

入ってきた心の声は、

そう言い残し消えた。

「全ての声の主…」

ケンタは一人粒やいた。
こちらの返答を

P
B
R

入れる暇も与えず、

言葉は一方的に始まり

一方的に終わった。

内容の理解はともかく

その長い言葉が何度も

ケンタの頭の中に

響いていた。

突然響いた心の声の、

真意を理解しなければ

いけない状況が、

静かに、そして確実に

ケンタに近づいていた。

P
B
R

それは決して

避けては通れない道。

言葉では言い表せない

その必然性は、

一度きりではない事を、

P
B
R

ケンタはまだ

知る由もなかった。

ケンタは

何も無い地平線に

一人佇んでいた…。

「ケンタさん…」

振り向くと、

こうじがこちらを見て
立っている。

そんなこうじの

姿を見た俺は、

唐突に言った。

「こうじ、お前、

何やってんだ…」

こうじはケンタを見て

何かを言っていた。

「ケ…んは、

る…いで…」

ケンタはそれを

聞き取れない。

更にこうじは続ける。

「げ……して

…だ…い」

途切れ途切れで

全然分らない。

「何言ってるの？」

ケンタは聞くと、

こうじは笑う。

なぜ、こうじは笑う。

考えていると、
そこで目が覚める。
時計は、3:54を指す。

SESSION:17

ヤオパチの店の前は、
とても強い日が
射していた。

親父は相変わらず
外回りで忙しい。

そして、こうじは
今日も無駄に元気だ。

もうすぐ給料日。

ヤオパチは20日締め
の月末払いの現金払い。
元気モリモリな

こうじに聞いてみよう。

PBR

「こうじは給料出たら
なんか買うの？」

待ってましたと

言わんばかりに

ニヤニヤ顔を

俺に向ける。

「今年のフェスは
凄いですよ。」

「マジで...。」

「ヤッバいですよ。」

こうじは大の
ライブ好き。

もう既に生活の

一部と化してる。

稼いだお金も

ほとんどライブ代に

消えるんだろうな

きつと…。

夏フェスか…。

俺もどっかのフェス

行こっかなー。

k e iはどんな音楽

聞くのかな。

昨日はk e iから電話

掛って来なかつたな

そういえば…。

あれから大した

変化はないが…。

意外とそう簡単に

死神も危害を

加えられないのかな。

ただ自分もかなり

意識して生活してた

からなここ数日は…。

それも影響してるの

かもしれない。

今後もぬかりなく

意識してゆこう。

出来るだけ…。

21:36。

その日は特に

変わりなく、

用事もなかったので、
ケンタは早めに
家路に着いた。
着いてからケンタは、
なぜかとても眠くなり、
夜もまだ早い時間に
眠ってしまった…。

P B R

どのくらい時間が
経っただろう。
ケンタは突然パツと
目を覚ました。
テレビや照明が
付いたままの
状態に気付き、
重い瞼に抵抗しながら
リモコンで電源を消す。
そしてまたすぐに、
目を閉じる。
時計は、3：50を
指していた。

P B R

……、
……、
ケンタは何もない
地平線に
一人佇んでいた。
あれ、これどつかで
見たぞ。確か…昨日の
夢だったけな。

振り向くと、

こうじがいる。

ほらやっぱそうだ。

しかしこうじは

うつむいていて、

顔の部分は

影で見えない。

「こうじ、お前こんな

とこで何やってるの？」

P
B
R

こうじは答えない。

すると、遠くから

声がした。

「ケンタ。」

見覚えのある声。

ケンタはそれがすぐに

自分の親父の声だと

分かった。

振り向いて、

声のした方を見ると、

こちらに背を向けて

親父が立っていた。

少しばかり

状況を見守り、

ケンタは言う。

「親父ー、

何してんだー!？」

ケンタの父親は

横顔を見せたまま

動かない。

近くに誰がいる。

∴ k e iだ。

「おい、

みんな何してんだー。」

P B R

ケンタは

大きな声で聞くが、

k e iは何も喋らず、

ケンタの父親の側から

こちらを見ていた。

全くなんだ

この空間はと思い、

段々腹が立ってきた。

もう一度こうじを

見ると、こうじは

ゆっくりと顔をあげた。

P B R

顔を確認した途端、

ケンタはハツとして

目を覚ました。

重い体をくねらせて、

枕元に置いてある

目覚まし時計を見る。

3：54。

外はまだ薄暗く、

町を静かに包んでいる。

P B R

腕時計も付けたまま

だった事に気付き、

また目を閉じて、

そのまま朝まで

眠ってしまった。

翌日 ヤオパチにて

P B R

相変わらず

気温・湿度共に

上昇中の夏日和の中、

ケンタとこうじが

品出しをしていた。

ケンタはせわしなく

作業をしながら、

こうじに言う。

「お前昨日俺の夢に

出てきたよ。」

「え、ホントすか？」

「うそ。」

「は…。」

「いや、正確に言うと

お前のようなヤツが

出てきた。

姿形は

こうじなただけど…、

顔は…：俺だった。」

「なんすかそれ、

気持ち悪いや。」

「親父もk e iも、

うんともすんとも

言わねーんだよな。」

「え…？」

「あ、ひとりごと。」

ケンタの携帯が鳴る。

品出しの

リンゴの入った

段ボールを床に置き、

ジーンスの
後ろポケットから
取り出した
携帯を確認する。
k e iと表示された
ウィンドウを
暫く見て、
通話ボタンを押す。
「どうも…、
俺の方なら大丈夫。
食欲も出てきたし。」
「良かったです。
それじゃあ夜7時に
駅前の例の二階の
喫茶店に来
てください。」
「それって、
夜から動くって事？」
「ですね。」
「勘弁してくれよ、
こっちは朝から
仕事だぜ…。」
「少し体休めておいて
下さいね、では後で」
勝手に掛ってきて、
勝手に切られた。
相変わらずの
この感情は、
k e iという存在に
よって生み出された

必然。

この関係は

ずっとずっと

続くのだろうか…。

計り知れない未来への

不安を覚えながら、

ケンタはリンゴを

柵に積み始める。

太陽は高く、

雲はゆっくと

風に身を任せて、

青い空を流れてゆく。

ナイフの男

男は鏡の前で

自分自身を睨んでいる。

目は鋭く細い。

体をかばうものは

何一つ着けていない、

生まれたままの状態。

鍛えられた

ボデイライン、

女性のような白い肌には

若さがある。

濡れた髪の毛を

全て後ろへ持って行き

ニヤリと笑う。

男は、鏡台に

そっと置いてある

ナイフを取って、

P
B
R

じっくりと見つめる。
刃先の部分が異常に
幅広になっている、
まるで斧の様なナイフ。
切っ先で

PBR

指をひつかいて、
切り口から血が
ポタポタと流れ出す。
手から落ちてゆく血を
ナイフで受け止める。
テーブルの上に
置いてある携帯が
ぶるぶる震えて、
着信を知らせる。
男は気にせずに、
丁寧にナイフを
動かして、血を
染み込ませる。
やがて携帯は留守電に
切り替わる。
それが3回くらい
続いて、4回目の
着信音が鳴った頃には
ナイフには十分に
血が行き渡った。
ナイフを慎重に
置いてから、
携帯を取る。
「何やってんだ、
すぐに出ろよ!」

携帯から聞こえる
怒声は、男の耳を
つんざいた。
「いや、手が離せ
なかつた…。」
言いながら男は、
赤い血を帯びた
ナイフに
顔を近づける。
刃の部分に
目の位置を合わせ、
瞳を寄せる。
瞼を大きく開けた眼は
じわじわと刃に
近づいてゆく。
もう眼球が
触れるかという所で、
ぐっと目を閉じる。
閉じた時、まつ毛が
刃にぶつかり、
シュツという
音が聞こえた。
興奮が止まらない男に
もはや受話器越しの
声など届いて
いなかった。

携帯の男

ケンタの駅から
三つ登った所、下野。

乗降客数4万人以上。

沢山の電車が

通っていて、

駅ビルやデパート、

大型電機店等が

立ち並ぶ大きな都市。

歓楽街は一際明るく、

来た人を誘う。

そんな賑やかな

通りの裏路地にある

漫画喫茶に、

その男はいた。

No.16の個室。

器用にキーボードを

叩きながら、

画面から目を離さない。

白髪交じりの毛が

キャップ帽に収まらず、

汚ならしく

はみ出ている。

男の眼鏡に

パソコンの画面が

反射して、一層男を

不気味に見せる。

またカタカタと

手際良くキーボードを

叩き始める。

横に置いてある

紙コップの

メロンソーダを

P
B
R

P
B
R

ゴクゴクと

一気に飲み干し、

氷を噛み砕きながら

暫く画面を見つめ、

席を立つ。

無料自販機に

向かう途中、

店の壁に掛けてある

時計を見る。

14:26。

思い出したように

自販機の前に立ち、

メロンソーダを

押してから、

飲み物が注ぎ終るまで

また時計を見る。

秒針が12時を過ぎて、

分針が一メモリ動いた。

じっとその様子を

見てから、

取り出し口から

メロンソーダを掴む。

そのまま携帯ブース

へと移動する。

一人用のブースは

無人だった。

ドアを閉めて、

履歴の番号を探し、

発信ボタンを押す。

メロディが流れるが、

P B R

相手は出ない。

暫くかけて電話を切る。

PBR

すぐにリダイヤルで

かけ直す。…出ない。

入口に若い

女の子が来た。

ブースを使いたい

ようだった。

男はそれに気付き、

電話を切るが、

すぐにまた

リダイヤルした。

暫くかけるが出ない。

男は貧乏ゆすりを

始める。

一度切って

またしつこくかける。

貧乏ゆすりが

スピードを上げる。

呼び出し音が

鳴り続ける。

5回、6回…プッ。

受話器を取った

音が聞こえたのを

確認すると、

間髪入れずに

男は言う。

「何やってんだ、

すぐに出るよ！」

「いや、手が

離せなかつた…。」
力ない声が
受話器から聞こえる。
「…たく頼むぞ…、
いいか、
今日だからな、
時間は22時。
今日…殺るぞ。」

夢の続きを見る男
ケンタは一人、
広い地平線に
佇んでいた。
すると左側から
声がかかる。
髪をツンと
垂直に立たせ、
重苦しい雰囲気
の服装に台座…。
おれ…、と思つた後で
ケンタは言い改めた。
「全ての声の主…」
ずっと自分を見てる、
もう一人の自分が
口を開く。
「死が怖いか…？」
ケンタは思う。
（…わからん）
「死を…受け入れる、
ケンタ。」

(俺は死ぬのか…?)

「受け止められなくても
受け止めるのだ。」

PBR

全ては、そこからだ」

ジリリリリリリ

突然どこからともなく
音が鳴る。

ぱっと目を開くと、

枕元の目覚まし時計が
勢い良く鳴っていた。

18:00。

今見ていたという

記憶はあるのに、

不思議と夢の内容は

覚えていなかった。

気分はあまり優れない。

PBR

上体をゆっくり

起こして窓を見る。

薄暗いオレンジ色の

日が、畳に

染みこんでいる。

まだ外は暗くない。

のそのそと台所まで

歩いてゆき、

コップに水を注ぐ。

一気に水を口の中に

入れると、喉から

食道を通ってゆく

感覚が分かる。

ふうっと息を吐いて、

ぼーっと立っていた。

静かに

気持ちを整える。

ゆっくり、静かに。

ケンタは深呼吸をして

更に心を落ち着かせる。

暫くすると

P
B
R

携帯が鳴った。

2回鳴った所で、

ケンタの表情が

穏やかになった。

心の準備が出来た事を

自分で知り、

目覚まし時計の

横にある携帯を

取りに行く。

手に取った携帯の

表示パネルを見る…。

kei…。

運命を知る女性

目が覚めると

泣いていた。

彼女の目覚め方は、

決まって

いつもそうだった。

ワンルームの

マンションは綺麗に

掃除されていて、

部屋を邪魔する物は

ほとんどなかった。
皮膚を伝った涙は、
乾いて痕が出来ている。
P
B
R

まだ瞳は濡れながら、
天井を見つめている。
見つめたまま

動かないでいる。

彼女の運命は、

もう決まっていた。

どうあがいても、

逃げる事が出来ない

事を、彼女自身が

一番知っていた。

しかし彼女の

涙の真意は、

自分の運命に対して

ではなかった。

いつも夢の中で、

頭の中にイメージが

飛び込む。

それは人が死ぬ事。

人が人を殺す事。

人が人に殺される事。

痛みと叫び。

絶望と悦楽。

あらゆる感情が

交じり合い、

彼女の脳に

突き刺さる。

普通の脳ならば、

耐える事が出来ない
痛み。

やがてそれは
傷害になり、
ますます脳を
傷めつける。

ある者は人体が
耐えられず、
体に支障をきたす。
ある者は脳が動きを
止めてしまう。

彼女が耐えられるのは
痛みを別の場所へ
飛ばしているため、
かろうじて
普通の状態で
いる事が出来る。

その場所は
ここに存在し、
ここに存在しない。
彼女が辿り着く、
運命の場所。

すつと体を起こし、
洗面台で
涙を落としてから、
彼女の一日が始まる。
顔を洗い、
濡れたまま鏡を見る。
顔に付いてる
水滴の状態を眺める。

まだ落ちないもの、
いよいよ落ちるもの、
落ち始めているもの、
皮膚から
こぼれ落ちるもの…。
彼女はその一つ一つの
動きを追いかけ、
無意識に数字や式に
置き換える妙な
クセがあつた。
頭の中では
沢山の数字が重なる。
十分程それ続けて
脳をならす。
暫く鏡と
にらめっこしてから
部屋に戻る。
綺麗にたたまれた
洋服を一つずつ
丁寧に着てゆく。
着終わってから
目をつむり、
何かを呟く。
そしてポケットから
携帯を取り出し、
一つしかない
発信履歴を押す。
5回目の発信音が鳴り
相手が出る。
「ケンタさん、準備は

いいですか…。」

運命を知る別の女性

PBR

目が覚めると

泣いていた。

彼女の目覚め方は

決まっていたも

そうだった。

部屋は散らかっていて

乱雑に脱がれた

洋服やゴミが、

床に転がっていた。

緩いパーマのかかった

長く茶色い髪の毛は

ひどく乱れて、

その頭を

掻きむしりながら、

重い体を起こして

洗面台に向かう。

顔を洗い、きちんと

水分を拭き取ってから

鏡を見る。

髪の毛に付いた水が、

毛先から

こぼれ落ちる。

落ちる大きさ、

量、速さ、軌道、

床に落ちるまでの

距離と時間。

解答までの展開式が

瞬間で彼女の

頭に浮かぶ。

目は虚ろで、数式を

ぶつぶつ呟いている。

やがて頭に痛みが走り

すぐに現実に戻される。

P
B
R

「痛っ……！」

鏡を見ずに、

下を向いたまま

静かにため息をつく。

彼女は自分の運命を

知っていた。

深く辛い運命を。

しかし、運命という

本当の意味を、

彼女はまだ知らない。

これから大きく変わる

自分の運命までは、

今の彼女には

知る術がなかった。

5つの時間が

重なり合うとき、

一人の女性の運命が

大きく変わり始める。

そしてk e iは、

運命の必然を悟る。

19:00。

二階にある喫茶店に

ケンタとkeiはいた。

駅の側にある

紺色のビルの二階に、

待ち合わせの喫茶店が

ある。ケンタは階段を

素早く上がり、

ドアを開けると

もう既にkeiがいた。

右側窓際の奥から

2番目の席にケンタも

座る。

keiが気付いて、

軽く頭を下げてから

優しい目を向ける。

ケンタもそれに

相づちをうち、

革張りの椅子に座ると

店員がやって来た。

「いらっしやいませ」

言いながら

お水とおしぼりを

ケンタの前に置く。

店員に目をやり、

アイステイーを頼む。

暫く店員を見送り、

keiに視線を戻す。

「…最近変な夢ばかり見るんだ。

keiやこうじや親父が

出てきて…」

keiがケンタを

見つめる。

「夢ですか…、

どんな内容です？

私は何をしてますか」

テーブルを見つめて、

ケンタは夢を思い出す。

「そこは遮るものが何も無くて、静かで…。

遠くにオレの親父と

keiがいて、二人は

一緒にいるんだ。

親父はオレの名前を

言うんだけど、

オレが何か言っても

答えない。

keiも同じ、ただ親父

の側でこつちを

見てるだけ。

そして俺の目の前には

こうじがいて…」

「…アルバイトの

方ですよね。」

keiが確認する。

「ああ、でもこうじかと

思ったらそれは

オレだった。

なんだかよく分からない

夢だったけど、

最近よく見るんだ。」

「その夢を見てケンタ

さんは、どのように

感じてるんですか。」

「なんだか気持ち

悪いな…うまく表現

出来ないけど、なぜか

引っかかっている。

何でオレはその夢を

何度も見るんだ。

何で覚えてるんだ…。

そして今日も

夢を見て…、だけど

その夢は、全然、

覚えてないんだ。

思い出さなきゃ

いけないような、

でも思い出したくない

感じで…。」

テーブルに置いた視線を

keiに戻し、

両手でテーブルを掴みながらケンタは続ける。

「今回起こる事件に、オレの周りが関係してくるのか？」

店員がケンタ達のテーブルに近づいて来るのを知り、ケンタは両手を膝の上に落とす。

「お待たせ致しました」

店員はアイスティー、ガムシロップ、レモンを順番に置いて行く。

ごゆっくりどうぞと軽くお辞儀をした店員をまた見送り、k e i が切り出す。

「今回の件で、ケンタさんの周りの人が直接関係していたり、巻き込まれたりするような事はありません。」

あとはケンタさんがイメージ通りに

動いてくれれば、
何も問題はないです」
それを聞いてケンタは
一つ息を吐き、落ち着きを取り戻してゆく。
「ただしケンタさんには

承知の通り、死神が
見張っています。

危険な状況下であれば
それを見逃しません。
それだけ意識して

臨みましょう。」
「本当に面倒くせー
事になってるな。

厄介だ全く……」
「ケンタさん、
あらゆる事象に対して
確率0%は存在しません。

確率100%も、です。
万が一今回の死の確率が

何%であつても、
そこに死神の要素が
加味しても、その穴は
私が埋めます。

ケンタさんは限りなく
100%に近い状態で死に
ません。断言します」
暫く見つめ合った後、

ケンタが言う。

「…分かった。」

その言葉を信じる。」

少し考えてから、

ケンタは続ける。

「そうだな、きっと

それで万が一オレが

不幸な結果になったと

しても…」

keiはゆつくりと

首を振った。

「仮にだよ、

あくまでも仮に。

オレが言いたいのは

色々な事を考えて

出来た結果、それは

どういう結果であろう

とも、必然で事だろ」

落ち着きが見えたケンタ

の表情を確認してから、

両手を広げて言う。

「じゃあ始めましょう」

ケンタは少し深呼吸を

して、keiの腕を

優しく掴む。ゆつくりと

目を閉じると、暗闇の

中心から静かに
イメージが映し
出される。
天井から落ちた時計。
駅員。改札…。
ホームの中が
ざわついている。
あちこちに人が固まり…
悲鳴が聞こえる。
悲鳴の先から人がまた
一斉に人が散らばる。
人混みを撒き散らし、
二人の男がまるで台風の
目の様に走り去り、
改札を強引に
飛び出してゆく。
飛び出した
二人の内の一人が、
追って来た人間達を
くい止めるため、煙幕を次々に
放り投げた。
そして、追っ手を上手
く煙に撒いた二人は、
住宅街の暗がりに
消えてゆく。
映像がホームの中へと
切り替わる。
天井からの視点。
ホーム内、
倒れているのは9人、

その他に腕や顔等から
血が流れていたり、
うずくまっている人が
8人くらいいる…。
人が多くてどこまでが
怪我をしているのか
よく分からない。
次に電車の中へと
映像が移動してゆく。
3人が怪我をして、
その周りに人が
集まっている。
傷口にハンカチ等を
当てて看護している人。

携帯で話している人。
駅員を呼んでいる人。
誰かにしがついて
震えている人。
泣き叫んでいる人。
呆然としてる人。
とにかくホームは
騒然としている。
天井にかかった時計は
22時43分を指す。
駅名は下野。
毎日沢山の人が
駅を行き交う。
この時間でもまだまだ
客足は減らない。

倒れている人が
乗っている電車は、
同時刻37分
下野着渋谷行き。
警官が来た。

無線で話しながら改札
に走り込む。

映像が静かに消えると、

ケンタは目を開けた。

「JR下野駅ホーム内
9人、電車内3人、
合わせて12人死亡予定。

事件は22時37分から
42分までの6分間で
起こります。

犯行は二人の男性が
行います。」

「6分で12人で、
怪我人合わせたら
凄い数だな…。」

爆弾でも使ったのかよ」

「爆弾は威嚇で
使いますが、犯人達は
ナイフによる直接攻撃
でこの状況を作ります。

一人は電車内から、

もう一人は改札から
ハサミウチですね。
次の映像を送ります。
いいですか。」「
ケンタはすつと
目を閉じて、
新しい映像を待つ。

もう一人の女性

彼女は電車に
乗っていた。
行き先は下野。時速
30km/hの風景からは、
いろんな物が見える。
彼女はその動きを目で
追うのが嫌だったので
ぼーっと車内の広告を
見ていた。

新発売のビール、
ローン・クレジット・
債務整理のご相談無料
とうたつてある各法律
事務所、女性雑誌等々。

それらを一通り、
頭で考えずサツと
目を通した。
それから景色を見ずに
少しうつむいたまま
目を閉じる。

ぼーっと

した時間が暫く続くと、

やがて真つ暗な視界の

中心に裂け目が出来、

映像が写し出される。

彼女は一人、線路沿いの住宅街を歩いている。

辺りは静かで、電灯に

体をぶつける虫の音が

よく聞こえる。後ろ

から電車の音が近づく。

見上げると、空はもう

真つ暗だ。

正確には、

限りなく黒に近い

紺色が、空一面を

覆いつくしている。

電車が通り過ぎたのを

確認して、

視界は前を向く。

電車が行った方向を、

ひたひたと歩き始める。

少し歩くと左側に公園

があり、中には白い

時計柱が建っていた。

35分。

時間を確認してから
またしばらく歩く。
もうすぐ駅に着く。
駅に近づくと
何だか騒々しい。移動
のスピードが変わる。
どうやら走っている
ようだ。そのまま
変わらないスピードで
駅に近づく。
もうすぐ駅…とその時、

人が目の前に
飛び出してきた。
今のスピードではもう
止まる事は出来ない。
ぶつかる、そう思った
瞬間、飛び出した男が
こちらの存在に
気付いたが、もう
どうする事も出来ず、
そのまま二人は
地面に叩きつけられる。

男がクッションに
なっただため、
衝撃は
少ないようだが、
男は後頭部を直に打ち、

意識をなくしている。

誰かが側を

走り去ってゆく。

振り向くと、そこで

映像が終わる…。

彼女は時々このような

映像を、頭の中で見る

事がある。彼女がまだ

小さな頃、その不思議

な現象は始まった。

ある日彼女は、川で

小さな女の子が溺れる

夢を見る。学校から

帰って来て、みんなで

川沿いで遊んだ帰り道、

小さな子供が川で

溺れていた。

彼女は怖くなって

ハッと目を覚ました。

次の日、学校から

帰ってきた彼女は、

すぐに溺れた子がいた

土手に走って行った。

夢で見たポイントの

場所に着いてから、

辺りを見回した。

しかし彼女以外は

誰もいなかった。

とりあえず彼女は川を

眺めて時間を過ごした。

どのくらい時間が
経つたろう…。

日が沈み始めたので、
彼女はとうとう諦めて
帰る事にした。土手
沿いを歩いていると、
遠くで声が聞こえる。
途切れ途切れだが
助けてと聞こえる。
川の向こうからだ。
暗くて分かりづらいが、

子供の声…

水を叩く音。

溺れているんだと
直感で分かった。
辺りを見回すが
誰もいない。

「誰か、誰か来てー！」

大きな声で何度も
叫んだか、人の気配が
しない。

この場から
離れたくなかったが、
土手の上まで走り出す。

呼吸は荒く、

心臓が
飛び出しそうな程に、
鼓動が体を波打つ。
てっぺんまでもう少し。

急いで登りきり、
息を切らしながら
また助けを呼ぶ。

「誰か助けてー、
溺れてるーっ、人が
溺れてるー!!!」

土手のすぐ裏は
住宅街なので、

人が出てくるのは
時間の問題だったが、とにかく落ち着か
なかった。

しばらく

叫んでいると、

何件かの家の窓から
人が顔を出してきた。

その一番近い家の
窓から、

「どうしたの？」
と彼女に尋ねる。

「人が溺れてる、
死んじゃう、

早く！早く!!!」

その人は慌てて話す
彼女を宥め、すぐに
救急車を呼んでくれた。

それから数人出てきて
事情を知った大人達は、

慌てながら話し合い、
家から縄を持って来て
一人の体に

ぐるぐる巻き出した。
そして川辺まで進み、
強く紐を締めてから
男は川へと飛び込んだ。

長く余った方の紐を
他の住民達がしっかりと
握り締める。

川に飛び込んだ男は、
少しずつ、溺れている
少女との距離を縮める。

しかし少女は遂に
力が無くなり、浮き
上がろうとする抵抗を
止めた。

意識を無くし、
水面からすつと姿を
消すと、近づいた男は
すぐに水中に潜り
少女を追いかける。

二人の姿が消えてから
しばらくの間、彼女は

息が出来なかった。
そしてその行為さえ、
気付いていなかった。
川辺で待つ人達と一緒に、
固唾を飲んだ。
水面を這う
波紋の中心をじっと
見つめていたが、まだ
何も浮かんでこない。
それでもじっと待つ。

彼女は心の中で、
お願いという言葉を
何度も連呼していた。
すると水面からぼこり
と頭が飛び出した。
地上に飛び出した頭は
苦しそうに
声を絞り出す。

「ひもつ、
引っ張れー!!!」
その言葉を聞いて、
止まっていた人達が
動き出す。

紐を大事に握っていた
二人が持てる力を
振り絞る。他の人達も、
紐を取り合い、
力の限り引っ張った。

紐は少しずつではあるが、しっかりと川辺に引き寄せられる。

川から人影が、段々こちらに近づいてくると、男は何かを抱えている。

川辺に近づいて、それが少女だとはつきり分かった。紐を引っ張っていた手前の何人かが

川へと身を乗り出して少女の両腕を取る。ゆっくりと丁寧に少女を抱えて地面に寝かせる。

少女は動かない。周りがざわつく。気が付くと、

さつきより沢山の人が集まっていた。助けた一人が少女に話しかけている。

返事は無い。少女は、動かない。その内の一人のが、不器用に人工呼吸を始める。

ざわつく周りの声と

土手の匂いと
人工呼吸のシーンが
混ざり合って、
彼女は急に怖くなり、
その場から逃げ出した。
駆け足で土手を
上がると、遠くから
救急車が見える。
彼女は一度も
振り返らずに、
急いで家に帰った。
部屋に戻ってから、
彼女は何度も何度も
悔やんだ。そして、
自分に腹が立った。
あの時自分が最後まで
夢を見ていれば…。
途中までも夢の
通りに動いていれば、
少女は無事でいられた
かもしれない。
あんなに大事には
ならなかったかも
しれない。
自分が…自分が。
小さく震える指を丸め
唇に押し当てていた。
電車の窓から通り
過ぎていく沢山の
景色を見送りながら、

幼い頃に起きた事件を
思い出していた。
その事件をきっかけに、

彼女は沢山の夢を見る
事になる。そして
その夢は現実で実際に
起こり、彼女は夢の
通りに動いた。
そうすればあの様な
苦しい思いをしなくて
済むと思った。
そうする事が溺れていた

彼女に対する
償いになると思った。
あれからどうなった
のかは分からないが、
救出された彼女は
動かなかった。
だから

最後まで見届ける事が
出来なかった。
それを思い出す度に、
胸が締めつけられる。
自分は特別な人間
なのだ。その力は
大きければ大きい程、
背負うモノ、
抱え込むモノは

それに比例する。
彼女は夢を見続ける。
どんな夢も見続ける。
それこそが、
多分もう、生きては
いないであろう
あの時溺れた少女に
対しての、自分が出る

唯一の事だった。
しかし最近の彼女は、
実は夢の通りに動いていなかった。
動く気力がなかった。
それは彼女がもう一つ
の夢を見るようにな
ってからだった。
その夢もまた現実に
起こるといふ直感が、
彼女にはあった。
それは死よりも
恐ろしい現実。
彼女はそんな夢を
見てしまった。
それでも今日、
イメージ通りに
下野へ向かっている
のには理由があった。
それもまた、夢の中
に出てきた言葉を信じて
の事だった…。

彼女の綺麗な瞳に、
通り過ぎる沢山の
景色が反射していた。
彼女はゆっくりと
その言葉を呟いた。
「今夜神が降りてくる」

ケンタは再びイメージの中へ入り出す。

視界は道路沿いから

駅へと目指す

登り階段の前、

自分の位置は、

道路の向こう側から

階段を見ている。

階段付近は沢山の人が

行き来する。

右奥に女の子4人、

手前黒コートを着た

サラリーマン、

年配のスーツ姿の男、

左には大学生風の

男女5人、手前に

女子高生3人、

スーツ姿の男女と、

向かって縦に並んでる。

ケンタが見ている間も

階段を上がってゆく人

降りてくる人達が

沢山いる。

丁度ケンタと階段を

挟んだ道路には、

横断歩道と信号が

付いていて、

PBR

境界線には

ガイドレールが

びっしり敷かれている。

P
B
R

向かって信号を

待つ人が9人。

信号が青に変わり、

駅に向かって動き出す。

P
B
R

向こうから歩いて来る

人達とケンタが

すれ違う少し手前で、

駅に向かう人達3人が

ケンタを追い越してく。

P
B
R

左に2人、右に1人。

ケンタは注意深く

周りを伺う。

視界の移動速度を

しっかりと記憶し、

自分の歩くスピードを

把握する。同時に

その時の周りの状況を、

P
B
R

出来るだけ素早く、

沢山の量を限りなく

リアル（精確）に頭の

中へと取り入れる。

その速さは、1秒間に

10ヶ所のポイントを

見て、その全ての

映像が鮮明に

記憶として残り、

それが色褪せない。

更に各カテゴリーの
項目（映像）を
いつでも引き出せる
ように、それぞれの
フォルダに収めてゆく
という特異な作業を、
ケンタの脳は瞬間的に
こなしてしまう。

P B R

しかもそのクオリティー
が半端ではない。

服装・輪郭・髪型は

勿論、爪の形・まつ毛

の作り（曲線、バランス、長さ、色等）・髪の毛

一本一本の軌道等

がしっかりと脳に情報

として入ってくる。

それは決して意識して

出来るものではなく、

無意識の領域。

物心が付いた頃から

そうしていたため、

ケンタはそれが自然な

事だと思っていた。

そんな性格からか、

ケンタは極端に

覚える事を

避けるようになった。

古いものを

捨てなければ、

新しいものは入らない。

P B R

しかしケンタの脳は、

記憶が記憶として

残り続けてゆく。

何だっつて、詰め込み

過ぎたら破裂する。

そんな単純な仕組みを

自分の脳に置き換えて、

ケンタは不安を覚えた。

それから、自分が

必要な時以外は、

覚えるという行為を

やめた。

覚える覚ええないを

繰り返していたら、

いつの間にかケンタの

脳は、その切り替えを

自然にするように

なった。その最中、

脳は目まぐるしく

活動し、

体内を駆け巡る

赤と青の螺旋が

脈打ち、躍る。

引き続きケンタは、

赤と青の螺旋を

躍動させて、周りの

状況に注意を払う。

すれ違う人。容姿や

歩き方、表情、

それぞれの音、それに

P B R
P B R

影響する自分の行動。

イメージと同じ状況を

限りなく具体的に、

記憶に残してゆく。

自分と近い距離で

すれ違う人の特徴。

右側：

長い真っ直ぐな髪の毛、

赤いボタンシャツに

オリーブのパンツを

着た20代後半の女性。

その女性の歩き方

（右手・右足を出した

時、下げる時の体の

寄り方）、表情

（目・口元等の動き）、

体の避け方を記憶。

左側：

紺色のスーツに

キヤメルの革靴。

みんなが着ていれば

心配ないという

日本人らしいベタな

組み合わせ。

（もしくはグレイに

キヤメルか。）

髪の毛はツンと上がって

整えられている。

こちらも同様に動作や

特徴を細かく記憶。

P
B
R

P
B
R

特に大きな変化もなく
すれ違う。

すれ違つてからの状況。

P B R

階段右側：

変化等に注意するも、

特に大きな動きは無く
すれ違う。

次の視界

階段右側：女の子が

4人。皆私服でまだ

10代後半。みんな

私服姿で年は10代後半。

P B R

その手前が

黒スーツ男20代後半、

焦げ茶スーツ男

40代後半が並ぶ。

階段左側：大学生風

グループ、男性3人

女性2人で全て私服。

手前女子高生3人、

スーツ男女と続く。

改めて前後左右の

状況を隈無く記憶する。

P B R

左右の状況を具体的に

記憶してゆく。

階段の手前に来て、

歩みを止めず

登り始める。疎らに

階段を降りてくる

人達が全部で4人。

左から自分を追い越す影。他人と自分の位置関係を注意深く観察する。一段登るまでの皆の動作、各段毎の状態、すれ違う人、登り切るまでの全てを記憶。登り切り、改札を挟んで右側が中で左側が外になる。そして、改札の一番遠くに駅員がいる。右側改札内：縦に並んで二つの塊、手前24、25、26、27人。PBR奥が14で合わせて41人。PBR左側改札外：改札から出てきた人、入る人合わせて…18人。プラス自分を追い抜いた8人。改札を出て正面（ケントの位置から左側）は行き止まりで窓が6つある。左右両方に階段が設けられているが、この南出口は正面口ではないため乗降者数は少ない。

それでも毎分数百人
以上が改札を通り
過ぎる。改札を境に、
沢山の人がケンタの
視界に入りは消えて
ゆく…。と、窓際に
一人の男性。

P
B
R

改札の中をじつと
見つめたまま動かない。
他にも3人が男の近く
に立っていたが、
その男だけ異様な
印象を残していた。
Tシャツ一枚で丁度
良い気温なのに、
男は、

長くだらんと
したダークグレイの
ミリタリー系の上着を
纏い、大事そうに
両手をポケットに
入れていた。

見ているだけでも
暑くなる服装なのに、
その男からはひどく
冷たさを感じた。
視界に入る状態と、
それを感じ取る感覚の
温度差が、異質だった。
しかしそれに気付く事

P
B
R

なく、人の流れは
止まらない。傍に
立っている人でさえ、
関心の優先順位は
携帯電話だった。

全ての人が時間と共に
動く中、その男だけ
止まって見えた。

男は少し顔を上げ、
駅の時計を、見る。

そして、ゆっくりと
右足から動き出した。

男が一步目を踏んだ
瞬間、改札付近には

12人の人が交差、
男の両脇に立つ人の
行動の記憶。

右側：メガネ、短髪
くせ毛の青年は改札を
見ながら立っている。

男が動き出した瞬間、
左足を伸ばし重心を
置いた為、右膝を
少し曲げる。

男が一步目を歩いた
瞬間、ポケットに
入っていた右手を
出しかける。それは
ちょうど右手の親指が
出た状態。

左側：黒髪長い

ストレートの10代の

私服女性。右手で

携帯を、左手は

ポケットの中へ。

じつと携帯を見つめ

ながら親指を素早く

動かす。

男が一步目を踏んだ

瞬間、目の動きが

携帯画面上部に

移動する以外は、

変化は見られない。

男は前へ進む。同時に

自分の視界も前へと

進む。歩くスピードを

視界で記憶。

男は6歩半歩いた所で

改札手前左側で止まる。

自分はまだ男の方向に

進んでいる。

8歩進み自分も止まる。

男は駅構内の時計を

見つめる。

一秒：二秒、その時。

突然大声が上がる！

その叫びは、なんと

ケンタ自らが放って

いた。何が起こった

のか分からず、

P B R

P B R

周りの全ての視線が
ケンタに集まる。
そしてケンタは
振り返って、もと来た
道を走り出す。
それはかなり早い
スピードで、視界の
状態もそれに比例する。
スピードはぐんぐん
上がり、

P
B
R

ケンタはその場所から
逃げる様にひた走る。
階段を降りきった所で
また視界に意識を
移した。信号の状態、
正面近くにいる人、
離れている人。
後ろから女性の悲鳴が
聞こえて後ろを向く。
状況が読めないまま
前を向き走り始める。
青の信号が点滅、
周りがざわめき
駅の方を見る。
横断歩道を全速力で
走り、明かりの少ない
住宅街へと入って
いった。自分が
走っているルートを
確認しながら、

場面場面を細かく
記憶する。少しずつ
喧騒から遠ざかって
ゆくと、後ろから
同じ方向に走って来る
足音が聞こえ始める。
それはとても早い
スピードで近づいて
くるのが分かった。
ケンタは後ろを
振り向かず、
スピードを止めない。
止めないまま、
素早く入れ替わる
景色を一画像一画像
頭に入れてゆく。
なるべく余計な事を
考えずに、その行為を
忠実にこなしてゆく。
ケンタは右へ曲がり、
左へ、そしてまた
右に曲がった。
視界は次から次へと
切り替わる。
後ろから聞こえてくる
不気味な足音はまるで、
獲物を追いかけ
ながら、相手の
つまづきや、体力が
落ちるのを静かに待つ

P
B
R

豹のように、少しずつ

近づいてくる。そんな状況を意識

しながら、それでも

ケンタは必死に走り

去る風景を記憶する。

左に曲がって直進

すると、数百メートル

先にまた明かりが

見える。その地点まで

走り切り、素早く

体を反転させ、

右に曲がった。

すると駅の階段出口の

信号にまた戻って来た。

P
B
R

現在信号は赤、

二車線ずつの車道は

車が途切れず

動いている。駅側の

歩道は、さつきより

人が増えていた。

信号まであと

数メートルの所で

状況を再確認。

右側：

手前の車線は右から

左へと車が走っている

状態、横断歩道に

まだ入っていない車は

2台。横断歩道まで

約7〜8m。そのあとに

3台が続く。前の2台の車までの車間約10m。

左側：

ケンタから奥の車線の車は左から右に。

こちらもほぼ手前と対角線上に同じような位置に1台走ってる。

横断歩道まで10数m。

ケンタ側の歩道に

信号待ち（というより異変を感じて騒然と

している）の人数6人

間隔を置いて立って

いる。一番左から

2人目と3人目の間が、

ケンタが走っている

直線上のコース。

後ろから追いかけて

くる男が通りに出て、

すぐにケンタを視界に

捉え、加速する。

その差5m。

ケンタの視界の

スピードは未だ

変わらない。

まさか。

いやな唾を飲み込み、

視界は赤信号の

車道へと入ってゆく。

ケンタは真正面を
向いたまま全速力で
走り抜ける。
ケンタの足が車道に
入った一歩目。
正面駅階段から
中年の男がこちらに
向かって降りてくる。
右側から
クラクションの音。
勿論それは自分に
対しての行為だ。
駅からは悲鳴や
叫びに似た声が、
波状になって
聞こえてくる。
ケンタは映像に
重なり合う音
（クラクションや
人の声等）の順番を
しっかりと
記憶してゆく。
その時、右側の車が
急ブレーキをかけた。
甲高いブレーキ音が
体中に響き渡る。
視界は前を向いたまま
移動速度も変わらない。
ケンタの右足が
前に出て地面に着く

P B R

直前で、右側から
女性が視界に入る。
髪の長いその女性は、
丁度ケンタの直線上にいる中年男に向かって
全速力で走ってくる。
ケンタのスピードは
まだ落ちないまま。
当然このままでは
目の前の男に
ぶつかるが、
男との接触は右側の
女性の方が若干早い。
そのタイミングで、
左側からも急ブレーキ
音が響いた。
自分の体は、車に
ぶつかる方が先か。
それとも男に
ぶつかるか…。
どうやら中年男は、
左側から気配を感じ、
ケンタから目を離して
首を左に曲げた。瞬間、
男と女性はぶつかり、
倒れ込む。ケンタの
視界から一瞬のうちに
ふたりは左へ消えた。
間一髪の距離で
ケンタは男に触れずに
一気に階段を

かけ上がると、
さつき聞こえていた
悲鳴や叫びが

P B R

はつきりと聞きとれる。
階段を登り切り、
騒然とした駅に着く。
火薬の匂いと煙が
ひどく目や鼻をつく。
うつすらと見える
風景の中、奥から
二つめの窓を指し、
ケンタは再び走り
始める。そこは

先程までアーミーの
服を着た男がいた
場所だったが、

P B R

今はもう姿はなかった。
鍵を外し素早く
右側の窓を開けると、
窓の縁に右足をかけ、
思い切り力を入れて、
線路めがけて
飛び降りた！
そこで映像が終わる。

！？……え。

意識が現実に戻ると、
いつものように
k e i がいる。
少し顔を見合わせて
からケンタは言う。

「その先の映像は…」
「……………ありません」
「…なんか、含んだ
言い方じゃ
ないですかね。」
ケンタがわざと丁寧な
言い方をすると、
k e i が首を横に振る。
「じゃあ飛び降りた後
オレはどうなんだよ」
「10mくらいだから、
大した怪我に
ならないです。
かすり傷程度…。」
首を後ろに動かし、
遠くを見るように
目を細めながら
k e i を見つめる。
K e i はへらつと笑って
見せる。

「この事件に
ケンタさんが入る
事によって、予定
死亡者数3人。9人の
人の命が助かります。」
「なんとも回りくどい
言い方をするもんだ」
「私は事実を
言っただけです。」
二人は見合う。

P
B
R

「あと、あれ何だよ。
駅で叫ぶだろ。」

あれもやるの…。」
ケンタの問いに
すぐに答える。

「…大事な言葉です。
犯人の行動を

変える事が出来る、

唯一無二のメッセージ」 P B R

気がふれたように、

一人駅で叫ぶ自分の

姿を思い出して、

頭をかきながら

うつむくケンタ。

「犯人は二人。一人は俺を追いかける

カーキ色の長袖の男と

再び駅に着いた時に

階段を降りてきた

キャップ帽の中年男。」 P B R

ケンタは返事を

待つように、

keiを見つめながら

言う。それを聞き

終えてからKeiは、

黙ってうなづく。

「6人生き残るとい

事は、どこかで6人…

死ぬんだな。」

「はい。相対的に…」

keiの静かな声を聞き、 P B R

ケンタは目を閉じる。

祈るように

何かを呟いてから、

ゆっくりと顔を上げ、

keiを見つめる。

「よし、行こうか。」

PBR

その声に頷く

keiの瞳も、沢山の

感情が重なり合った

ケンタの瞳を、

しっかりと支える

ように見つめていた。

同日 22 : 35

JR 線 渋谷行 6 両目車内。

ドア側角椅子に座っている男性は、窓の外の流れる景色を見つめていた。着こなした焦げ茶色のスーツは、これでもかと言う程くたびれていた。しかし白髪混じりの男性の顔は、とても嬉しそうだった。

膝の上に会社用の黒の鞆と綺麗に包装された袋を大事そうに持ちながら、その袋を眺めた。

中身は、今日で5歳の孫娘に買った、ブタのヌイグルミ。と、おもむろに隣の男性が席を立った。

もう着いたかとドアの方を見る。

流れる景色のスピードは先程のまま。

まだ駅に着いていないのを確認し、

再び隣の空いた席を見ると、

使い古しの紙袋が二つ折りで置いてあった。

膨らみがあったので、何か入っているようだ。

どうやら忘れ物だなと、ドアの前に移動した男を呼ぶ。

「すみません、忘れ物ですよ…。」

ドアに立つ男は、野球帽を被っていた。

帽子からはみ出たくせ毛には白髪が混じり、顔だけ少し振り向き、横顔だけを見せる。

それから、遠くへと歩いて行ってしまった。

白髪の男性は、少しの間、離れてゆく男の姿を見つめ、

再び袋を確認した瞬間、紙袋は大きな音をたてて爆発した。

何かと何かが存在し合う事で生じるズレやノイズ等。

それは必ずしも存在する数に比例するかは定かではないが、
沢山の差異がここに存在し、関係しあう。考えられるモノだけでも、
人は、どれだけの

自分の差異を意識する事が出来るのだろうか。

あるいは、出来ないのだろうか…。

野球帽を被る男

22：37下野駅着予定渋谷行きその電車は、同36分、丁度電
車の先頭がホームに入りかけたその時、7両目からの異常を機械が
知らせ、緊急停止した。

中途半端な位置で、電車は動きを止める。

7両目電車内

紙袋がパンツ！という乾いた音を立て爆発した。

すぐに煙が室内に広がってゆく。

となりの初老の男性は、突然の音と爆風により気を失っていた。

近くの人達は何が起きたのかきちんと把握出来ないまま、

手で体をかばい、しばらく動けずにいたが、

唯一一人、キャップ帽を被った白髪混じりの男性は、

状況を肌で感じて活き活きとしていた。

高揚した男の本能は、もう止められそうにない。

まずはゆっくりとメガネを外して、用意した黒のマスクを頭からず
つぱりと被り、

マスクの上からメガネをかけ直す。

一呼吸して、スタジアムジャンパーのチャックを下ろし、両手でジ
ャンパーを広げた。

ジャンパーの裏地には手榴弾が模様の様にびっしりとぶら下がって
いた。

それを見た人達は状況を飲み込めずとも、

みんな一斉に車両をつなぐドアへと駆け出す。
われが先にと走るため、他の人間の事など考えられる余裕はなかった。逃げ惑う人々の行為にはどれも、恐怖で支配されていた。慌てて走り出し、ヒールが滑り、そのまま前に倒れ込む女性が叫ぶ。
キャップ帽の男は目を輝かせてポケットから果物ナイフを取り出し、倒れ込んだ女性に馬乗りになって、
悲鳴をあげる女性の背中を何度も何度も突き刺した。
飛沫をあげた血が男の顔に縦に着く。
赤い線が着いたメガネの奥は無表情ではあるが、
怒りにも似た感情を解放しているようだった。

22時28分

ククリを持つ男の断片的な素顔。
長くだらんとした、緑の軍服を着た男は、
改札を出た駅構内の窓際に立ち、
改札内の電子掲示板をじっと見つめていた。

監視カメラの丁度死角となるこの位置から、状況を待つ。
22時37分渋谷行き案内にまだ、異常はない。

時間になるとあと何分だろうか…。ついに今日、約束が果たされる人間を超越する存在の誕生。その階段を歩いてゆく始まりの日が今日なのだ。新しい始まりには、終わらせなければいけない命がある。男は不意に、最近見るようになった夢の言葉を思い出す。

その言葉を聞いたのは、いや、その言葉を聞くことが出来たのは、きっと自分だけだった。だから自分は今ここにいる。

そして、これから何人になるかは分からないが、殺さなければいけない。

必要な犠牲。

全ては、完成された世界を取り戻すための、完成された自分になるための犠牲…。

しかし悲しむ事はない。その犠牲さえ、神により選ばれた人間なの

だから…。

それはとても素敵な事だと男は思う。

キレイな世界…。

その世界を、更に神により選ばれた自分が作り上げてゆく。

これはしるしだ。

崇高な声をキャッチ出来る者の、はじまりの日。

男は、高揚する自分の気持ち在必死に抑える。

ポケットに手を入れて、中に入っているナイフの柄を強く、強く握り締める。そこで突然、駅構内に大きな声が響き渡る。

「よく聞け！」

何者かの怒声によつて、有意義な妄想を壊された男は、声の聞こえた方々を向き、怒りを露にする。

南口出口の階段付近に男が立っている。

若い男性…。

バンダナが何かで頭をとめている。

向こうもこちらを見ているようだった。

するとまた

「お前じゃない。今夜神になるのはこの俺だ。

お前よりも派手にやる」

と、バンダナの男が叫んだ。最初は何を言っているのか一瞬解らなかつたが、一つ一つを頭の中で復唱して、ようやくその男の言った言葉を理解すると、

更に分からなくなつた。男は、ナイフを掴みながら混乱し始めた。

…なぜだ、なぜお前が知っている…。

俺の頭の中に降りてきた言葉、俺の捉えた特別な現象を、なぜお前が知っている…！？

バンダナの男は階段出口をかけ降りる。男の発した言葉の真意は、奴を追うことで多分、見つかるだろう。考えよりも先に、体が反応していた。

22時36分

37分下野駅着予定の電車はホームに入り、停車位置3m手前で緊急停止した。

ドアはまだ、開かない。駅員が、ホームにいる人の波を掻き分けながら、

異常箇所の車両まで小走りで向かう。

先頭から5両目、7両目に人が集中している。

皆慌てている様子だった。尋常ではない状態を感じ取る。

「どうなってるんだ…。」

思わず呟いた。6両目が白いもやで見えない。

急いで乗務員に知らせようと駆け出す。中にいる人達はドアが開かない事で、さらに混乱する。

この車種は古い型で、緊急用のドアコックが付いていない。

窓も内側から開けられない作りになっていた。

何とか外に出ようと、みな力づくでドアを開けようとする。

沢山の力が加わり、少しずつ両方の扉が離されてゆく。

手前の男性が肩を入れて、更にこじ開ける。

ドアが半分以上開いた所で、中の人間が一斉にホームになだれ落ちる。

同時に、叫び・悲鳴、車内に溜まり込んだあらゆる状態、感情も一緒に解放される。

そして、混乱は外にいた人間へと伝染し始める。

黒いマスクを被った男は、その上からまた野球帽を被る。

外になだれ込みながら逃げ惑う人々を見つめて、一人興奮を高めてゆく。自分も外に出て、ナイフと、服の裏に仕込んだダミーの爆弾で、

改札出口まで追い詰める。それから地獄絵図。

後は改札で待つ相棒が思う存分暴れてくれる。

「始まる…始まるぞ。」

帽子を深く被り直し、外に出て行く。

ホームから少し離れた所でk e iが状況を見つめていた。

「おかしい…。イメージでは電車は1m手前で止まるはずなのに…。

「k e iもまた、車内の空気に感染させられた様に、戸惑いを隠せなかった。」

男は走る。距離はあるが、必ず奴を捕まえる。

そんな思いで、ひたすらバンダナの男を追い続けていた。走りながら男は、ああ、これは仲間に怒られるなと思った。

しかし、この不可解な内容をきちんと説明して、

前に走る男を殺せば、奴もきつとわかってくれるはずだろう。

だからどうか、そっちは逃げ切つてほしい。

仲間の無事を祈りながら、徐々に逃げた男との距離を詰めてゆく。

運命の女性

下野駅から二つ手前の駅で女性は降りた。

頭の中のイメージで見た通りに、

沿線の道を、下野に向けて歩いていく。

違和感を感じたのは、歩いてしばらくしてから的事だった。

実際の光景がイメージで見た光景と少し違うからだ。

おかしい。今まで何度となく見てきた映像は、

いつも実際のもものと変わった事は無かった。

何か間違つた行動をしただろうか…。いや、特に問題はなかったはずだ。

イメージ事態も難しいものではなかったし、ミスをした覚えはない…。

イヤな予感が過る。

強くなる呼吸と共に、焦りが増してゆく。

歩幅はだんだん大きくなり、やがて彼女は走り出す。

なぜだろうこの胸騒ぎは

遠い昔に一度だけ体験したものと似ている。
急がなければいけない。全ては、下野で分かるはずだ。

追いかける男

逃げる男との距離はまだあるが、少しずつ、その間隔は縮まっていた。
た。

全速力で追いかけているなら

なぜアイツが俺の言葉を知っているのかという疑問が、
男の中でぐるぐる回る。その時…。

その時男は頭の中に入ってきた声を聞いた。

、追いかけてどうする、

その声を聞いて、走っている感覚、

疲労感全てが、頭の後ろからだんだん抜けてゆく…。

感覚が麻痺してきたのかと錯覚するほど、それは心地の良いものだった。

、追いかけてあの男をどうする、

「…アイツを捕まえて、言葉の意味を聞く。」

、そんな事をしていたら、お前の力が無くなってゆくぞ、

、無くなる前に吸い取れ！お前が始めるんだ、

「…俺が、始める…。」

、殺せ、ヤツを殺せ、

男に、例えようなない力がみなぎる。二人の距離はどんどん近づいていった。

逃げる男

ケンタは全速力で走り続けていた。

体力は限界に近づいていたが、止まる訳にはいかなかった。

スピード感全開の景色を細かく確認し、なんとか集中力を維持する。
動く仕事をしていて良かったとつくづく思う。

記憶は、

ケンタの記憶は正確に、実際の映像と重ね合わせられてゆく。問題は無い。今のところ、ほぼ完璧に役割をこなしていた。このまま走り抜く。走り抜いて、飛び降りる。

最後の角を曲がり、信号に到達。ケンタの足が車道に入った一歩目。正面駅階段から中年の男がこちらに向かって降りてくる。右側からクラクションの音。

勿論それは自分に対しての行為だ。

駅からは悲鳴や叫びに似た声が、波状になって聞こえてくる。その時、右側の車が急ブレーキをかけた。

甲高いブレーキ音が体中に響き渡る。

視界は前を向いたまま移動速度も変わらない。

ケンタの右足が前に出て地面に着く直前で、右側から女性が視界に………入らない!?

イメージではここで女性が右側視界に入るはずだ。

どういう事だ?しかしそれ以外の映像は記憶と変わらない。何とか車道走り抜けたケンタは、やっと視界に女性を確認出来たが、正面に立つ男との接触はもう避けられない。

ケンタは地面に着いている左足を力いっぱい踏みしめて、飛び上がる。

右足を高く上げて男性の顔面に合わせる。男性は避ける間もなく、靴底がめり込むかと思う程の鮮やかな飛び蹴りを見舞う。

野球帽の男は、後ろに倒れながら白目をむいていた。

ケンタは勢い余って、着地に失敗し、つまづく。混乱がケンタを襲う。

イメージと違う……。

混乱しながらも、改札出口の窓へ向かうため、体を起こす。そこで、後ろから強い気配を感じた。思わずゾクツとする。

振り返ると、追って来た軍服の男が目の前において、左腕を思い切り上げていた。

その腕の先端には、異様な形のナイフが光っていた。

男は一気に左腕を降り下ろす。

その動作は早すぎて、逆にゆっくりに見えた。

その時、男の後ろで、見たことのある顔が笑っていた。

「死神……」

ケンタは動かなかった。

死。

その一文字が、ケンタの頭の中に、残像のようにずっと残った。
それからケンタは目を閉じた。

男が降り下ろしたナイフの先端から、血がほとばしる……。

DESIGN : 21 アイギス

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたが受ける報いは非常に大きいであろう。」

トローラー《創世記》第15章1節

DESIGN : 21 :

22時42分 - 現在 -

ケンタの額から血がぽたぽたと流れ落ちる。

意識はあつた。しかし痛みは感じなかった。

ゆっくり瞼を開けると、ナイフの刃先が額の数センチ上にあつた。

その先にナイフを握り締める手…。

その手から、沢山の血がナイフの先端を通り、ケンタの額に落ちてきていた。

ケンタは瞳を見開き、フォーカスを広げてゆく。

血だらけのその手は、k e iのものだった。k e iの左手はナイフ

の刃にめり込み、肉が完全に裂かれ、

骨に少し引つかかった所で止まっていた。

飛び込んできた光景の壮絶さに、ケンタはただ見ているだけだった…。

22時37分 - 5分前 -

野球帽の男は、上着の裏地に付けた何十もの手榴弾を見せながら、駅構内にいる人達を、改札まで追い込む。

「逃げる、逃げる…クツヒツヒ。馬鹿な人間たち…皆殺しだ。」

改札付近では皆パニック状態で、駅員達もどうする事も出来ず、

沢山の人が押し合いながら逃げていたため、将棋倒しになった。

学生や子供、老人が沢山いる中、混乱の連鎖はもう誰も止める事が出来なかった。

しばらくその光景を楽しんでいた野球帽の男だったが、仲間が中々現れない事に、戸惑い始めていた。遅い！何をしている…。

仲間が改札から襲い、

また戻って来た人の山を、自分が襲い返す計画であった。

少しずつではあるが、人が流れを作り始め、逃げ出している。

まずいますい、にげてゆくぞ…。くそっ！……。

もういい、一人でも犠牲に出来た。また改めて殺ってやる、畜生！！

男はナイフを大袈裟に振り回しながら、大きな人の山を掻き分け、改札出口へと走り出した。

同時時間 改札出口付近

駅構内は混乱を極めていた。皆が一斉に改札へ逃げ込んだ為に、弾かれ、倒され、

先に潰されるのは、力の弱い（女性や子供、老人）人々。

泣き叫び、助けを求めても、誰も助けはしない。

それに気付いても、助ける事が出来ない。

その光景を静かに見つめる k e i。

問題の電車がホームに到着した直後、

k e i は改札出口の窓際に移動していた。

やがて人の山が二つに分かれて、暴れながらやって来た犯人の一人は、

改札を出てから、用意していた煙幕に火を付けて、放り投げた。

そしてそのまま階段へと走り出す。

煙幕からもくもく溢れ出る煙を他所に、k e i は男の後を追う。

運命の女性

22時39分 - 3分前 -

彼女は走る。

息を切らしながら、南口の駅までいよいよよという所で、速度を早め

る。

進行方向の先には、既にイメージで見た男性とおぼしき人物が見えた。

すると車道からクラクションや急ブレーキの音が次々に聞こえた。走りながら、反射的に音のした方を見る。

横断歩道を赤信号で駅に走る男性、

先には自分の延長線上にもいるキャップ帽の男性が待つ。

彼女は急いだが、どうやら間に合わない。

10m程手前にいる男性二人が先に接触する…。

今実際に起きている動きは、イメージには無かったものだ。

とうとう彼女は息を切らし、5〜6m手前で立ち止まった。

膝に手をあて、肩で大きく息をしながら、状況を見つめる。信号から走って来た男は、大きくジャンプして、

野球帽の男の顔に靴底を合わせる。

蹴られた男は力なく後ろに倒れ、蹴った男も体勢を崩して、男の隣に倒れ込んだ。

するとまた横断歩道から男性が、倒れた二人に向かって走って来た。この高い気温で厚着してるにも関わらず、彼女は、ゾクツとする冷たさを感じた。

その違和感が、とても気持ち悪かった。

追って来た男は左手を振り上げ、蹴った男性に、素早くその手を降り下ろした。

彼女は咄嗟に目をつぶり、顔をそむける。

それから何秒経ったかは分からないが、ゆっくりと目を開けると、いつの間にか二人の間には、小さな若い女性が立っていた。

その子の片方の手が、男のナイフを掴んでいる。

ナイフからは赤いものが絶え間なく流れていた。

彼女は、気を失いそうになった。

それでも意識を保てたのは、夢で聞いた声のせいか…、もしくは無意識の何かか…。

どちらにしても、それは彼女の意思によるもの。
もう目を背けないぞと自分に誓いながら、痛むこめかみを指で押さえる。

22時42分 - 現在 -

小さな手だった。

異様な形のナイフと比べると、それはとても小さい手ではあるが、Keiはしっかりとそのナイフを掴んでいた。
掴んだナイフは前にも後ろにも動かなかった。

ナイフを持った男は、生まれて初めて見るもののように、keiを見つめたまま動かないでいた。

（お前は誰だ…。小さな女じゃないか。

なぜこんなヤツが、オレのナイフを掴んでる…。

力を入れてもビクともしない。なぜだ…なぜだ。

お前は誰だ…。

今日は分からない事ばかりだ…。

おまえはだれだ…。

オレは、選ばれた人間じゃあないのか…。

オマエハダレだ…。）

次第に男の表情が変わってゆく。それはkeiに対する畏敬の念だった。

（……！…そうか…オマエハ、お前こそが…神なのか…。）

ナイフを掴んだ時からずっと、keiは視線を逸らさなかった。

やがて男は、ナイフからそっと手を離し、

無表情のまま、血だらけのkeiの手へと視線を移した。

パトカーの音が遠くから聞こえてきた。

男は、ポケットに入れてあった煙幕を2個取り出し、火を付けた。

ピンクと黄色の煙はあつという間に辺りを包み始める。

「何で邪魔をする！」

男がkeiに問いかける。しかし正確にはそれは、

男の身体に憑いた死神の声だった。

「なぜこの男をかばう」

死神の問いには答えず、k e iは言う。

「この人間の命をお前が奪う事は、限りなく不可能に近い。」

なぜなら…、k e iはイメージを死神に送る。

そのイメージを見た死神は、女性に興味を持ち始めた男子のようにk e iを見つめる。

「そうか…お前は…。こんな所で何をしてる。なぜこの男の側にいる。早く行け。」

「もう一度言う。二度とこの人間に近づくな。私の言っている事が理解出来なければ、お前もそこへ連れて行く。」

死神は顔を近づけ、k e iの瞳を覗き込む…。そして、k e iの心を確かめてから言った。

「…分かった。その男はもういい、行け。」

死神の顔を見つめながら、k e iは骨まで食い込んだナイフを、力いっぱい引き抜いてから、ケンタの手を取った。

その時、強いイメージがk e iの頭に入って来た。

違和感のある気配を感じて、k e iは右を向く。

煙の隙間から、髪の毛長い女性と目が合ったが、すぐに煙幕に紛れて、二人は再び駅へと向かう階段を登っていった。

煙幕の中にいる、死神に憑かれた男は、真っ赤に染まったナイフを拾い、横で寝ている野球帽の男の胸めがけて、そのナイフを突き刺した。

それは深く、刃の根元まで届いた。

口から血を吹き出し、刺された男が意識を戻す。

「…かつ…くほっ…。」

男を見ながら何か言っていたが、もう言葉にはならなかった。

そんな男の姿をじっくり観察してから、死神は、お前が代わりの命だ、と言いながら歩き出した。それから、駆けつけた警官に取り押さえられた。

その時にはもう、死神は男の体から消えていた。

出会う二人

「手の怪我、死んじまうぞ！」

「ケンタさんは、このまま向こう側の階段を降りて行ってください。私は病院に行きます。」

どちらにしても警察に色々聞かれるでしょうから……。

でもケンタさんが警察に連れて行かれたら面倒です、駅で叫んでますし。

私は大丈夫、応急手当はしてもらいます。」

「…k e i、すまない。俺のせいで大ケガさせてしまった…。」

「ケンタさんのせいじゃありません。原因は他にあります。…とにかく時間がありません。気をつけて」

無事でいてくれとだけ言い残して、ケンタはまた走り出す。

K e iはケンタがいなくなるのを確認してから、階段を降りてすぐに左へ歩いていった。

ケガした方の手首を片方の手で止めながら、手を上に向けた。

歩く先に髪の毛の長い女性が立っている。女性はこちらを向いていた。

目が合つて暫く、k e iは動かなかつた。そこでお互いが理解する。

初めて会った二人。不思議ではあるが、懐かしい感覚を覚える。

それから二人は、同時に歩き始めた。目の前に来て、彼女は言う。

「…あなたが…。あの、あなたもいつも同じ夢を見るの？」

「ええ。あなたと同じように…。」

K e iは悟る…。

「…私があなたの代わりに命。」

K e iは悟る。

それからk e iは、優しい瞳で彼女を包む。

気づくと彼女は泣いていた。

「…ごめんなさい、ごめんなさい…。」

その言葉にk e iは何も答えなかつた。ただ、優しい瞳で彼女を見

つめていた。

DESIGN : 22 3日後

kei、どうか無事でいてくれ、死なないでくれ。

そう言うと、ケンタは後ろを振り向かず走り出した。

階段をかけ上がり、改札通路に來ると、沢山の人がいる。

みんなまだ混乱した状態だった。いろんな人の肩や体にぶつかりながら、ケンタは人混みに紛れてゆく。

うまく流れに乗りながら、ケンタはなんとか反対側の階段を降りる事が出来た。

目立たぬよう、人が少なくなるまでは、小走りで移動した。

やがて静かな裏通りに出て、もう大丈夫かという所まで来てから振り返った。

!!!

目の前にはなんとナイフの男が立っていた！ドクン、と心臓が絞られ、鼓動が体中を響かせる。

ナイフの男は、ケンタに斬りかかった……!!!

「うあああああーッ!!!」

布団から飛び起きたケンタの体からは、沢山の汗が出ていた。

「夢……」荒い呼吸をしながら、額の汗を手で拭き取った。

のそのそと歩きながら冷蔵庫まで向かい、冷やしておいた麦茶を、音を鳴らしてゴクゴク飲んだ。

ふうーっと思を吐いて落ち着くと、事件のシーンが断片的に、強引にケンタの頭に入り込む。

男の顔。ナイフを降り下ろす腕。それを握り締めるkeiの手……、その手から流れる赤い血。

それはとても鮮明で、keiの血が額に当たる感触が何度も何度も甦る。

気を抜くと、いつの間にか入り込んでくるあの日の映像。

死に直面した恐怖、自己嫌悪、滲み合った負の感情は、無意識にケ

ンタの体を震わせた。

あの日ケンタは逃げ切った。しかしどのように逃げて、家まで着いたかあまり覚えていない。

あれから3日経つ。今日は特に仕事が手につかず、こうじに任せて早めにあがった。

事件から日を追う毎に強烈な記憶の残像に襲われる…。

事件の翌日、k e i から電話があった。

手の怪我は数十針縫う大怪我だったが、縫合も無事に終わり、大事には至らなかつた事で、気持ち少しほぐれた。ケンタは、k e i の指がちぎれなかつたかがとても心配だった。

人は、楽しかつた思い出は忘れない。

恐ろしかつた思い出はもつと忘れない。

だから、何かしの大きな現象が起きた直後は辛い、無理にその事を忘れようとするなとk e i に言われた。

辛い事を感じる行為もまた、生きるという事の一つだと。

無理に忘れようとする行為は、後になつてもつと自分を苦しめる…。それでもきつければ連絡しろと言つた…。

k e i、お前はきつくないのかと聞いたら、よく分からないと答えた。

オレはその返答こそよく分からなかつた。自分は苦しみを他の場所に飛ばせるとk e i は言つた。

他の場所…。

でも苦しみや痛みは人並みに分かるとも言つた。

とにかくオレは一人じゃないと。それを意識し理解しろとk e i は言つた。

苦しみは、痛みを理解する事…。それは、生命を理解する事だと…。

だから、苦しむという行為は、生きる上で、とても大切な事なのだと言つてk e i は携帯を切つた。

相変わらず宗教染みた感はあるが、今のオレに対して言葉を選んでくれたのだろう。

…頭では分かるが、心がついていかない。

精神が現実を追いつくまでじっと待つもどかしさを、苦しみというのだろうか…。

それが必然ならば、逃れるよりは、このままを受け入れる。この苦しみは必要な事なのか？

言い聞かせるのではなく、思う事、思う事…。そんな事を考えて、少し落ち着いてから、テレビの電源を入れた。夕方はどれも例の事件に関してだった。連日やっていたが、まともに見るのは今日が初めてだ。

「はい、こちら現場の下野駅です。事件から3日が経ち、駅周辺は徐々に落ち着きを取り戻しつつありますが、床に残る血痕などを見ると、事件の凄惨さを伺えます。」テレビから映し出された事件の現場、下野。画面がスタジオに戻り、犯人二人の顔が映った。左側に、ケンタを殺そうとした男が写る。

肌が粟立ち、自然に筋肉が強ばる。

粟立った事は意識にあったが、力が入っていた事はケンタ自身気が付かなかった。

暫く男の写真を見ていると、ふつと事件の映像が浮かんでくる。

… 男がナイフを降り下ろす 上から血が垂れて それはk e iの血で k e iの手からポタポタと沢山の血が k e iの手がナイフを ナイフは肉を裂き骨まで 光るナイフを ナイフの先が自分を見つめ 男がナイフを降り 男がナイフを降り下ろす 男がナイフを降り下ろす 降り下ろす 降り下ろす 降り下ろす ふりおろす …

「うっ！」気づくとケンタは頭を押さえていた。幾つもの残像に襲われ、ズキズキする頭の痛みで意識が現実に戻った。

暫くして、体に力が入っているのに気付く。

ふうっと一回深い息を吐いて、全身の力を抜いていった。

力が抜けてから、体がブルツと震えた。ケンタはテレビを消してす

ぐに布団に戻った。

静かになった部屋で、震える肩を両手で抑える。

ドクンドクンと心臓の鼓動が体を響かせるので、なんとか鎮まるように、深呼吸を始める。

「認めてください」k e i の声が聞こえた…気がした。

認める、認める、認める……。ケンタは深呼吸を続ける。

…認める。こんな状態を…こんな自分を。いや、こんなではなく、この自分を…。

どの自分もオレはオレか？…オレはオレ…。自分…自分…。そんな事を考えている内に、いつしかケンタは眠っていた。

運命の女性

パーマが緩くかかった、長い栗色の髪の毛を束ねて、彼女はPCのキーボードをたたいていた。

大きな窓が連なり、都内の景色が一望出来る高層ビルの一室で、20人程が慌ただしく動いている。

「かなちゃん、会議の書類出来た？」

「…あと24文字で終わります。」

画面を見つめたまま、彼女は答える。

「…了解。」

彼女は珂那という。珂那は眉間にしわを寄せ、怖いくらいの眼差しで画面を見入っていたが、瞳は深く、澄んでいた。

生きるという喜びをこれでもかというくらい実感し、希望に満ち溢れていたのだ。

あの事件の夜、珂那の人生は変わった。

k e i という女性に会い、珂那はもう一つの、本当の人生を歩み始めたのだ。

夢の言葉通り、やはり神が降りてきた。紛れもなくそれはk e i であったのだ。

もう言葉などいらぬ。精一杯、思う存分生きてゆくと、心から誓

える日々…。

珂那にはもう怖いものなどなかった。いや正確には、あらゆる恐怖を受け止める心が、既に備わっている。全てのものは常に変化してゆく。

同じ1日など決してないのだと興奮させられながらふと、k e iとの別れ際、彼女に言った言葉を思い出す。

事件当夜 k e iと珂那

「私があなたの代わりの命。」

それからk e iは、優しい瞳で珂那を包む。気づくと珂那は泣いていた。

「…ごめんなさい、ごめんなさい…。」

その言葉にk e iは何も答えなかった。ただ、優しい瞳で珂那を見つめていた。

すると警官がk e iに近寄り、手の怪我を確認して言う。「君、大丈夫か。意識は平気か？」

警官を見てk e iは、はいと答えた。

「南口に重傷者一名確認、救急車一台至急南口出口まで回して！」
警官は大きな声で無線機に話していた。

「とにかく車が来るまで駅で手当てするから、一緒に行こう。」
警官に連れられてゆく、k e iの小さな背中がまた滲む。

珂那は見送りながら、小さくささやいた。

「大丈夫。あたしがやるから…。」

しかしその声は小さすぎて、誰の耳にも届いてはいなかった…。

その部屋はキレイに片付いていた。カーテンは開いていて、窓からは夕日が射し込む。

フローリングは、斜めになった窓の形を作って、日が染みていた。

白いベッドに座り、床を見るときもなく見つめたまま、k e iはつぶやく。

「大丈夫。あたしがやるから……。」
それは、事件の日、別れ際に珂那がささやいた言葉。
「そう……。あなたがやるの。」

珂那のオフィス

「終わりました、今送ります。」

キーボードから手を離し、マウスで送信処理をしながら小さく一つ、珂那は息を吐く。

「お疲れ〜かなちゃん」

2つ隣のスーツの男性が珂那に言った。はいと少し笑顔で返し、P
Cの画面に目を戻す。

そしてまたあの言葉を思い出す。

大丈夫。あたしがやるから……。頭の中で言った言葉は、確かに珂那の口から出た言葉だったし、本人もそれは意識にある。
しかし……。

しかし彼女は、なぜその言葉を自分が言ったのか、その言葉の意味が何なのかは、さっぱり分からなかった。

分かっているのは、彼女が発したその言葉は、彼女の意思によるものではなかった。

それでも珂那はなんとなく理解していた。多分いずれ分かる時が来ると。そしてそれはそう遠くない日に……。

下町の雰囲気が強くなる町、三河山。

駅前に色々な店が軒を連ねてはいるが、ビルやデパート等の大きな建物がほとんど無い。

細い裏路地を、犬と散歩する老人。

ずんぐりした体型のその老人は、年の割にはまだ若く、甚平姿が似合っていた。

老人が歩く先には、打ち水をする女性がいた。

「こんにちは。今日もいい天気だね。」

甚平の老人が声をかける。あ、どうもこんにちはと笑顔で軽く頭を下げる女性は、

見た感じは老人よりも少し若い感じがした。

「あらコロチャン今日も元気ね。」

「え...？」老人は聞き返す。

「コロチャン、ゲンキ！」そう言って女性は犬とじゃれる。

老人は耳に付けた補聴器をいじりながら、調子わりいんだよなと苦笑いを浮かべる。

赤と青の首輪をした雑種犬は、女性にかまわれてご機嫌だった。

甚平の老人はその様子を和やかに見てたが、すぐに視線を写した。

「お。あつちの花も咲いてきたね。」

「ええ。今朝見たら結構開いてましたよ。」

玄関前に沢山の植木鉢が置いてある。

赤青黄のいろんな花が、所狭しと肩を寄せあっている。

暫く花壇を觀賞して、じゃどうもと軽く会釈してからまた犬と歩き出す。

女性は花壇を眺めながら、今は亡き夫を思い出していた。

青い空に小鳥が囀る。女性はその声をしっかりと聞き、

小さな自然を味わいながら、生きている事を実感する。

夫が大好きだった花。

自分が花の世話をすることで、夫と一緒に生きている感覚になる。それが、今の彼女を支える生き甲斐なのだ。

気づくと黒い大きな蝶々が飛んでいる。彼女は、目の前の花々に微笑みながら、ゆっくりと青空を見上げた。

DESIGN : 23

子守唄が聞こえる。

優しく歌うその声に、ケンタは、幼い頃の記憶を思い出す…。

ああなんて懐しい感覚。穏やかな母の声に、心が溶けてゆきそうだ。胸がきゅつとする、何とも言えない衝動を覚え、そこで目が覚める。真っ暗な景色を暫く見つめていると、やがて部屋の天井の輪郭がぼんやり現れた。

何かむずかゆい、懐かしい感情の残り香を味わいながら、

リモコンを探して、明かりを点ける。時刻は未明… 3 : 54。

暫く夢の余韻に浸っていたが、再びケンタは眠りについた…。

後天的下降螺旋

ダンボールに沢山積まれた野菜や果物を荷台に乗せて、

ヤオパチの白い軽トラはいつもの配達ルートを進んでいた。

「こうじの両親はいくつになったの？」

助手席でドアに肘をかけ、外の景色をぼんやり見ながらケンタは言った。

「母親が55で、オヤジがその3つ上ですね。」

「そっか。親は大事にな…。」

「…あ、はい。そうします。」一瞬、間をおいてからこうじが答えたのには、理由があった。

ケンタの母親がいない事をこうじは知っていた。

ケンタが10歳の時、ケンタの母親は事故で亡くなった。

今日見た夢のお陰で、ケンタは亡き母への思いにふけっていた。

そんなケンタの思いを察して、こうじは何も言わずに運転を続けた。店に着くと、卓郎（ケンタの父親）が扇風機の前に腰を下ろし、あああああ、と言って風に切られる自分の声で遊んでいた。

ケンタ達が乗った軽トラックに気付くと、楽しそうな顔をして二人に近づく。

「待つてたぜ〜」前ポケットに両手を突っ込んで卓郎は言う。

「また麻雀かよ」

「バカヤロお前、集金だよ。冗談じゃないよ〜」と言いながら右手を開いて前に出し、首を左右に小刻みに振るわせる、

ビートたけし往年のギャグを卓郎はやって見せたが、二人はそれを知らない…。

暫く首を動かし、卓郎はそれをやめた。

「じゃあな、行ってくるぞ。」

「あんま遅くなんなよ〜。」

卓郎は軽く手をあげて、ケンタの言葉に答えた。

午後、こうじが休憩から戻って来た。

「お疲れす〜、我燐舎（定食屋）愛情盛りでパンパンです。」

と腹を撫でながら幸せに苦しむこうじ。

「えーな〜。オレも久しぶりに我燐舎行くかな〜。」

…おっとダメだダメだ。こうじを見てて一瞬やる事忘れちゃった。

これから大事な任務ありだろ…。

「あれケンタさん、これからどっか出かけんですよね…確か三河山

…」

「こうじの幸せそうな顔見てたらすっかり記憶が飛んじまったよ。」

ケンタはエプロンを外し、店内奥の居間に上がってから、母親の仏壇に線香をあげた。

手を合わせ、心の中で色々呟く。

最後に、又八郎じいさんにも宜しくと、白黒の写真に伝えて、再び店内に戻る。

棚からリンゴを一つ取って、夕方まで頼むとこうじに一言残して、

ケンタは店を出た。

駅までの道を歩きながら、昨日k e iが見せてくれたイメージを思い出していた。

「鉢をズラす…鍵を外す…。」ケンタは腕時計を見た。

「おつとあと3分で次の電車が来るな…。」鉢をズラす、鍵を外すと何度か呟きながら、残りの道をかけていった。

盗む男

物色。男は何度もそれをして生きてきた。

数々の失敗と成功の中、なんとか御用の網をくぐって、シャバで生活している。

ズボンのポケットには護身用の果物ナイフを忍ばせてある。

人に対して使った事は、まだ一度もない。

これからも使う事は無いだろう。男にとっついていわば、保険だった。

身なりは汚れない。しかしポリシーはある。キャップ帽はあまり深く被らない。地味な襟シャツとグレイのスラックス。

出来るだけ堂々という。自然に、その場に溶け込む。

自分はその町の間人。その町に住む。その町を知っている。そしてその町に住む人達を知っている…。大事なのは、自分に思い込ませる事。

今日は実行の日。下調べは充分にしてある。大丈夫だ。そんな事を考えている内に、男は目的の駅に着いた。

電車が止まり、空気の抜ける音を出しながらドアが開く。

おもむろに駅名を確認する。三河山

ターゲット近くのメルクマールは、花が沢山並んだ家。そのそばにある家が今回の目的地。

男は颯爽と歩き出し、裏路地に消えていった。

ケンタ

三河山の駅に着いたケンタは、k e iから貰ったイメージをダイジ

エストに引き出してゆく。

ケンタがする今回の役割は、鉢植えを少し動かし、家の塀づたいの柵の鍵を壊す事。この二つだ。「やる事自体は子供でも出来ませんが、タイミングを間違えると、一人の命がなくなります。」さらりと衝撃的な事を言った kei。

思い出したその言葉は、ケンタに強く真剣な表情を作らせるには充分だった。

13時40分頃に、駅前の店の前で犬が吠える。それが始まりの合図だ。

、わんわん、わん、と3回鳴いてから、目的地へと動き出す予定。改札を出て、駅の時計を見ながら、ケンタは静かに合図を待つ。

田中小学校

がらんとした4年1組の教室で、今日の教室当番の二人が帰る支度をしていた。

「るみちゃんまだ？早くー。」

「待つて…。」

と言いながらカバンをしょったまま、少女は片手で無理矢理カバンに笛を突っ込む。

「はい、お待たせ。行こう。」二人は教室を急いで出て行き、静かな廊下をかけていった。

窃盗の男

目印である、花壇のように花が並んだ家を通り過ぎ、

男は隣の簡易マンションの階段を上がる。

二つめのドアの前に来て、傘立ての中に手を入れる。

傘立ての内側にある小さなポケットを見つけ、鍵を取った。

順調順調と呟いて、男は部屋の鍵を開ける。

ケンタは裏路地を歩いていた。自分の歩く速度、周りの状況、イメ

ージ通りに、最初の目的地まで進む。

暫く歩いて、花が沢山置かれた家が見えた。家の前で、鉢植えの一つを、家から離す状態で道側にずらす。

そして何事もなくその場を去り、次のポイントへと向かう。道すがら、下校中の二人の小学生とすれ違う。

ケンタは片方の女の子を観察するように、じっと見ていた。

少女と目が合った時、k e iに見せられた最初のイメージ（ケンタが介入しないイメージ）の断片が、一瞬よぎった。

瞳孔が開き、口を開けてピクリとも動かない少女の死のイメージ…。それは実際に今すれ違う少女だった。ケンタは慌てて目をそらし、次の目的地までの行動イメージに集中する。

まみと友達

「明日テストだね。」「…はああ、憂鬱だ。あれ、笛…ないよ、まみちゃん。」

「え…。」そう言うと、自分のランドセルを手でまさぐり始めた。

「やばい。落としたかな…。」

まみは来た道を振り返って考える。

「明日、合奏練習あるよね。」

「ちよつと戻って探してみる。」

「ごめんまみちゃん、これから家庭教師来るんだ。」

「うん、大丈夫。じゃまた明日ねバイバイ。」

「ごめんね、また明日。バイバイ。」

少女はうなだれながら、来た道をまた引き返した。

ポケットにある100円玉を手にとって握りしめると、小さな男の子は駆け出した。

駄菓子を買って、早く友達の家に行くのだ。

前の方で何やら物体が飛んでいる。

鳥？ムシ？いつも見る風景にトキメキは無いが、動くものは別だ。

いつしか少年は走るのをやめ、歩き始めた。動くものは蝶々だった。蝶が飛ぶ家には、沢山の花が咲いていた。

赤青黄や紫ピンク色とりどりで鮮やかだったが、少年の目には写っていない。

少年はいつしか、黒く大きな蝶に釘付けになっていた。

ずれた鉢植えが少年の足下にあっただが、それさえも気が付かなかった。

案の定、少年はキレイにつまずき、カシャンと鈍い音を響かせて、前から地面に倒れる。

思いつきり顔と膝などを打ったため、痛みと驚きで泣き出した。

少年の大きな声が、乾いた景色に響き渡る…。

盗む男

男は品定めを続けていた。金になるものを迅速に探し出す。

時間は数分、一つでも多く金目の物を見つけて盗む。なるべく物は壊さない。いわゆる男の、ポリシーだった。

テレビ横の棚を調べると、時計があった。

少し見つめてからすぐに時計をポケットにしまった。

すると、外から子供の鳴き声が聞こえる。

鳴き声はかなり大きく、しばらく続いた。

男は様子を伺っていると、心配した近隣住民が外に出て、大丈夫かと声をかけているようだった。

マズイぞ…。これ以上人が出てきたら面倒だ。

ここは早く切り上げようか…。男は急いだ。

日が照っているが、人気は無いため、のどかな雰囲気を見せる裏路地。

少女は帰り道に戻っているが、探し物はまだ、見つからない。このまま学校まで戻らなければいけないのかと考え始めると、自分に対してのムカムカが収まらない。

四つ角を右に曲がる。細い路地は、両側が塀に覆われている、暗い道だった。暫く歩くと、左側の柵が少し開いている。さっき通った時は多分、柵は閉じていた。変だなと思い、何気なく中を覗いて見ると、敷地内に、自分の笛が落ちている。

柵に手をかけると、カギがかかっていたいなかった。何であんな所にワタシの笛が…？と引っかかりながら、そーっと柵を開けて中に入る。

静かにゆっくり歩いて、笛のある場所へと近づく。その時、「ワンッ！」と大きな鳴き声が響き渡る。

大きな犬は、グルルル…と歯茎まで見せて少女を睨んでいる。少女は様子を伺いながらゆっくり手を伸ばして笛を掴んだ。そのまま音をたてないように後退りしてその場を離れる。

犬がもう一度大きな声で吠えようと、少女はピタッと止まった。足から震え出して、もう動く事が出来なかった。

5分前

ケンタは細い裏路地を歩いていた。目の前に何か落ちていた。可愛い絵の入った縦長の布袋。入っているのは縦笛だ。

それを手に取り少し歩くと、左側に黒い柵がある。錆びた柵は横スライド式の古い型。

鍵も錆びついてボロボロだった。右手で柵を横に引っ張り、ブロック塀と柵に隙間を作る。

錆びたカギが、柵を持って行かないよう必死でおさええている。ピンと横に張った鍵めがけて、ケンタは縦笛で思いつきり上から叩いた！

ガキツと鈍い音と一緒に、カギが壊れて地面に落ちる。

中に入ると、玄関前の右側に庭が広がっていた。

ケンタは、持っていた縦笛を庭へ放り投げた。

緩い放物線を描いて、袋で包んだ縦笛は、雑草の上にポトツと落ちた。

ふうつと一回息を吐き、周りを伺いながら、ケンタはすぐ先の角に身を隠す。

誰もいない裏路地。これで自分が出る全ての行動が終わった。

あとは、静かに状況を見守る…。

しばらくして、小学生位の女の子が向こうから歩いて来た。

左右を繰り返し見ながら、こちらへと向かって来る。

少女は、柵がある家で立ち止まった。柵が少し開いていたからだ。

暫くそこから様子を見ていたが、恐る恐る柵を開けて、少女は中に入ってしまった。

ケンタは複雑な思いでそれを見つめるが、命あつての痛みなのだと自分に言い聞かせる。

あとはイメージ通り、もう一人の人間がここへ来るのを待つだけだった。

男は部屋を出て、階段を降りて行くと、さっきの泣き声が近くなる。階段を降りきって、花がある家の前を見ると、小さな男の子が泣いていた。

男の子の目の前にいる年配の女性が、抱き上げて声をかけていた。

「ごめんなさい、痛かったね大丈夫？」

膝が擦りむけて血が出ていた。

大した怪我じゃないと思いつつ男は、男の子に微笑んだ。不意に、

男は、自分の少年時代を思い出す。

いつだったか、泣いているその少年と同じように、自分も母親にあやされた記憶。

守ってくれる人が、こんな自分にもいたのだと。

その懐かしい記憶に戸惑いながら、男は静かにその場を去った。

早足にならず、落ち着き過ぎもせず、男は古い景色を後にした。

しばらく歩き、次の角を曲がる。

細い道は両側の塀に覆われていて、まるで迷路のようだった。少し歩くと犬の鳴き声が聞こえた。

犬が吠えた所で何も変わらないが、わざわざ騒がしい所に行く必要もない。

男がきびすを返すと、子供の泣く声が聞こえる。

ん…？と犬の鳴く方へと歩き、柵の外から中を伺うと、小さな女の子が犬と向かい合っている。

大きな犬は今にも飛びかかりそうだ。

その瞬間、犬が猛然と少女に襲いかかった！

男は咄嗟に駆け寄って少女を助けようとしたが、遅かった。

犬は少女の左腕に噛み付いた。わっ！と少女が泣き出した。

誰かが来る様子もなく、男は目の前に落ちていた棒の様な物が入った布袋を手に取って、犬の眉間目掛けて思い切り降り下ろした。

キャンツ！と弱い声を出して、犬は少女から離れた。

噛まれた少女の左腕は、肉が裂け血が流れていた。男は急いで少女を抱き寄せて、犬に向かって布袋の武器を構えた。必死だった。恐怖を抑えられず、男の手は震えていた。

それでも、自分よりも弱く小さな命を放っておけなかった。

暫く睨み合った後、犬は何回か吠えたが、飛びかかっては来なかった。

男はゆっくりとあとずさりをして、犬から離れていった。

柵の所まで来て、もう大丈夫だろうと思いい、後ろを向いて一目散に走り去った。

男はそこから少しでも離れようと、とにかく走った。

一つめの十字路を超えた辺りまで来てから後ろを振り返ったが、後について来る者は誰もいなかった。

電信柱と木の影から、ケンタは二人の様子を伺っていた。

息を切らせて苦しみながら、男は、大丈夫かと少女に聞いた。

少女は泣きながら男に抱きついた。ケンタは不意に、k e iから貰ったイメージを思い出す…。

思い出しながら、イメージと現実を重ねてゆく…。

現実の二人の動作

二人は抱き合っている。

ケンタのイメージ

男は部屋を物色している。物音に気付き、玄関の方を見ると、少女が立っていた。

二人はお互いを見たまま止まっている。

現実の二人の動作

少女は男にしがみついたまま泣き続ける。

ケンタのイメージ

少女が叫び始めたため、男は咄嗟に少女の口を抑える。

現実の動作

もう大丈夫だよと男は少女に呟く。

イメージ

「静かにしてくれ、頼む。」少女の耳元で男はささやく。

「頼む。何もしないから、言う事を聞いて…。」少女は男の力に屈したのか、徐々に力を抜いて行く。

すると、廊下から声がする。住人らしき人物が帰って来たようだった。

男ははつとしてそれに気をとられ、少女の口元を抑えていた手が緩んだ。

すかさず少女は助けを求めて、声をあげる。

少女は、誰か助けて！と思いつき叫んだが、言葉になったのは最初の二文字だけだった。

再び男は口を抑える。少女はバタバタと足を振って必死に抵抗する。頼む！と心で叫びながら、男は力を強める。廊下から人影が消えるまで暫く時間が経った。

少女は力いっぱい抵抗する。男も負けじとそれを抑え込む。

やがてドアの閉まる音が聞こえる。男は暫く外の様子に耳を澄ませる。

静かになった状況に安心して、我に返る。少女を見ると、おとなしくなっていた。

フーッと長い息を吐き、男は力を少し弱めると、少女は力なくうなだれた。

男は慌てて少女を大きく揺すったが、少女は人形のように揺れていた。男は恐怖を覚え、少女から手を放した。

鈍い音を立てて、床に仰向けで倒れた少女の瞳は、天井を見つめたまま、もう動く事はなかった。

現実

男は少女の怪我した手を見て、自分の上着の袖をちぎり、肘の部分をきつく結んだ。

「じきに血は止まるが、消毒しなきゃな…」

男はそう言つと少女の頭を撫でた。もう泣くなと付け加えて、おんぶする姿勢を取った。

イメージ

男は恐る恐る少女に顔を近づけて、状態を確認したが、

やはり少女は動く事はなく、開いた瞳孔は、ずっと天井を見つめたままだった。

男はそつと少女の頬に手を当てる。頬にはまだ、肌で感じ取れる体温があった…。

現実

少女は泣きながら男におんぶされる。

その背中に体を預けて、少女は男の温もりを感じた。

イメージ

男は、少女がさっきまで生きていた事を実感して、後ろにのけぞり、慌てて部屋を出た。

部屋に残された動かない少女。近くには、縦笛が落ちていた…。

現実

少女を背中に抱き、人間の温かさを思い出す。

ああ自分もまだ人に何か出来るのかと、有り難くもなった。

その時男は自然に願う。最低でもいい、なるべく普通に生きたいと。もうやめよう。

もうやめたいじゃなく、もう、やめよう。

男は、少女の小さい温もりに誓った。

男はまた、盗みを繰り返すかもしれない。それでもこの少女との記憶はちゃんと残ってゆく。

ここであつた出来事や考える意識は、全て事実として残り、そして、思う心は、本人の中では全て真実だ。

人と人との関係性など、キツカケ一つで大きく変わる。

そこには色々な背景が影響するが、結局はそんなものだと、ケンは単純に考えた。

考えながらケンは、ずっと二人の背中を見つめていた。

その光景はまた、ケンタの中で真実になる…。

繰り返しされる自身の過ち、弱さの下降螺旋は、

考え方や見方一つで上昇のイメージを持つ事が出来るが、それはあくまでもイメージの話。

しかしそれは、自分を見つめる為の、小さいが確かな、上昇する螺旋になり得るかもしれない。

犠牲は、超時間的な、超感覚的な、無制限なものと結びついている。それは、たとえ「無駄」であろうと、「無意味」ではない。犠牲は、全ての人間的な事象を超えた神秘を啓示するものである。カール・ヤスパース

DESIGN : 2 4

ケンタは何もない地平線に一人佇んでいた…。

「ケンタさん…」振り向くと、こうじがこちらを見て立っている。

そんなこうじの姿を見た俺は、唐突に言った。

「こうじ、お前、何やってんだ…」こうじはケンタを見て何かを言っていた。

「ケ…んは、る…いで…」

ケンタはそれを聞き取れない。更にこうじは続ける。

「げ……して…だ…い」途切れ途切れで全然分からない。

「何言ってるの?」ケンタは聞くと、こうじは笑う。なぜ…こうじは笑う。なぜ。

考えていると、そこで目が覚める。暗い部屋で一人、ケンタは今何時なのか知っていた。

手探りで目覚まし時計を探し、ライトのボタンを押す。

短針は4の、長針は55のそれぞれ手前に止まっている。

最近繰り返し見る夢。目覚めると、決まって同じ時刻、3 : 5 4 。

何度も見る訳のわからない夢にとらわれ始めて、もう1週間が経つ。

「なんでだ、なんで…」考えながら、ケンタはまた眠り始めた。

しかしその日はもう、夢の続きを見る事はなかった。

ヤオパチではいつもの一日が始まっていた。

こうじの存在をいいことに、相変わらずオヤジは麻雀に明け暮れて

いた。

自分のオヤジだと思つと情けない。それでも今では、側にいるたった一人の肉親だ…。

こうじが棚を整理しながら言ってきた。

「この前ケンタさんと、親の事を話してて、なんかしたいなつて思つて、

今度母親に花でも買ってやろうかなと思つてるんすけど、やっぱり古いつスカね…。」

「いいんじゃないの気持ちだから…。」

「ケンタさん花くわしいつすかね。」

目を半開きにしてやらしい笑顔を向けるケンタ。

ああ間違えた、こいつに言うべき言葉ではなかったと、後悔の笑いを向けるこうじ。

二人は再び作業を再開した。

するとケンタが思い出した様に、

「ガーベラ…。」

「え…?」

「ガーベラ。お母さんにあげる花…。」

「どんな花つすか…?」

「……………」

ケンタの顔が少し歪む。こうじのその質問で、記憶を整理し、花の特徴を思い出したケンタは、

同時に事件の内容も鮮明に蘇っていた。鮮やかな色がキレイなガーベラ。

それに重なつて映る犯人の顔。殺されてゆく子供たちの顔、顔、顔、顔…。

沢山の人の表情がケンタの脳を襲つ。内蔵に異常発生、食道逆流。ケンタは急いでトイレへ向かった。

「あれ、ケンタさん…?」

《ブブブウ……ン》と響く音が棚から聞こえる。不安そうにケン

夕の様子を伺っていたこうじは、棚の上のケンタの携帯を見つめた。何度も重く響くバイブと一緒に液晶ディスプレイに映る表示、k e i という文字がぼんやりと見えた。

こうじはそれに気を止めず、売り場にもどりながら壁にかかった丸時計を見た。

足下の箱に当たり、あああつと言いなながら前につんのめる。

慌てて手をだした為、肘を強く打って、今度はあたおあゝつ！と言つて床でもがき出す。

入口では常連客のオバチャンが、大根と茄子の袋を両手に持ちながら、くねくね動くこうじをぼうつと眺めていた。

オエエええーっ！と店の奥からも何か聞こえてきた。

しばらく様子を見てからオバチャンは、置いとくよと言って小銭を棚の上に置き、いなくなつた。

こうじは精一杯の力で声の方を向いて、小さくなるオバチャンの背中を見つめ、

あしたーっ！と叫んだが、もうオバチャンには届いてなかった。

壁にかかった丸時計は、15:54を指していた…。

DESIGN : 25

時速40/kmで移動する景色をじつと眺めていた。行き交う人、信号機、電信柱。

ケンタが乗った車内から見る景色は、一定の流れで、それがとても心地良かった。

フロントガラスから黒い影が見えたのですぐに前を見ると、

スーツ姿の男性が飛び込んで来て、あつと言う表情と同時に心臓がキュツとしまった。

飛び込んだ男性はケンタの車にはねられるが、ビタッとフロントガラスにへばりつき動かない。

やがて目や鼻や口、耳等から血が垂れてゆき、大きく見開いた眼球がケンタを睨む。

口をパクパク動かし、たすけて、たすけてと言っている。ケンタはその顔を覚えている。

初めての事件に自分が入った時、黒い車にひかれて死んだ男性だ。

急いでブレーキペダルを力いっぱい踏み込み、フロントガラスの男性は反動で前に転げ落ちた。

直ぐにドアを開けて男性の元に走るケンタ。血だらけの男性を抱えだが、ピクリとも動かない。

だめだと思い、また車を発進する。しばらく走っていると、景色がCGに変わっていた。

ああそうか、自分は、自動車教習所にある疑似運転の機械を操作しているのだと納得する。

突然、フロントガラスにまたスーツの男性がへばりついている。

さっきと同じ男性が、手足をジタバタさせ、顔中血だらけで、口をパクパクさせながらケンタを見つめる。車は止まらない。

気がつくとも男の顔が目の前にあって、助けてという大きな声に驚き、

ケンタは飛び上がった。

真っ暗な部屋の中に一人、首から伝う汗が、ゆっくりとシャツに染みてゆく。

夢から覚めても、男の苦しむ顔が何度も現れた。

その現象を受け止めていたせい、ケンタはしばらく動けなかった。

あれは俺が殺したんだ…。

違うそうじゃない、止められなかったんだ。

でも、殺したんだ…。

俺は、やってない。俺じゃない…。

間接的に殺した…。

いや、仕方がなかった。あの男性を助けたら違う誰かが死んでいた。

言い訳だ…、殺してないと…。

……。

殺してないとは言いきれないだろ。

じゃあその時、俺はどうすれば良かったんだ…。

……。

教えてくれよ。

なあ…。

……………。

時計は、丁度夜中の2時を指す。

暫くボーッとしていたが、今夜ある事件に介入する事を思い出し、ますますケンタの表情が曇ってゆく。

ぼんやりとした頭をさすり、記憶を呼び覚ます…。

5時間前（午後9時）

駅前のファーストフード店は平日の夜という事で、客はまばらだ。

2フロアある2階は全て喫煙席、窓側右から2つめの席にケンタとkeiが座っている。

二人いつものように両腕を重ねてイメージの中へ入っていた。

イメージに入る時間は、ケンタにしてみればとても長い時間だが、周りから見ればそれは数秒の出来事。

ゆっくりと手を離すケンタ。神妙な面持ちは、今回の事件の内容を表しているのか…。

「ど、どういうこと？」ケンタが不安気にkeiに尋ねる。

「…そういう事ですね。」

Keiの瞳がはつきりと、そして強い輪郭を帯び、言葉を続ける。

「ケンタさんは今回、この事故の犯人になってもらいます。」

朝もまだ明けない時間、水道の蛇口を回し、湯呑みに水を注ぐ。口元から水をこぼしながら、一気にそれを流し込んだ。

ごくごくと音をたて、全部飲み切った所で、ケンタは、ぬるい、と思わず顔をしかめた。

ふうーっと息を吐いてシンクにもたれる。しかし人生とは…これ程予測不可能なものなのか。

まさか、まさか自身が犯人になるなんて…。とりあえず最低でも生きていれば、人間何かをしようと思える。

生きるために働こうと思う。何かの事情により働けなければ、浮浪者になるか、死ぬかの二者択一…。

いやいや、人間追い詰められると選択肢が増えるのか…。

いやそれでも新聞に載るような罪は犯したくない。というか度胸がない。そんな自分が、人に危害を加えかねない犯罪を、これから犯すなんて…。

「オレそんな困ってねーよ。困ってもやらないよ多分…。」

いつしか独り言が出る始末。人生屈指の悩みと不安を抱えて、とりあえずまた床につく……。

13:00 ヤオパチにて

急いでヤオパチに駆け込むケンタ。休憩1時間ジャストギリギリセーフ。

お帰りなさいとこうじが迎えるが、苦悶の表情を浮かべている。

「悪いなこうじ、上がる準備しといてくれ。」

考え事してたらいつの間にか1時間になってた…くそお、先にトイレ行かせて…。」

お腹に手をあてて、前傾姿勢のままヨロヨロ店内奥に向かうケンタに、こうじが尋ねる。「その腹の膨らみ、やはり…。」

ケンタが振り返り、見つめあう二人。我憐舎、とだけ発してトイレに消えるケンタ。
ケンタを見やり、愛情盛り、とつぶやきながらそつとエプロンを取るこうじ。

こうじは今日のシフトを早上がりにもらっていた。
ふと店内を見回して、棚に大事に置かれた野菜や果物をなんともなしに見ていると、

沢山の色や形があるなと改めて感嘆するこうじ。

色んな顔があるんだなと思いつつ、傷付けないように優しく桃を手取る。

「うん、これも家に買って行こうか。」

どれも熟した色合いの桃が並ぶ中、
とびきり甘いのはどれかなと選んでいるこの瞬間を、こうじはゆっくりと楽しんでいた。

締め作業もそつなくこなし無事に仕事を終えて、

帰るがてら夕飯を済ませようと蕎麦屋、威儀板^{イギキタ}に寄り、

へぎ蕎麦ならぬイギ蕎麦を頼んだケンタ。

店内には汚ならしいチリチリパーマのロン毛ヒゲづらオヤジのポスターが、所狭しと張つてある。

着てるもの、背景の雰囲気を見ると、サッカー選手？

笑顔でケンタを迎えるポスターの男の存在感に圧倒され、思わずグラスを口に運んだ。

この男は一体：？ケンタはこの店に入るのは二度目だが、ポスターのせいで全然落ち着かない。

しかし蕎麦の味は文句のつけようがなかった。

このミスマツチが、ケンタを再び来店させた理由だった。とにかく、イギ蕎麦は旨い。

自宅に戻ったケンタは、まず風呂を済ませ、朝からそのままの洗
物を片付けてから、

さすがに今日はアルコールは入れる事が出来ない為、麦茶で一服。
暫くテレビを見ながら休憩した。

これから自分は犯人になるのだという重責で、不安と憂鬱感は次第
に大きくなっていったが、

テレビの前で話すダウンタウンには、腹の底から笑う事が出来た。
笑う事が出来たから少し落ち着き、それから準備を始めた。

最初に、いやにも目立つその髪を、黒のバンダナで徹底的に押さえ
込んでから、

縁色のキャップの深い帽子を被った。

よしと言って発煙筒、果物ナイフ、ニットのフェイスマスクを順々
にリュックに詰めてゆく。

ため息を吐き俯いていたが、視線を戻し、目の前を少し睨み付ける
ように見つめてから、時計を見た。

「そろそろ、か…。」

電車を2回乗り換え、30分程。ケンタが降りた目的地は繁華街が
近いため、人の通りはまだ多かった。

もう既に、ケンタはイメージとの闘いを始めていた。

ケンタ以外にもバス待ちが数人いたので、目立たないポイントに立
ち、バスの到着を待つ。

他のバス待ちの客はケンタの存在に気づいているが、

ただそこに人がいるという程度 of 感覚、記憶が薄い存在。

それは距離感ではなく、その場所と空気と人の雰囲気、感情の融合
で決まる。

例えば、その風景を1つの絵で切り取った時のそれぞれの存在感。

その中で極めて気づきにくい場所でバスを待つケンタ。

涼しい雰囲気を作っているが、心臓はバクバク鳴っていた。

事前にk e iから貰ったチケットを確認する。

23時15分発 大阪行。

「大阪まで行けないんだよな…。」
気づくと、しつかりとした重量感のあるバスが停留所に近づいて来た。

どうやらこれが今回の事件のバスと認識し、じっと観察してからケントは最後尾で乗り込んだ。

最前列から二列目の左側の窓側に腰を降ろし、出発を待つ。

待っている間、今なら引き返せる、今なら引き返せると何度も自問自答したが、

定時刻にバスのドアが閉まり、納得するようにケントは目を閉じた。バスは夜の街をゆっくりと走り始めた。

夜の高速バスは、混雑した繁華街をようやく抜け出して、今は静かな道路を走っていた。

滑らかな動作でハンドルを左に切る運転手。

その運転手を左斜め後ろから見つめるケンタ。見つめながら、keiの言葉を思い出す…。

『23時15分発 大阪行きのバスの運転手は、乗客を道連れに自殺します』

自殺：道連れ…。自殺はまだ分かる。なぜ道連れという選択を図るのかとkeiに尋ねた。

keiは直ぐにイメージをケンタに送った。それは彼（運転手）の生い立ちから成長の過程、

現状の私生活等の断片的イメージ。その概要は、彼がイジメにあった事、

両親からの偏った愛情、信頼ある人に裏切られた事、

愛する人に非道い別れ方をされた事、自分の子供の死などだ。

ケンタは、なぜその男の状況までわざわざイメージで見せるのかと聞いたらkeiは、

『イメージのトレーニングです。言葉や文字に対して、具体的にイメージするようにして下さい。』

想像力の乏しさは、他人の痛みに鈍感になってゆきます。

鈍感になると言う事は他への感情が薄くなる。

薄くなると言う事はやがて言葉や言動など、表現として現れる。

その表現を受けたものは内的または外的に傷が付きまます。

細かい傷も重なればやがて大きな窪みになる。

窪みがある程度まで埋められない現代のスピードについて行けず、

歩いていこうと思っても、周りがそれを容認しない事を感じて捉えられ、一度止まるしかない。

それは、その場所から外れるという事。或いは、生きる事をやめるという事…。

想像力の欠如が、今のこのぎすぎすした世の中を生んでいて、自殺者の数も比例して増えてゆきます。

なので、想像力は自分も含め、相対する全てに繋がってゆくからとても重要です。』

重要な事が多すぎると感じながら、ケンタは男のイメージを見た。イメージを簡潔にまとめると、家庭生活上で沢山嫌な事があったから自分よりも幸せであろう他人を道連れにして死のうと思った。

運転ミスに見せかけられれば、親族にもあまり迷惑はかけなくて済む。

しかしやはり、人を道連れにするという行為は、ケンタにはどうしても理解出来なかった。

ハンドルを握る男に向けた視線は、自然に険しくなっていた。乗客のそれぞれの位置をイメージから確認。

左側：

前から先頭は2列目に一人座るケンタ、男性2人（学生）、

男性1人（30代）、女性2人（社会人）、男女2人、カップル

男性2人（若い）、女性2人（20代）、女性2人（10代）、男

性1人（若い）。

右側：

先頭は2列目（運転席があるためケンタの1つ後ろ）の親子2人、

女性2人（若い）、男女2人、カップル

男性1人（後ろの2人と知り合い）、男性2人（前の2人と知り合い）、

女性1人（30代）、男女2人、カップル女性2人（学生）。

乗客29人+運転手1人の計30人がこのバスの中にいる。

ランダムに間隔が空いている場所もあれば、前後密接している席もある。

keiのイメージは、3：23に男がハンドルを大きく左にきって、

ガードレールを飛び越え道路下に横転。運転手を含む11人が死亡。11人。とんでもない数だ。たった一人の行動で、たまたま、ではなく運命的に集まった29人の命が死と隣り合わせになる。

まさかと思う事が起きてしまうから、世の中は恐ろしい。

さりげなく右斜め後ろを見ると、親子が映った。

30代の母親と小学生くらいの男の子。二人を見てケンタは、イメージの中の二人を思い出す。母親が子をかぶさるようにして倒れた姿。

いろんな所に血が付いていて、二人はもう動かない…。

曇り始めた瞳を前に戻して、ケンタは前方の景色を見ながら、今見たイメージをぼやかした。そして小さくため息をついた。

ため息はとて小さくて、本人さえ気づかない。

今度は貧乏揺すりが始まる。それは小さな震えをこまかすためのものだったが、

無意識だったため、暫くは自分がそれをしてる事も気づかなかった。夜の闇はますます黒みを帯びてゆく。少しずつその闇が車体に染みてゆくように、

ケンタを乗せた高速バスは、死の目的地へと静かに向かっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2630c/>

Let go レットゴウ

2010年10月16日21時46分発行